愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第141集

でんぽうじのだいせき

伝法寺野田遺跡

2007

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

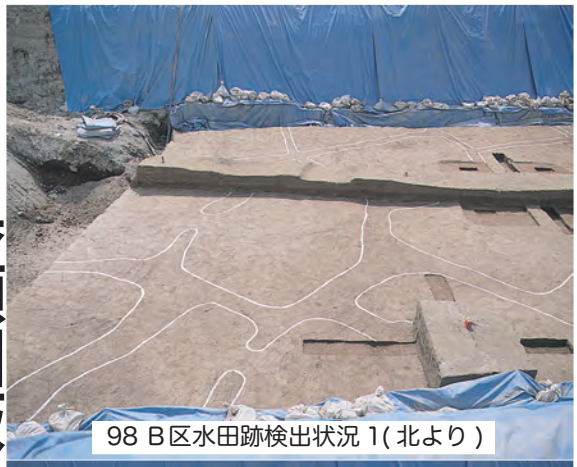
愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

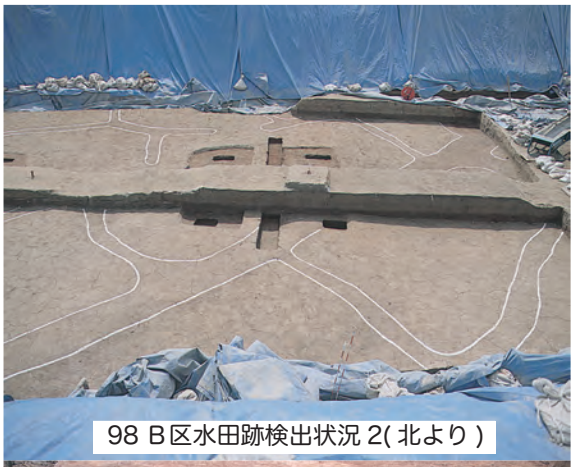
カラー巻頭図版 1

伝法寺野田遺跡の遠景（西より）

98 B区水田跡全景（北西より）

カラー巻頭図版 2


98 B区水田跡検出状況 1(北より)


98 B区水田跡検出状況 2(北より)


98 B区水田跡検出状況 3(北より)


98 B区水田跡炭化物検出状況 3(北より)


98 B区水田跡稲株痕検出状況 1(南より)


98 B区水田跡稲株痕検出状況 2(南より)


98 B区水田跡稲株痕検出状況 3(西より)


98 B区水田跡稲株痕検出状況 3(南西より)

カラー巻頭図版 3

98 B区水田跡セクション (大畦畔部分)

98 B区水田跡セクション (ST13・14)

98 B区水田跡セクション (ST02・13)

98 B区水田跡セクション (ST01・02)

98 B区水田跡セクション (ST15・17)

カラー巻頭図版 4

98 B区水田跡全景(北東より)

大畦畔脇から出土した銅鏃

序

一宮市は、古くから木曽川などの河川の恩恵を受けている、歴史ある土地柄です。尾張一宮として名高い真清田神社を始めとして、現在も身近に親しまれている歴史的遺産もありますが、浅井古墳群・黒岩廃寺など、当地域の先人の布石を感じることのできる歴史的遺産もあります。また、馬見塚遺跡などは、全国屈指の縄文集落であるばかりではなく、調査経歴も古く、早くから考古学成果が知られていました。近年では、東海北陸自動車道関連や一宮パーキングエリアなどの調査で、市域ではさまざまな埋蔵文化財の様相が明らかとなってきました。今後は、これら埋蔵文化財の保護と活用が、将来にわたる大きな課題となりつつあります。

さてこの度、伝法寺野田遺跡の発掘報告書を刊行する運びとなりました。この遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての水田跡が面的に広がって見つかりました。当地域における農耕の様相および水利事情を解明するのに、非常に良好な資料であると考えられます。また、この大畦畔脇から無茎銅鏃が出土しています。当地域での銅鏃の形としては珍しいばかりか、水田跡から出土したことも、この資料の意義を考える上で重要となるでしょう。

最後になりましたが、発掘調査につきまして、地元住民の方々をはじめ各方面の方々にご配慮いただき、さらに関係各機関および関係者のご指導とご協力をいただきましたことを、厚くお礼申し上げる次第であります。

平成 19 年 3 月

財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長　林　良三

例言

１．本書は、一宮市丹陽町に所在する伝法寺野田遺跡 (県遺跡番号 02103) の発掘調査報告書である。

２．発掘調査は、五条川右岸流域下水道建設に伴い、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて、財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

３．調査期間は平成 10 年４月から平成 14 年７月である。

４．調査担当者は、平成 10 年度が服部信博 (主査、現一宮興道高校教諭)・加藤紀博 (調査研究員)・早野浩二 (調査研究員)、平成 11 年度が春日井毅 (主査、現一宮市立宮西小学校教頭)・伊藤太佳彦 (調査研究員、現常滑高等学校教諭)・木川正夫 (調査研究員、現愛知県教育委員会文化財保護室)、平成 14 年度が石黒立人 (主査)・川添和暁 (調査研究員) である。

5.　調査では、以下の方々からのご協力を受けた。

平成 10 年度

調査補助員　杉山恭也

発掘作業員　青井紀子・青井三男・安藤民子・新木ヨリ子・石田優子・伊藤孝枝・伊藤洋子・岩田良雄・植手香代子・鵜飼京子・小泉幸雄・木村誠子・木村末子・木村幸雄・近藤　宏・斉藤ツヤコ・桜井きみ子・桜井きみゑ・桜井須美子・桜井美枝子・桜井三千代・杉山加代子・杉山秀子・鈴木節子・瀬戸和子・瀬戸照之・田中道子・深町美恵

平成 11 年度

発掘作業員　板倉恵子・伊藤正三・伊藤百合子・今田清美・岩田範子・織田久子・近藤洋子・新海澄子・柴山香代子・杉田千代子・杉本たみゑ・中島幸雄・中谷いみ子・羽田野明美・服部澄枝・服部冨子・松井英雄・三橋春巳・三輪美恵子・宮崎俊樹・山田琴美・山之内なつ子

平成 14 年度

(株) 岡三リビック　現場代理人　西濱　努、調査補助員　西村匡広、測量技師　義村幸雄

発掘作業員　青井義昭・安藤民子・伊串小夜子・石黒真由美・伊藤久喜・杁山秀子・上田一之・鵜飼京子・木村末子・木村誠子・木村幸雄・櫻井きみ子・櫻井三千代・鈴木とめ子・杉山加代子・竹田友美・寺沢なつ江・西尾孝行・堀尾美枝・湯浅澄信・益口ヨシ子・水野良子

６. 平成 10 年・11 年発掘調査時の航空測量に関して、株式会社日建技術コンサルタントから支援を受けた。

７．遺物整理、製図については次の方々のご協力を受けた。

伊藤ますみ・後藤恵里・斉藤佳美・服部里美・中村たかみ・牧ゆかり・三浦里美・山田有美子

(整理補助員)

遺構図および遺物実測図トレースについては、アイシン精機株式会社に委託し、川添が校正した。

８．出土遺物の写真撮影については金子知久氏 (スタジオ遊) の手を煩わせた。

９．発掘調査および報告書作成に際しては、次の関係機関の指導・協力を受けた。

愛知県土木部・愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター・一宮市教育委員会 (五十音順、敬称略)

10．発掘調査および報告書作成にあたり、次の方々および機関から御教示・御協力を頂いた。

久保禎子・城ヶ谷和広・土本典生 (敬称略)

11．本書の執筆は、主に川添和暁が担当した。第５章第１節は鬼頭 剛 (愛知県埋蔵文化財センター調査研究員)・古澤　明氏（有限会社　古澤地質調査事務所) の共著である。第２節を東京国立文化財研究所 平尾良光・榎本淳子・早川泰弘氏から、第３節を藤根　久 (パレオ・ラボ) から、玉稿を頂いた。

12．本書の編集は川添和暁が行った。

13．調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系に準拠する。ただし、新基準で表記してある。

14．調査記録および写真記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

15．出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　次

挿図目次

表目次

遺構平面図版目次

写真図版目次

第１章　遺跡の位置および調査の経緯

第１節　環境と立地

1. 遺跡の位置

遺跡の存在する一宮市は、愛知県の北西端にあり、市北部から西部へと約 18 キロメートルにわたって接する木曽川を境として岐阜県側と対峙している。平成 17 年４月１日､旧一宮市･旧尾西市･旧木曽川町が合併し、人口約 37 万人の新生「一宮市」となった。東西約 15.3 キロメートル ・南北約 13.3 キロメートルを測り、総面積 13.91 平方キロメートルを占める。

一宮市をはじめとする尾北地域は、繊維産業を基盤として栄えてきた地域として全国的に有名である。近代以降は絹織物が盛んであり、それに伴い養蚕も行われていたようである。市北東部は犬山扇状地の末端に位置しており、この地形を利用してかつては養蚕用の桑畑が一面に広がっていた。その後、絹織物に代わり、毛織物が繊維産業の主体となっていく。現在でも、製糸業･染色業･ワインダー業・撚糸業・機織業など繊維産業に関わる工場および町工場が多く存在する。

図１　遺跡位置図

江戸時代では天保年間に用水が引かれており、現一宮市東部には「新般若用水」が引かれ、扇状地周辺の農業用水として利用されてきた。

市内には、JR 東海道本線および東海道新幹線が走り、近代以降東西をつなぐ大動脈としての役割を果たしてきた。自動車道では高速道路の４つのインターチェンジと一宮ジャンクションがある。東西の大動脈である東名・名神高速道路のみならず、太平洋側と日本海側をつなぐ東海北陸自動車道の結節点であり、交通の要所としても重要な位置にあるといえよう。

２. 地理的環境

調査地である一宮市伝法寺地域は、北東方向の犬山扇状地の末端部から南西方向に広がる自然堤防地帯に位置する。一宮市域には多くの自然堤防が確認される（森山 1972・国土地理院 1968)。それは、犬山緩扇状地を分流してきた古木曽川水系の諸河川が礫質の粗粒堆積物を扇状地部に堆積させたあと、相対的に緩傾斜の低地帯に砂質堆積物を旧流路の両側に沿って自然堤防として累積してきたからである。古木曽川水系諸河川の流路変遷は古文書等から推定されており、犬山扇状地地域には東方より一之枝川・二之枝川・三之

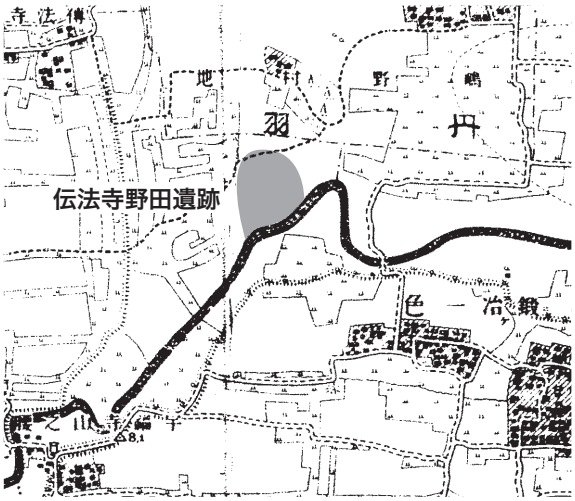
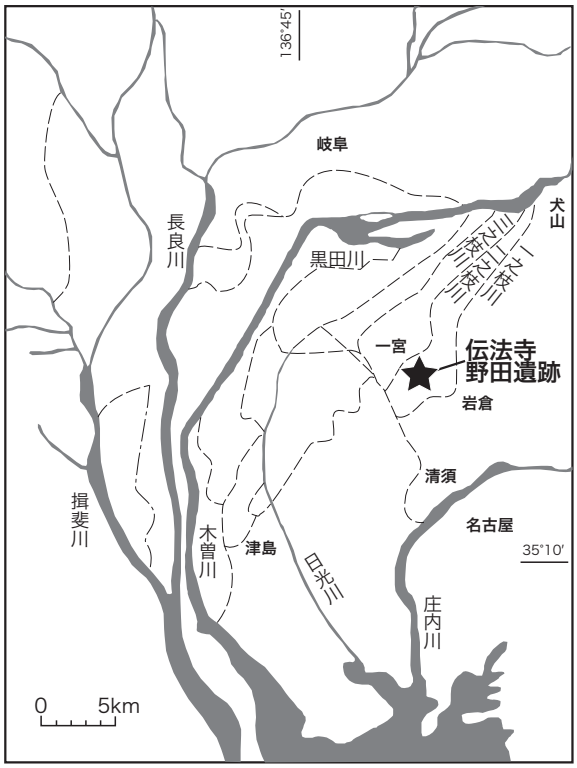


図２　伝法寺野田遺跡位置図 (１：20,000)



——— 旧流路 地形文書より　—·— 旧流路 文書のみ

図３　流路の変遷と遺跡位置
（多田・伊関 1955 に加筆）

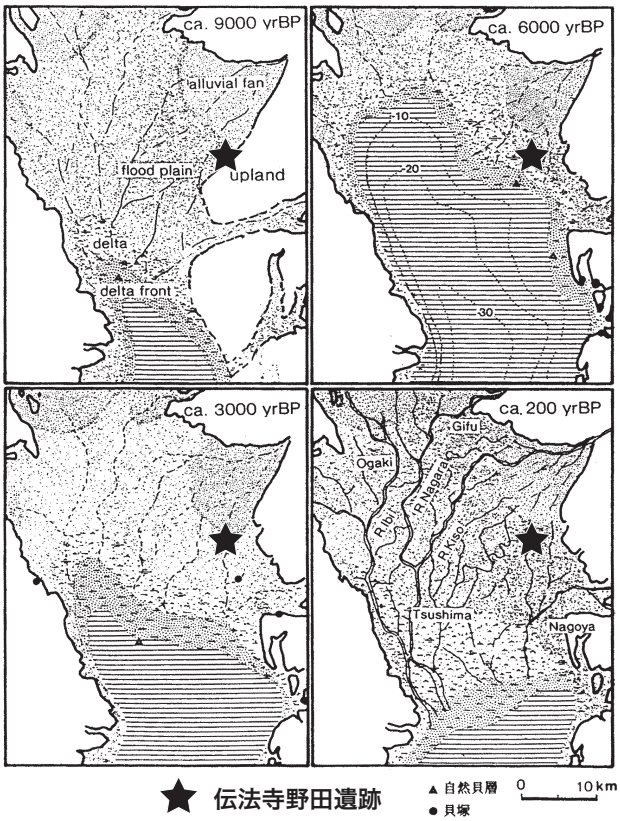


図４　古地理の変遷と遺跡位置
（海津 1994 に加筆）

枝川・黒田川が北東から南西方向に流下していたことがわかっている（多田・井関 1955）。調査地は二之枝川－青木川－五条川水系にあたり、周辺域の自然堤防間の地形的に低い部分にはかつての河道跡が多く認められる。濃尾平野の完新統堆積物は臨海部のボーリング資料をもとに松沢・嘉藤（1954）や古川（1972）により南陽層と呼ばれ、下部粘土層・上部砂層・最上部粘土層に区分されている。後氷期の海進（縄文海進）以後、伊勢湾に臨む三角州は沖合への急速な前進付加堆積（プログラデーション）を進行させた。その前置層および前置斜面前縁部の堆積物が上部砂層である（海津 1994）。調査地域地下には層厚数 m の粗粒砂層が存在し、周辺に多くの自然堤防をもつことからも、後背地から三角州へ砕屑物を供給する河川の存在が示唆される。歴史時代に入ってからは、主に古木曽川河川水系流路の側方移動やジヤンプによる環境変化を反映する堆積物により構成されている。

伝法寺野田遺跡は五条川の右岸に位置し、標高７m 前後の自然堤防上から河川に向かって（北から南へ）の傾斜地に立地する。現況では、表土の堆積などから河川への傾斜は著しくなく、平坦地化している。当地は西走する五条川が南西方向に若干蛇行する地点にある。微高地などは、往年にわたり、かなり安定したものであった可能性もある。

３.歴史的環境

伝法寺野田遺跡周辺は、近年、発掘調査が継続して行われており、埋蔵文化財の資料・情報の蓄積が著しい。限られた紙面ではすべてを網羅できないため、特徴的な遺跡を取上げて、歴史的環境の概観に変えたい。

縄文時代の遺跡としては、野辺遺跡・ノンベ遺跡・権現山遺跡・三ツ井遺跡・西北出遺跡などがある。岩倉市域では縄文時代中期後半から、尾張低地帯では後期初頭から活動の痕跡が窺えられる。後期初頭から前葉の竪穴住居跡など多数の遺構が見つかった権現山遺跡は伝法寺野田遺跡の北側に近接する遺跡である。しかし後述するように、堆積土の様相など遺跡の様相が全く異なるようである。西北出遺跡では、堅果類の貯蔵穴が調査されている。縄文時代晩期の集落跡として、学史的に知られている馬見塚遺跡も北西３km ほどの地点に位置する。

弥生時代の遺跡としては、三ツ井遺跡・猫島遺跡・元屋敷遺跡・大地遺跡などがある。三ツ井遺跡では、弥生時代前期の黒色土が検出されており、水田跡の可能性が指摘されている。猫島遺跡は弥生時代中期前半を中心とする環濠を有する集落である。住居跡・方形周溝墓などの埋葬遺構のほかに、環濠の外 (南側) の低地部に、小規模な水田跡が検出されている。これらの事例は、伝法寺野田遺跡で検出された水田跡との比較において、重要な意味があろう。元屋敷遺跡では、弥生時代前期の良好な資料が出土している。大地遺跡は、学史的に有名な遺跡で、復原された竪穴住居など公園整備がなされている。また、古墳時代の遺跡としては、権現山遺跡・元屋敷遺跡・小森遺跡・三ツ井遺跡・岩倉城跡などが知られている。

元屋敷遺跡は、当遺跡から北西方向 400m に位置する。一宮市のこれまでの調査でも各時代の遺構・遺物が出土しており、当地域の様相を代表する資料と言えよう。伝法寺野田遺跡の調査に合わせて、若干の遺物が表採されている (図７～９)。

1001 ～ 1018 は弥生時代前期の土器である。深鉢・甕・壺片が存在する。壺片を中心に赤色化した鉱物が混じる胎土がみられる。1919 ～ 1023 は弥生時代後期の土器で、壺・高坏片である。1024 ～ 1026 は古墳時代の土器で、壺と台付甕片である。

この表採資料には、古代以降の遺物が数多く存在している。1027 ～ 1032 は古代の須恵器・灰釉陶器である。1039 は土鈴で、古代の時期と思われる。古代の布目瓦は 27 リットルコンテナに１箱分存在している。そのうち２点のみを図化した (1040・1041)。

1033 ～ 1037 は中世山茶碗、1038 は天目茶碗で、戦国期のものと思われる。

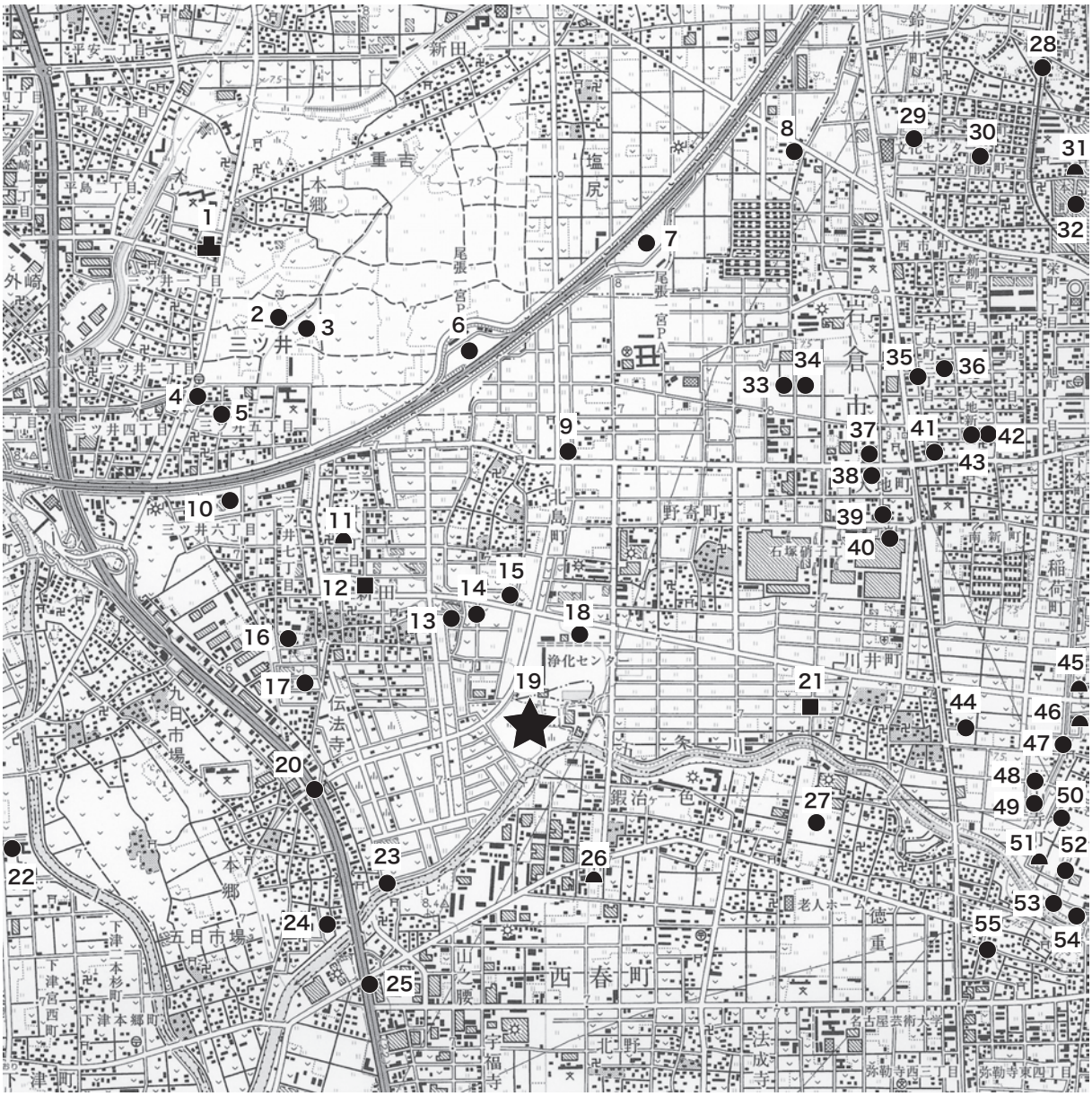


図５　周辺の遺跡位置図１(１：25,000) 国土地理院「一宮」をもとに作成

表１　周辺の遺跡一覧表 (番号は図５・６と一致)

番号	遺跡名	所在市・町	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
1	重吉城跡	一宮市			●	●	●	
2	東高龍遺跡	一宮市				●		
3	飛所遺跡	一宮市				●		
4	茂八杁遺跡	一宮市		●		●		
5	六所遺跡	一宮市		●	●	●		
6	三ツ井遺跡	一宮市	●	●	●	●	●	
7	猫島遺跡	一宮市	●	●		●	●	
8	蕪池遺跡	一宮市		●				
9	西道海戸遺跡	岩倉市		●				
10	池之上遺跡	一宮市	●		●		●	
11	稲荷山古墳	一宮市			●			
12	伝法寺廃寺	一宮市				●	●	
13	元屋敷遺跡	一宮市		●	●		●	
14	北島白山遺跡	岩倉市			●		●	

番号	遺跡名	所在市・町	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
15	前田遺跡	岩倉市			●	●		
16	飯守神遺跡	一宮市		●		●	●	
17	西大門遺跡	一宮市			●	●	●	
18	権現山遺跡	岩倉市	●		●	●	●	●
19	伝法寺野田遺跡	一宮市		●	●		●	●
20	伝法寺本郷遺跡	一宮市			●	●	●	
21	薬師堂廃寺	岩倉市		●	●	●	●	
22	下津遺跡	稲沢市						
23	五輪ヶ淵遺跡	一宮市				●	●	
24	寺跡遺跡	一宮市						●
25	宇福寺遺跡	西春町						
26	高塚古墳	西春町			●			
27	鍛冶ヶ一色遺跡	西春町		●	●	●	●	
28	御山寺遺跡	岩倉市		●				

図６　周辺の遺跡位置図２(１：25,000) 土地条件図をもとに作成

番号	遺跡名	所在市・町	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
29	法成寺遺跡	岩倉市				●		
30	天神遺跡	岩倉市			●			
31	新溝古墳	岩倉市			●			
32	宮東遺跡	岩倉市		●				
33	乾出遺跡	岩倉市						
34	穴田遺跡	岩倉市	●	●				
35	西町畑遺跡	岩倉市	●	●				
36	東町畑遺跡	岩倉市		●				
37	大地遺跡	岩倉市	●	●				
38	葉広遺跡	岩倉市		●	●	●		
39	野辺遺跡	岩倉市	●	●				
40	ノンベ遺跡	岩倉市	●	●	●			
41	判定遺跡	岩倉市	●					
42	西北出A遺跡	岩倉市	●	●	●		●	

番号	遺跡名	所在市・町	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
43	西北出B遺跡	岩倉市			●			
44	寺山遺跡	岩倉市				●		
45	神宮寺古墳	岩倉市			●			
46	西出古墳	岩倉市			●			
47	西出遺跡	岩倉市					●	
48	吸田遺跡	岩倉市			●			
49	石塚遺跡	岩倉市		●				
50	前畑遺跡	岩倉市			●		●	
51	高畑古墳	岩倉市			●			
52	下流遺跡	岩倉市			●			
53	小森遺跡	岩倉市			●		●	
54	西生田遺跡	岩倉市		●				
55	徳重遺跡	西春町			●			

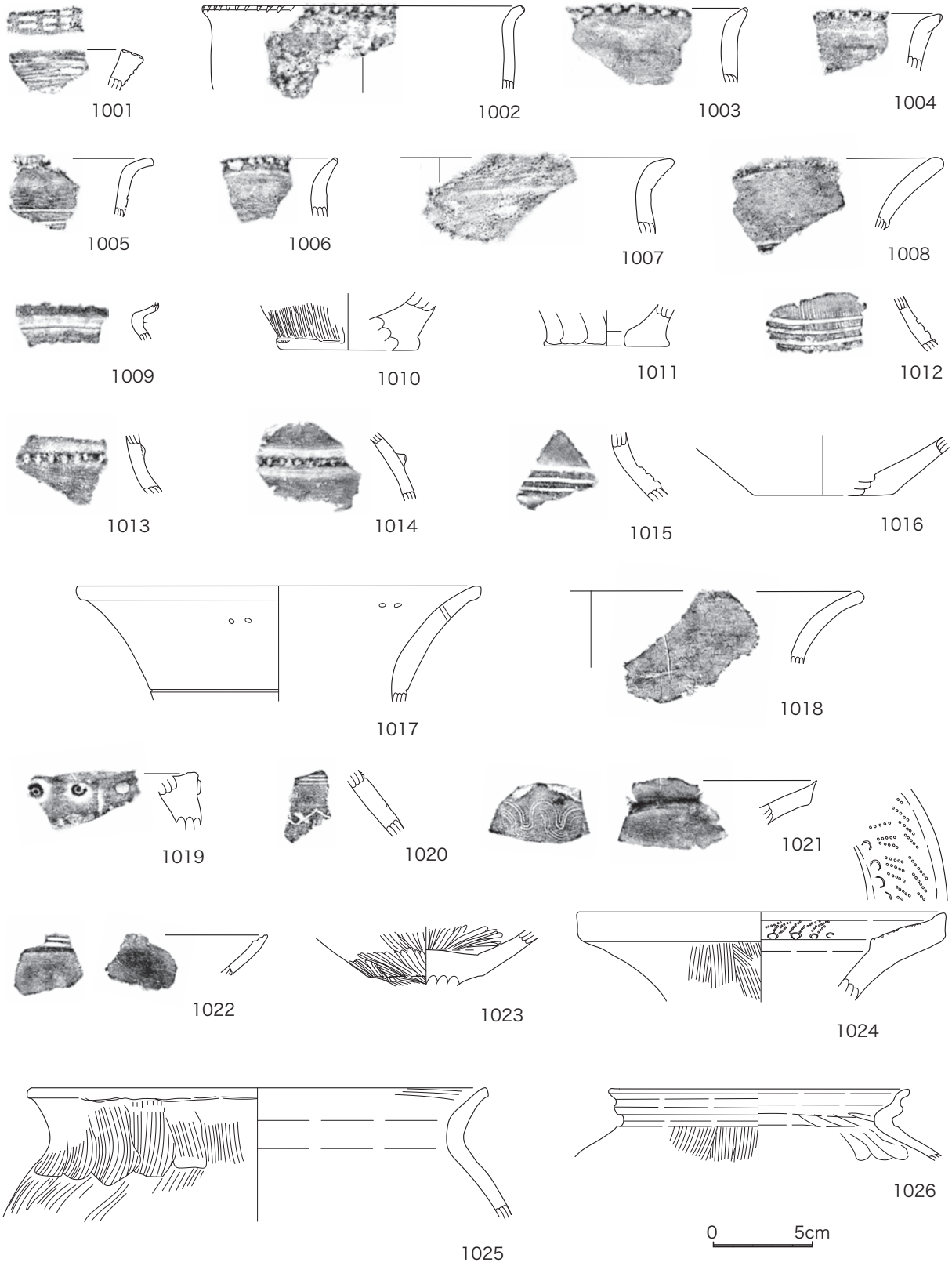


図７　元屋敷遺跡表採遺物１

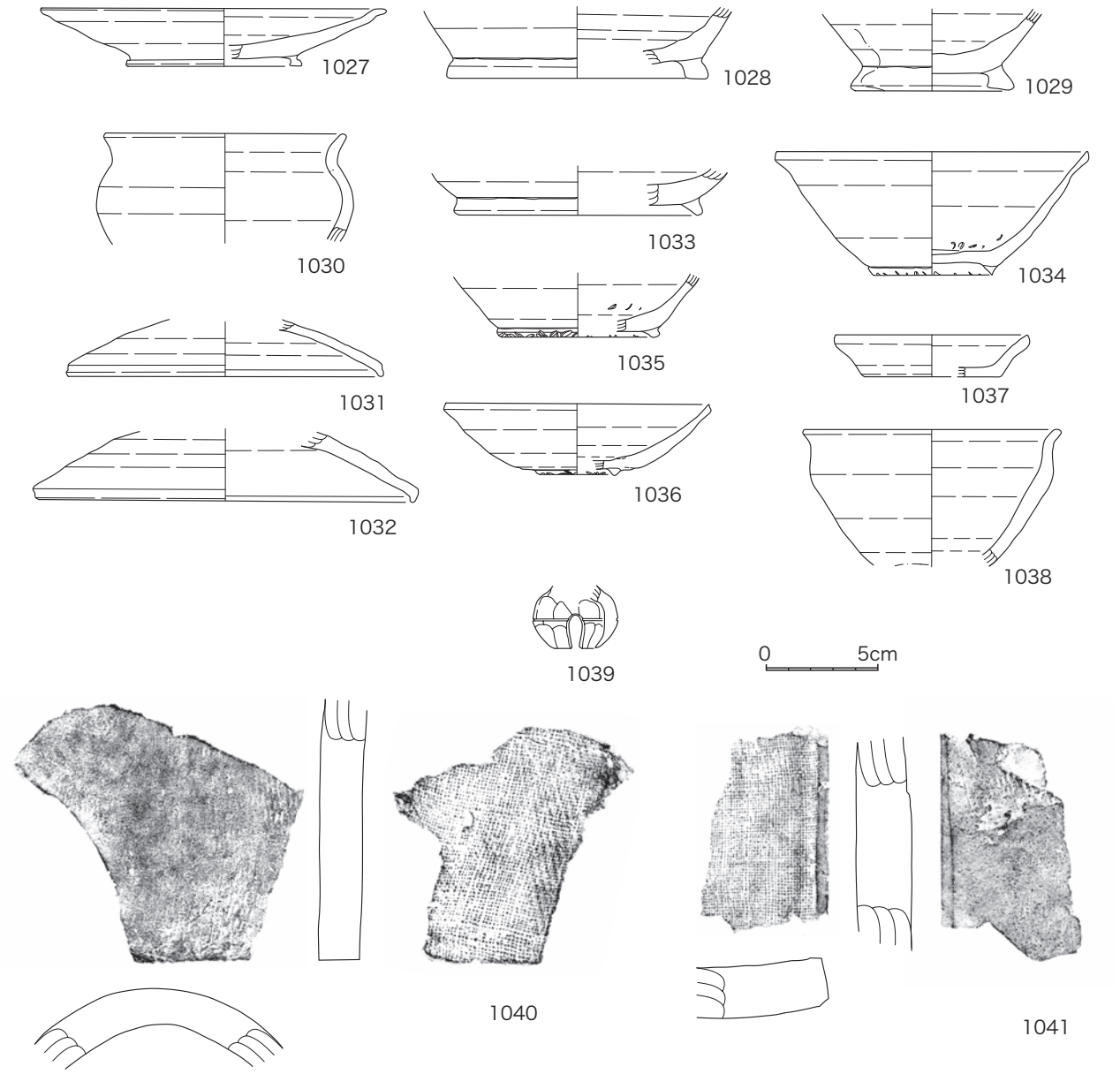


図８　元屋敷遺跡表採遺物２

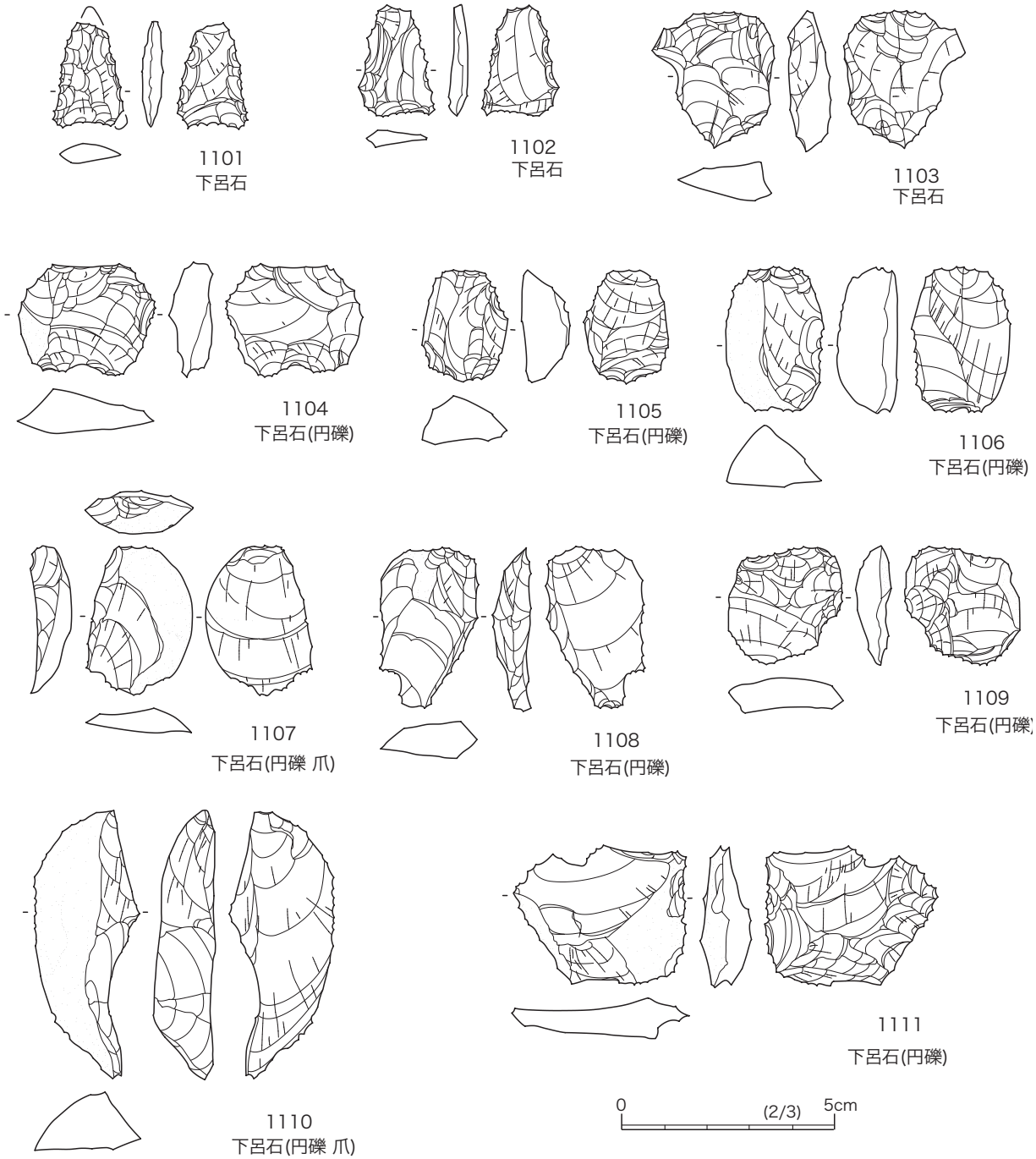


図９　元屋敷遺跡表採遺物３

第２節　調査の経緯と経過

１. 調査にいたる経緯

本事業は、五条川右岸流域下水道建設に伴う事前調査である。愛知県土木部は愛知県教育委員会に対し、この地域の埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いに関する照会を行った。県教育委員会による当地域を対象とした踏査調査の結果、遺跡と確認された。より詳細な遺跡の状況を確認するために、当埋蔵文化財センターでは平成８年・９年にわたり、範囲確認調査を実施した。調査では任意に設定したトレンチを設定し、バックホウによる掘削を行ったあと、土層の断面観察により遺構・遺物の有無を確認した。

平成８年度には事業区域内の北東部 (岩倉市域) の本調査および範囲確認調査が行われたが、当初は区域内を一括して「権現山遺跡」と称していた。平成９年度の本事業区域内南西部 (一宮市域) を対象とする範囲確認調査により、平成８年度の調査で確認されていない堆積であることと、異なる様相の遺構・遺物の展開が窺えられることから、「権現山遺跡」とは別の遺跡として扱うことが望ましいとされた。一宮市教育委員会との協議の結果、ここを「伝法寺野田遺跡」と称することとなった。

２. 調査・整理の経過

平成 10 年４月から平成 14 年７月にかけて、計 5,940 ㎡を調査した。調査は、平成 10 年度に２調査区 (98A・98B 区)、平成 11 年度に１調査区 (99 区)、平成 14 年度に１調査区 (02 区) の計４調査区を設定した。調査の手順は表２の通りである。

平成 10 年度 98B 区から、水田跡が検出され、かつ銅鏃が１点出土した。無茎銅鏃と呼ばれる珍しいタイプのものであることと、この所属時期が弥生時代中期前葉にまで遡る可能性があることから、平成 11 年３月 23 日に記者発表を行い、かつ３月 24 日から３月 31 日まで愛知県埋蔵文化財調査センターにおいてこの遺物の展示を行った。

また、遺物の洗浄・注記は平成 14 年度内に終了させた。

その後、平成 17 年４月から 10 月までの期間で、出土遺物の分類・接合・復元・実測などの整理作業を行い、報告書作成作業を進めていった。

表２　調査工程一覧

調査年	主　査・調　査　員	調査面積	調　査　工　程　(月)					
			4	5	6	7	8	9
98	服部・加藤・早野	2,400 ㎡		98A				
					98B			
99	春日井・伊藤・木川	2,000 ㎡		99				
02	石黒・川添	1,540 ㎡		02				

第２章　調査方法および基本層序

第１節　調査区設定と調査方法

調査は４調査区に分けて行った (図 10)。西から 98A 区・98B 区—02 区—99 区である。調査区内には５m 四方でグリッドを設定した。グリッドは国土交通省告示に定められた平面直角座標第 VII 系 (新基準) に準拠している。これを包含層掘削および出土遺物取上げの基本単位とした。

調査では、まず表土・耕作土をバックホウで除去し、調査員による遺物包含層の精査・検討を繰り返し、作業員による掘り下げを順次行った。遺構確定後、土色の記録を経て、各遺構を完掘した。全体の遺構がほぼ各掘した段階で、航空測量および全体写真撮影を行った。これを各調査区で実施した。

調査では、遺構番号は調査区ごとで順次付けられている。整理・報告でも番号をそのまま踏襲したため、番号の付け替えなどは行っていない。従って遺構名は調査区名を冠した、□□□区 SK △△で呼称する。なお整理の結果、以下の報告で遺構の性格を変更した場合でも、遺構記号の付け替えは行わないこととした。また、98 A・B は遺構番号が一連であることから、一括して 98 区として提示する。

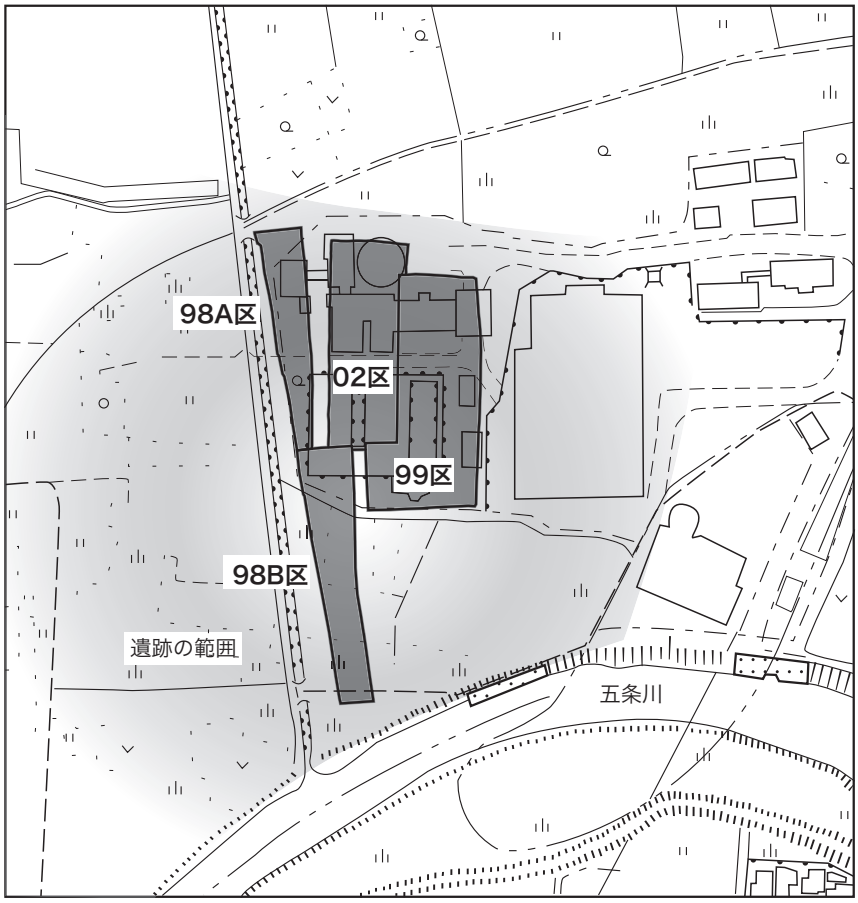


図 10　調査区配置図 (１：2500)

第２節　地形・基本層序

地形　98A・99・02 区では、標高約 5 ～ 5.5m 付近で中世包含層が存在し、中世期以降の遺構はほぼこのレベルで検出されている。99 区の北半分と 02 区のほぼ全域では、近年の旧耕作により、大半の遺物包含層が消失してしまっており、遺構はベースとした暗黄灰色シルトに残存しているもののみである。一方、99 区南半分およびと 02 区南端からは五条川が横走する南側に向かって、地形の傾斜が認められ、そこに弥生時代から古墳時代の包含層が存在する (図 17・図 18 参照)。また、98A 区で検出されている自然流路が 02 区では全く見つかっておらず、98A 区に向かって地形が落ち込んでいたことが想定される。

特に 98 区に関して言及すると、98A・98B 区の境付近に東から延びる微高地付近が存在しており、弥生時代から古墳時代の堆積層としては、この付近の標高が最も高く、微高地から周囲へと遠ざかるに従い、少しずつ標高が下がっている。微高地に近年の削平が及んでいることもあり、微高地の最高所と水田域の最も低い部分との標高差は 70cm 以上を測る。98B 区では、標高約 4.5m 付近まで旧耕作土が達しており、部分的に中世期以降の包含層がすでに失われている部分がある。しかし、ここは南側に向かって全体的に地形が傾斜しており、弥生時代以降の包含層が計 80cm ほど残存していた。

層序　98B 区の調査では、検出された水田跡の堆積状況を明確にする目的で、層序をⅠ～Ⅹ層に分けられている (第 3 章参照)。なお、この層位番号は本報告の SP ② - ②’・⑦ - ⑦’・⑧ - ⑧’・⑨ - ⑨’・⑩ - ⑩’・⑪ - ⑪’・⑫ - ⑫’ で使用している (図 13・21・22)。

Ⅰ層　灰黄色シルト層など
Ⅱ層　暗灰黄色シルト層など
Ⅲ層　暗褐色粘質シルト層
Ⅳ層　灰黄色細粒砂層
Ⅴ層　暗褐色粘土層
Ⅵ層　灰黄色シルト層
Ⅶ層　黒褐色粘土層
Ⅷ層　灰白色シルト層
Ⅸ層　紫灰色粘質シルト層
Ⅹ層　灰白色シルト層

Ⅰ・Ⅱ層は中世以降の堆積層、Ⅲ・Ⅳ層が古墳時代前期の遺物包含層、Ⅳ層以下が水田を形成および上面を覆っていた堆積層であり、Ⅷ層以下では遺物の出土はみられなかった。

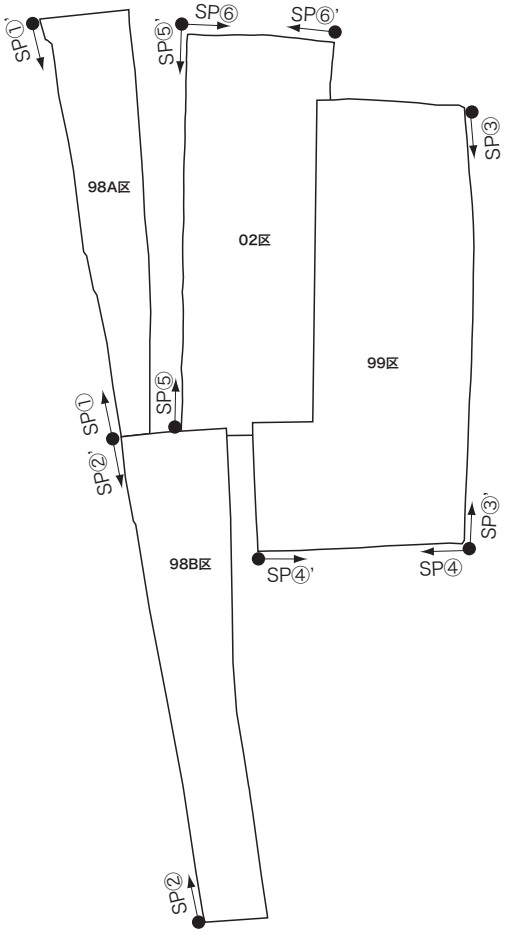
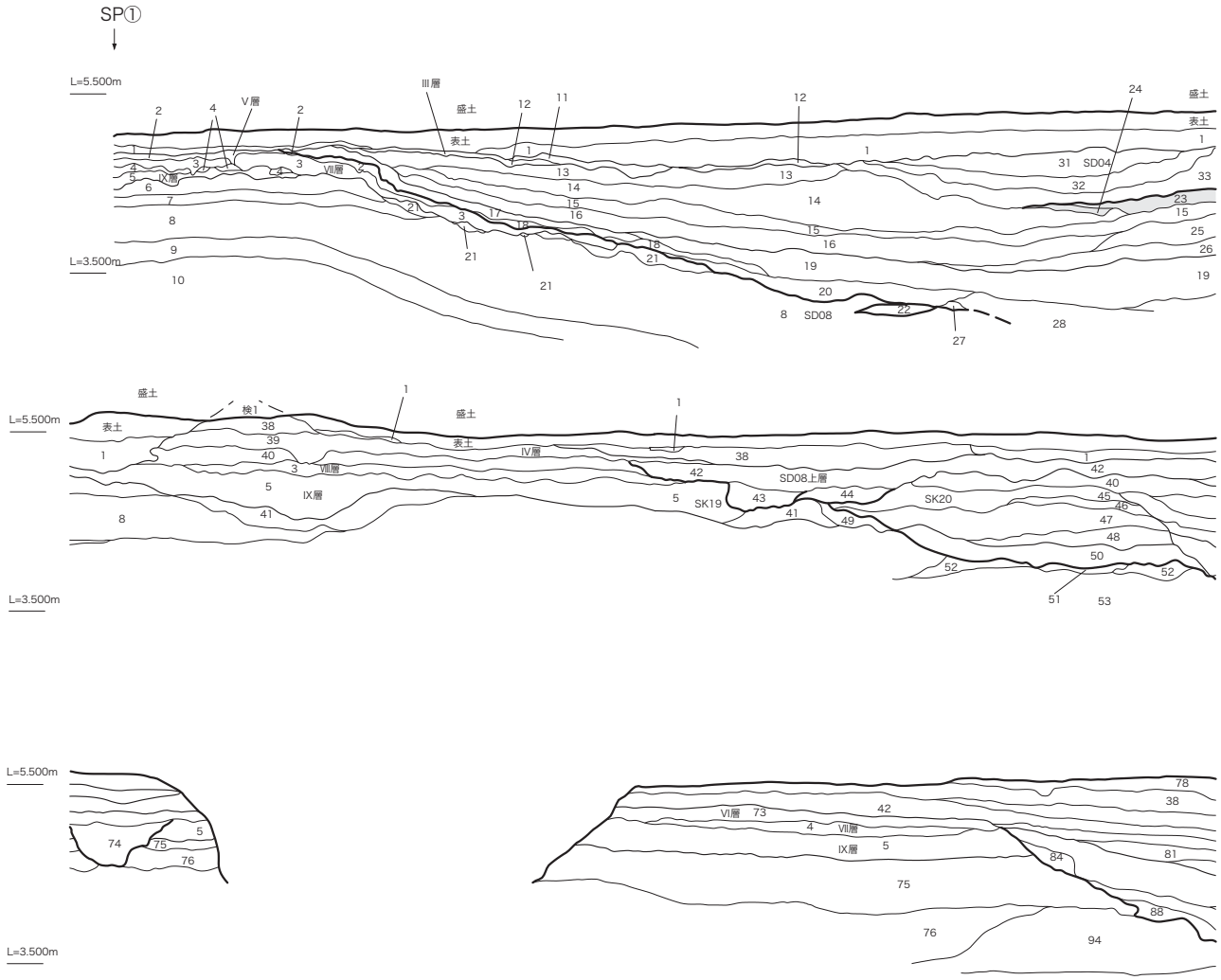
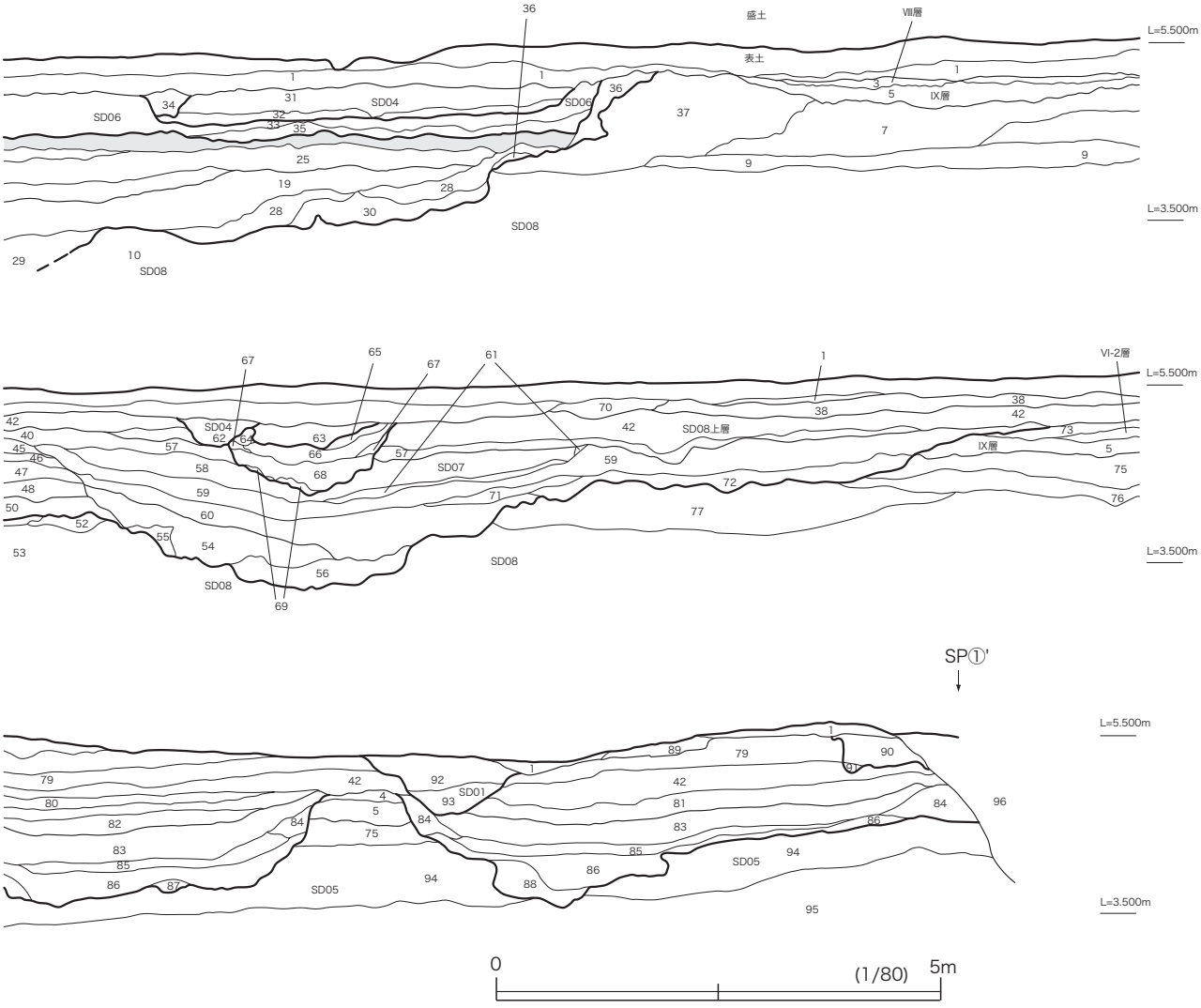


図 11　基本層序図化位置図



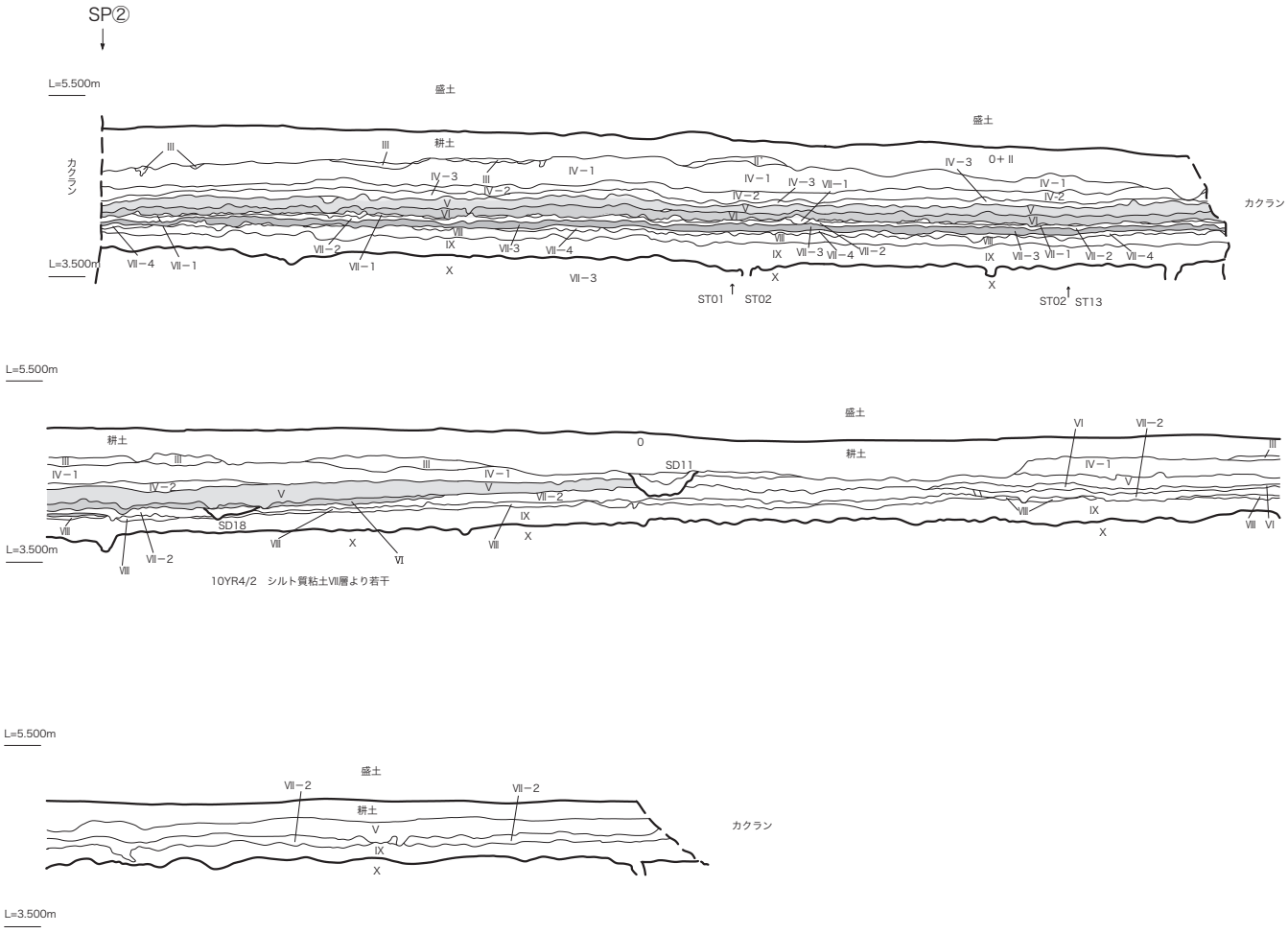
1. 2.5Y6/3 にぶい黄色シルト
2. 2.5Y3/3 暗オリーブ灰色シルト質粘土(腐食にとむ)
3. 5Y3/2 オリーブ黒色粘土
4. 2.5Y6/2 灰黄色極細粒砂
5. 5Y7/2 灰白色細粒砂
6. 5Y7/1 灰白色細粒砂
7. 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂
8. 5Y7/1 灰白色細粒砂
9. 5Y7/1 灰白色細粒砂・2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂
10. 2.5Y8/1 灰白色細粒砂
11. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土・2.5Y8/3 淡黄色シルト (2.5Y6/2 灰黄色シルトの斑土)
12. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土
13. 2.5Y6/2 灰黄色シルト質極細粒砂
14. 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂
15. 2.5Y6/2 灰黄色シルト
16. 2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂
17. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
18. 10Y4/1 灰色粘土
19. 7.5Y5/1 灰色細粒砂・10Y6/1 灰色シルトの互層
20. 7.5Y5/1 灰色粗粒砂(N2/0 黒色粘土ブロック含む)
21. 2.5GY5/1 オリーブ灰色中粒砂(N2/0 黒色粘土ブロック少量含む)
22. 7.5Y5/1 灰色粗粒砂
23. N5/0 灰色粘土(7.5Y8/2 灰白色シルトブロック含む)
24. N5/0 灰色粘土と2.5Y6/3 にぶい黄色細粒砂の斑土
26. 10Y6/1 灰色極細粒砂質シルト・7.5Y7/1 灰白色細粒砂の互層
27. 7.5Y4/2 灰オリーブ粘土
28. N1.5/0 黒色粘土
29. 10Y4/1 灰色粘土(炭化物[斑状0.5×1.0㎝]少量含む)
30. N1.5/0 黒色粘土(7.5Y8/2粗粒砂をブロック状に含む)
31. 5Y7/3 浅黄色シルト
32. 5Y7/2 灰白色シルト質粘土(炭化物少量混)
33. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土(炭化物少量混)
34. 2.5Y4/1 黄灰色シルトと2.5Y8/2極細粒砂の斑土)
35. 2.5Y7/2 灰黄色粗粒砂(2.5Y5/2粘土ブロック含む)
36. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(粗粒砂混)
37. 2.5Y5/2 暗灰黄色中粒砂
38. 2.5Y8/4 淡黄色極細粒砂質シルト
39. 2.5Y4/2 暗灰黄色シルト
40. 2.5Y7/3 浅黄色極細粒砂質シルト
41. 2.5Y7/2 灰黄色シルト
42. 2.5Y5/3 黄灰色シルト
43. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土(2.5Y4/2 暗灰黄色シルト斑入)
44. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘土
45. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
46. 10YR4/2 灰黄褐色粘土(5Y8/1 灰白色極細粒砂斑入)
47. 7.5YR4/1 褐灰色粘土
48. 7.5YR5/1 褐灰色粘土
49. 10YR4/2 灰黄褐色粘土と10YR8/1 灰白色の斑土
50. 7.5YR4/1 褐灰色粘土とN7/0 灰白色極細粒砂の互層

図 12　土層セクション　98A 区西壁



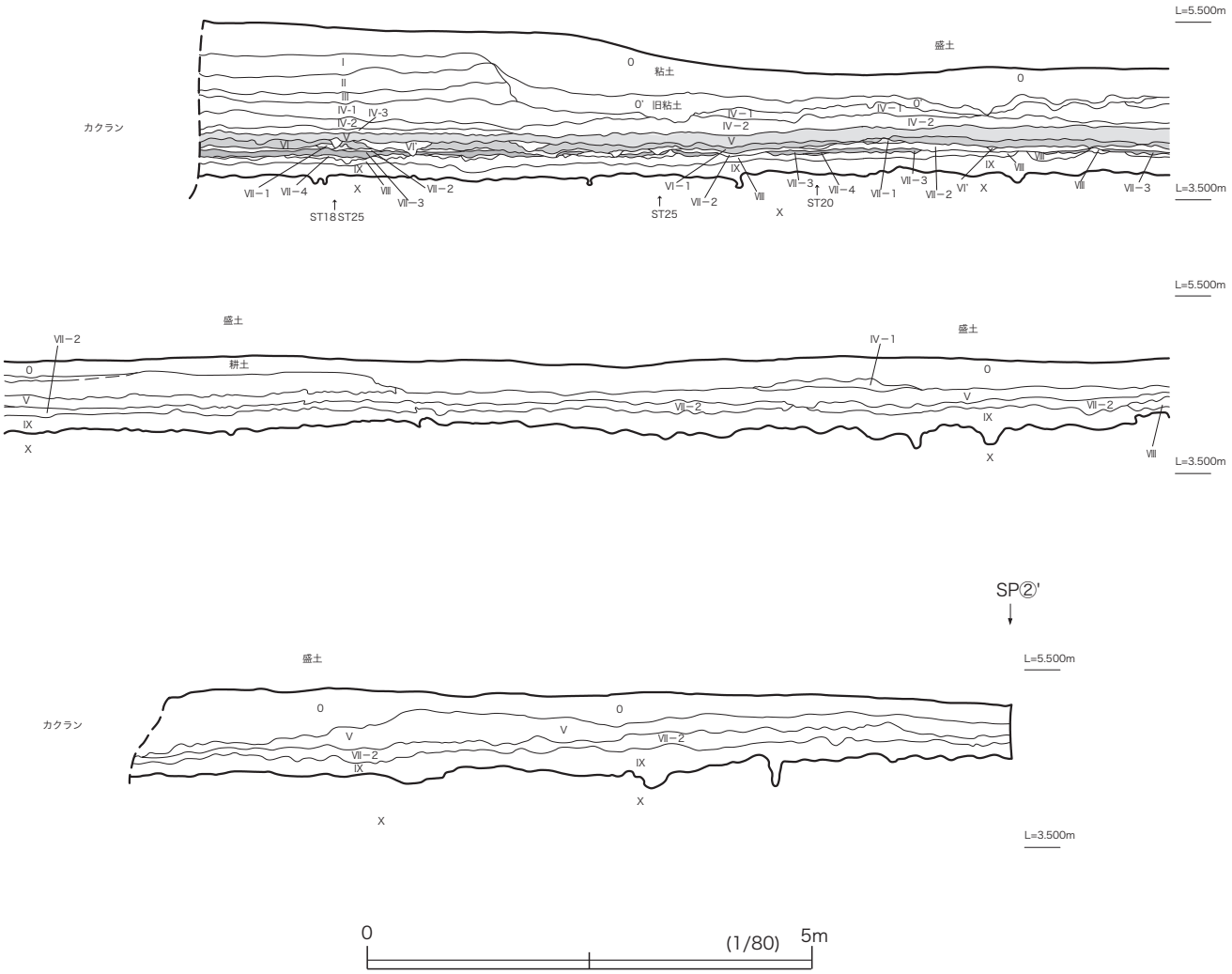
51. 7.5YR4/1 褐灰色粘土とN7/0 灰白色極細粒砂の斑土
52. N6/0 灰色細粒砂
53. 7.5Y8/1 灰白色粗粒砂
54. 7.5Y4/1 灰色粘土
55. N7/0 灰白色細粒砂と7.5Y4/1 灰色粘土
56. 7.5Y2/1 黒色粘土(7.5Y6/1 灰色シルト・7.5Y8/1 灰白色粗粒砂ブロック状に混入)
57. 2.5Y3/2 黒褐色粘土
58. 5Y7/2 灰白色細粒砂
59. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト
60. 5Y5/1 灰色シルト・5Y8/1 灰白色極細粒砂の互層
61. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質極細粒砂
62. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
63. 2.5Y7/2 灰黄色細粒砂
64. 2.5Y8/3 淡黄色シルト・2.5Y5/2 暗灰黄色シルトの斑土
65. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト(5Y8/4 淡黄色シルト斑入)
66. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト質粘土
67. 2.5Y4/2 灰オリーブ色粘土
68. 5Y4/1 灰色粘土(炭化物少量混)
69. 5Y4/1 灰色粘土、5Y8/3 淡黄色細粒砂斑入
70. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
71. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂
72. 2.5Y5/1 黄灰色粘土
73. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
74. 10YR4/1 褐灰色シルト・10YR8/1 灰白色極細粒砂の斑土
75. 5Y6/1 灰色極細粒砂
76. 5Y5/1 灰色細粒砂
77. 5Y6/1 灰色細粒砂
78. 2.5Y5/3 黄褐色シルト
79. 2.5Y4/2 灰黄褐色粘質シルト
80. 2.5Y3/2 黒褐色シルト質粘土
81. 5Y3/1 オリーブ黒色粘土
82. 7.5Y2/1 黒色粘土
83. 7.5Y4/1 灰色シルト質極細粒砂
84. 5Y5/1 灰色粘質シルト
85. 7.5Y4/1 灰色細粒砂
86. 2.5GY2/1 黒色粘土
87. 2.5GY2/1 黒色粘土(N7/0 灰白色極細粒砂斑入)
88. 2.5GY2/1 黒色粘土(N7/0 灰白色極細粒砂斑入)
89. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
90. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
91. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト(2.5Y8/2 灰白色極細粒砂斑入)
92. 2.5Y5/2 暗灰黄色シルト
93. 2.5Y4/1 黄灰色粘土(2.5Y8/1 灰白色極細粒砂斑入)
94. N7/0 灰白色シルト・2.5GY7/1 灰白色極細粒砂の互層
95. 2.5Y6/2 灰黄色中粒砂・N7/0 灰白色細粒砂の互層
96. 5Y8/1 灰白色粗粒砂でこぶし小の円礫多く混じる

(①—①') (1:80)

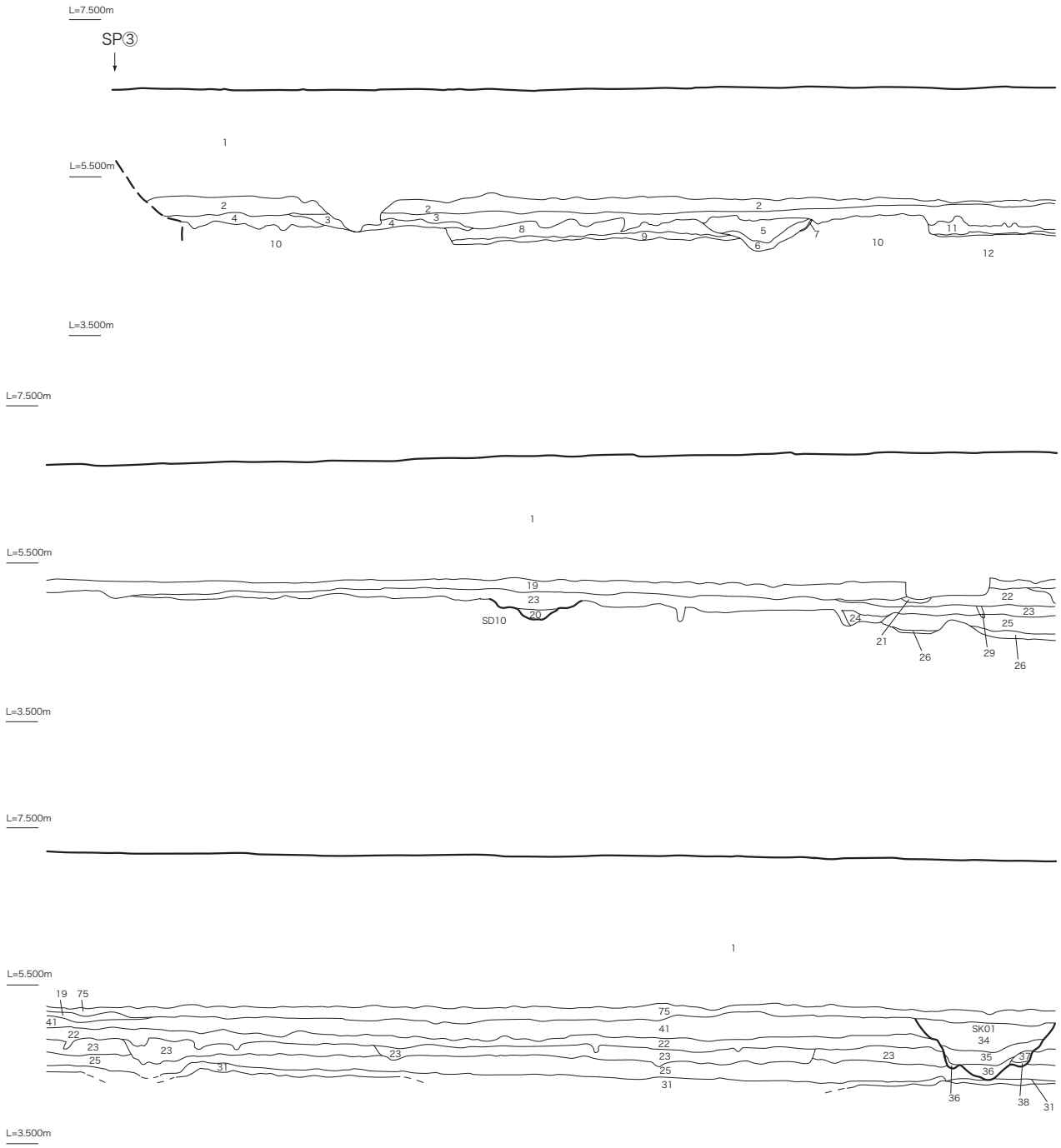


Ⅲ.　10YR3/3　暗褐色粘質シルト　マンガン班集積あり
Ⅳ−1.　5Y5/3　灰オリーブ極細砂　南にいくほど粒子大きくなる
Ⅳ−2.　5Y5/3　灰オリーブ細粒砂　南にいくほど粒子大きくなる
Ⅳ−3.　5Y5/3　灰オリーブ極細砂　南にいくほど粒子大きくなる
Ⅴ.　2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト 層の下位は徐々に2.5Y5/3 黄褐色へと変化する
Ⅵ.　2.5Y6/3　にぶい黄色シルト　炭化物（1×3cmの粒状）を含む部分（アゼ付近に多い？）がある
Ⅶ−1.　10YR4/2　黄褐色シルト質粘土（Ⅶ−2層より色調がやや明るい。撹拌を受け一部にⅥ層2.5Y6/3 にぶい黄色シルトが混入）
Ⅶ−2.　7.5YR3/2　黒褐色粘土　やや腐食にとむ（水の透過性が低いか？）
Ⅶ−3.　2.5YR3/6　暗赤褐色粘土　（酸化状態）Ⅶ−2層と基本的に同一
Ⅶ−4.　5YR3/2　暗赤褐色粘質シルト
Ⅷ.　10YR7/2　にぶい黄橙色シルト　粒状の鉄班まばらに集積する
Ⅸ.　5Y4/1　灰色粘質シルト　南へいくほど粘性を帯びる
Ⅹ.　2.5Y8/1　灰白色細粒砂

図 13　土層セクション　98B 区西壁

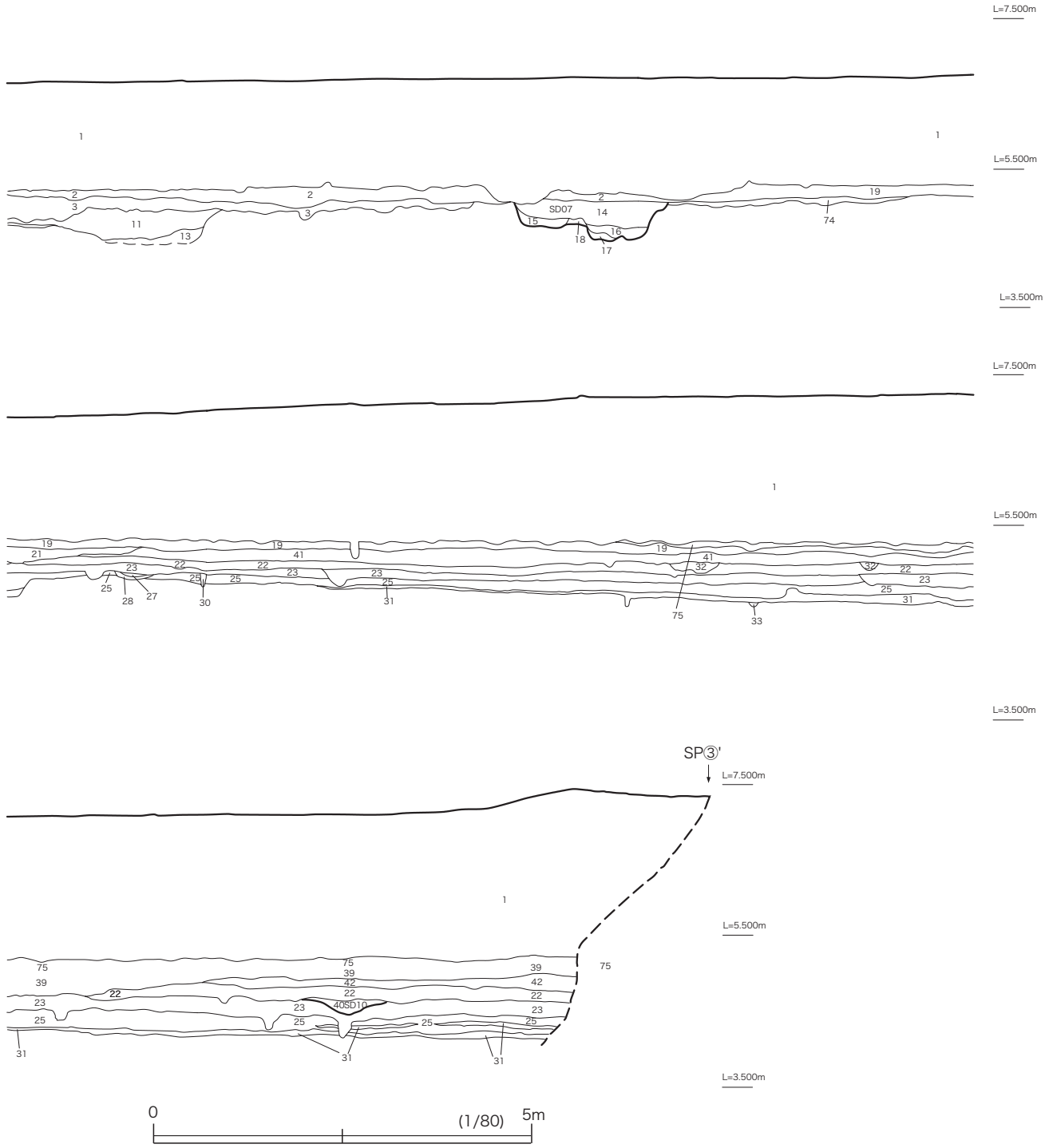


(②—② ') (1 : 80)



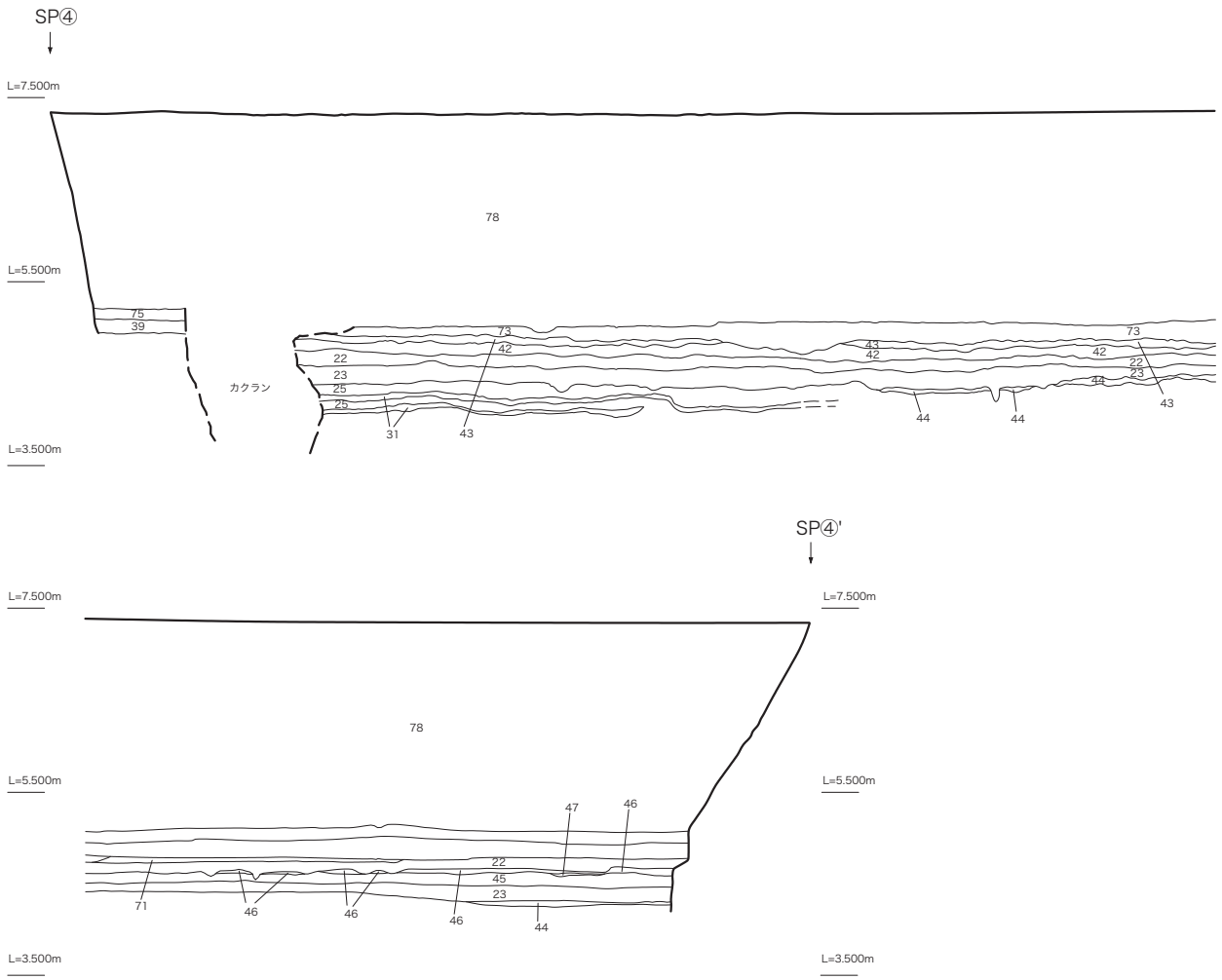
1. 表土など
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
3. 2.5Y4/3　オリーブ褐色粘質シルト（粘性並）に「2」が斑状に混入
4. 2.5Y4/3　オリーブ褐色中粒砂
5. 2.5Y5/3　黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
6. 2.5Y5/3　黄褐色中粒砂
7. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
8. 2.5Y5/3　黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
9. 10YR4/3　にぶい黄褐色中粒砂
10. 10YR5/4　にぶい黄褐色中粒砂
11. 2.5Y5/3　黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「8」に同じ）
12. 「9」に同じ
13. 2.5Y5/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性極弱い）
14. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
15. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
16. 10YR4/2　灰黄褐色粘土
17. 「16」が「10」にブロック状に混入
18. 「14」が「10」にブロック状に混入
19. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性極弱い）
20. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
21. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト（粘性極弱い）
22. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
23. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
24. 2.5Y5/2　暗灰黄色極細粒砂が「10」に混入
25. 2.5Y5/2　暗灰黄色極細粒砂
26. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト
27. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性やや強い）に「23」が混入
28. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性やや強い）
29. 「22」が「23」にブロック状に混入
30. 「22」と「23」が「25」にブロック状に混入
31. 10YR4/3　にぶい黄褐色極細粒砂
32. 「31」のブロックが「22」に混入
33. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
34. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
35. 5Y3/1　オリーブ黒色粘土植物質含む
36. 5Y4/1　灰色粘土植物質含む
37. 2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト（粘質やや強い、植物質炭化物含む）
38. 「37」がブロック状に「25」に混入
39. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
40. 「22」が「23」に混入
41. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
42. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
43. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性並）
44. 「23」がブロック状に「25」に混入
45. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性やや弱い）
46. 「22」に鉄分沈着分布

図 14　土層セクション　99 区東壁



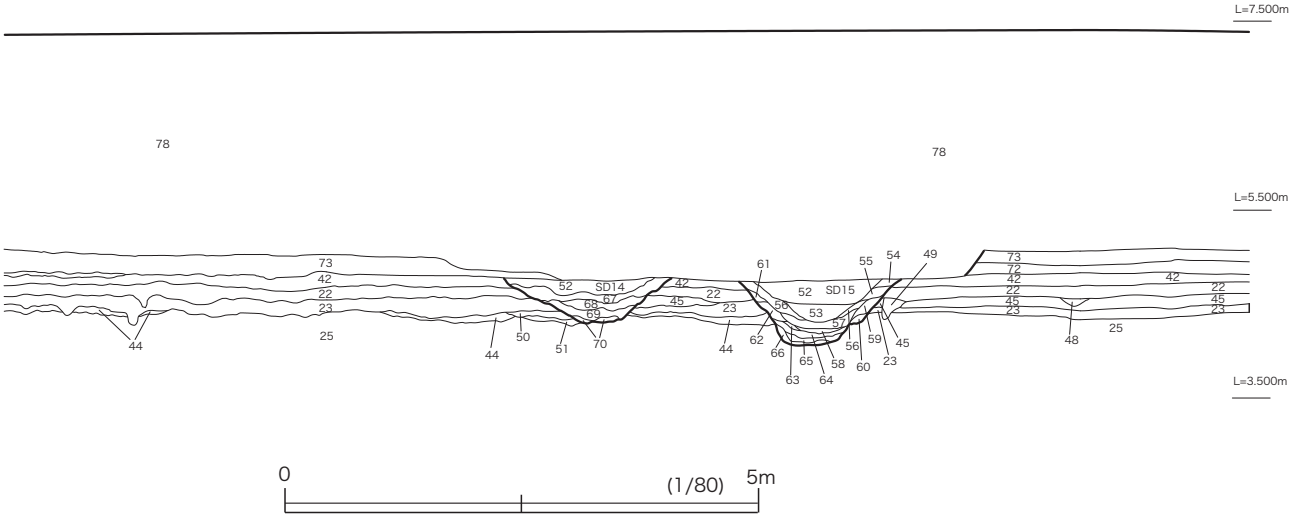
47. 「45」に鉄分沈着分布
48. 「22」が「25」にブロック状に混入
49. 「48」に同じ
50. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性並）
51. 「50」がブロック状に「25」に混入
52. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性並）
53. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
54. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
55. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「22」に同じ）
56. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
57. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
58. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性強い）
59. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性並）
60. 「59」が「25」にブロック状に混入
61. 「55」に同じ
62. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
63. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト（粘性強い）
64. 5Y6/1　灰色砂質シルトブロックが「58」に混入
65. 5Y6/1　灰色砂質シルトに「58」がブロック状に混入
66. 5Y6/1　灰色砂質シルトに鉄分沈着
67. 12YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「22」に同じ）
68. 12YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
69. 12YR4/1　褐灰色砂質シルト
70. 「69」がブック状に「25」に混入
71. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
72. 5Y4/1　灰色粘質シルト（粘性強い）
73. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト（粘性強い）
74. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
75. 「73」に同じ
76. 砂と巨礫（砂と巨礫（20㎝大の円礫）の多く混じった溝状カクラン
77. 黄褐色砂質シルトを主体としたカクラン（20㎝大の円礫、ビニール等現代遺物含む）
78. 細粒砂を主体としたカクラン（最下部に植物質の堆積層あり、南ほど厚い<1～10㎝>）
79. 試掘トレンチ

（③—③'）（1：80）



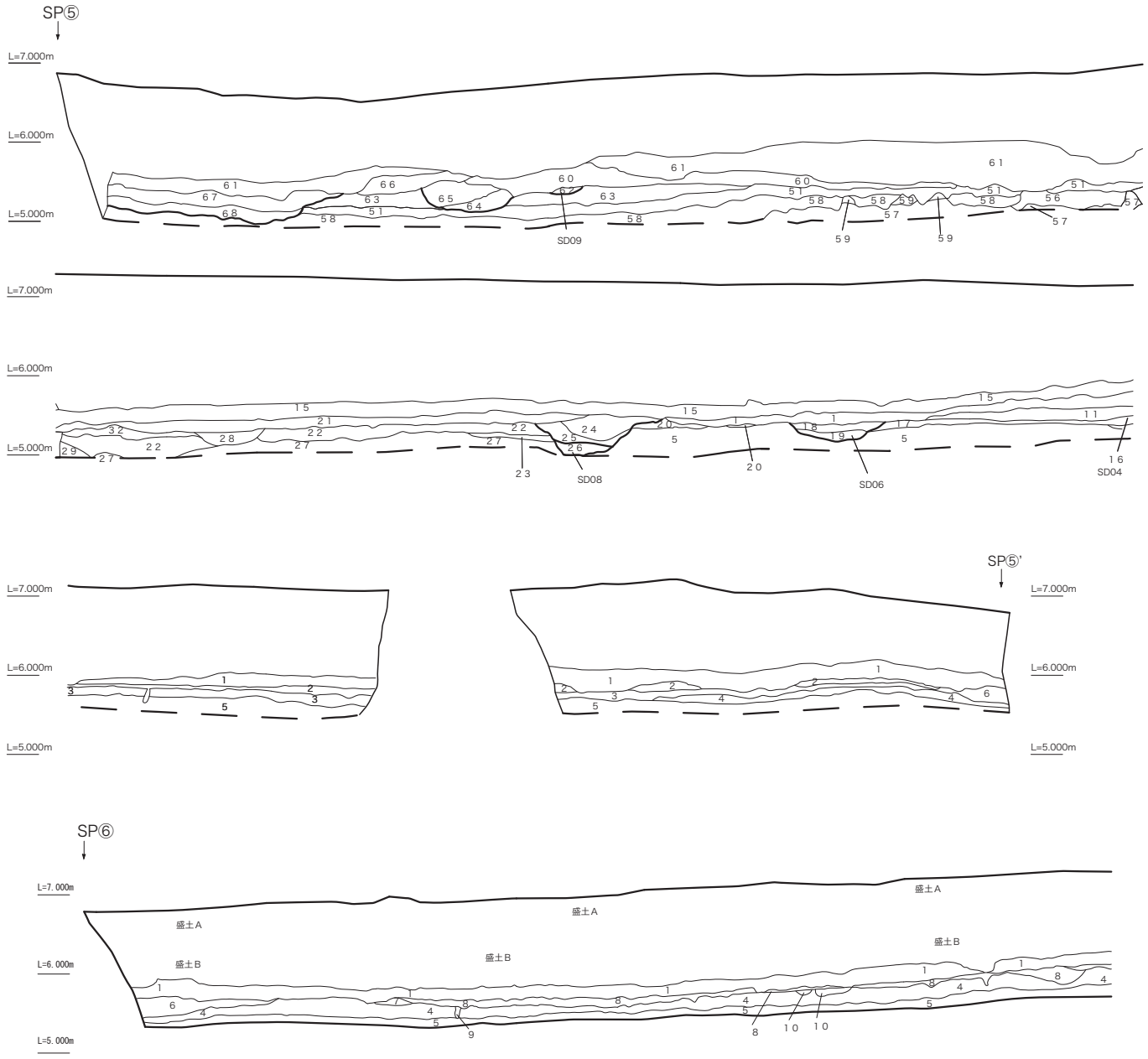
1. 表土など
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質シルト（粘性並）に「2」が斑状に混入
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色中粒砂
5. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
6. 2.5Y5/3 黄褐色中粒砂
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
8. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色中粒砂
10. 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂
11. 2.5Y5/3 黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「8」に同じ）
12. 「9」に同じ
13. 2.5Y5/2 暗灰黄色粘質シルト（粘性極弱い）
14. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
15. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
16. 10YR4/2 灰黄褐色粘土
17. 「16」が「10」にブロック状に混入
18. 「14」が「10」にブロック状に混入
19. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト（粘性極弱い）
20. 10YR3/2 黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）

図 15　土層セクション　99 区南壁



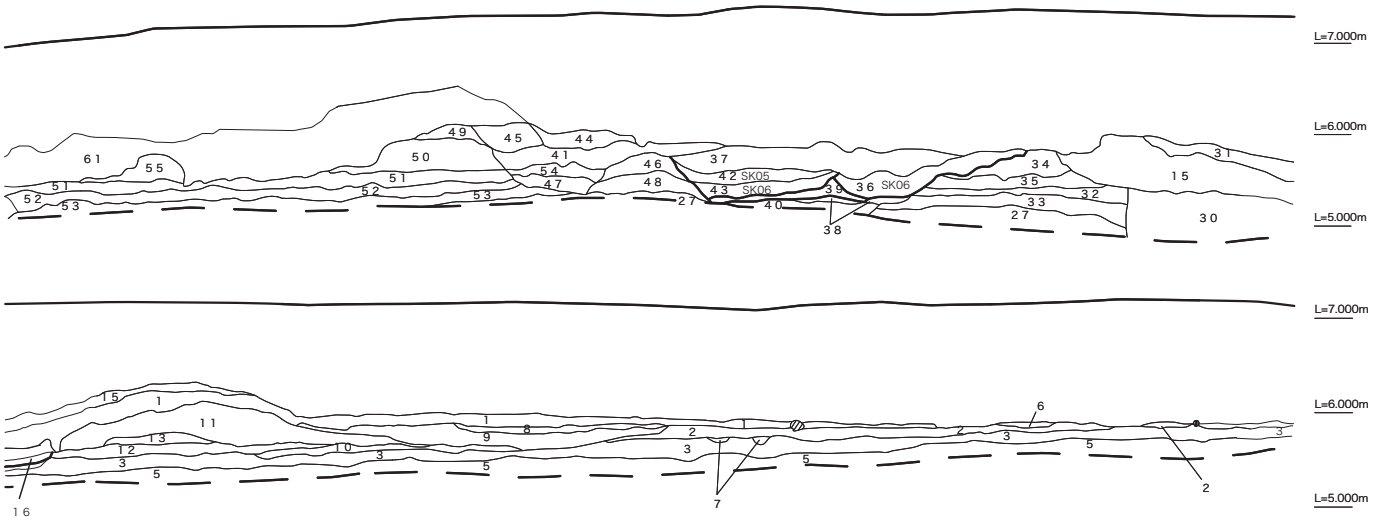
21. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘質シルト（粘性極弱い）
22. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
23. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
24. 2.5Y5/2　暗灰黄色極細粒砂が「10」に混入
25. 2.5Y5/2　暗灰黄色極細粒砂
26. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト
27. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性やや強い）に「23」が混入
28. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性やや強い）
29. 「22」が「23」にブロック状に混入
30. 「22」と「23」が「25」にブロック状に混入
31. 10YR4/3　にぶい黄褐色極細粒砂
32. 「31」のブロックが「22」に混入
33. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
34. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
35. 5Y3/1　オリーブ黒色粘土植物質含む
36. 5Y4/1　灰色粘土植物質含む
37. 2.5Y4/1　黄灰色粘質シルト（粘質やや強い、植物質炭化物含む）
38. 「37」がブロック状に「25」に混入
39. 2.5Y4/2　暗灰黄色粘質シルト（粘性並）
40. 「22」が「23」に混入
41. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
42. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
43. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性並）
44. 「23」がブロック状に「25」に混入
45. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性やや弱い）
46. 「22」に鉄分沈着分布
47. 「45」に鉄分沈着分布
48. 「22」が「25」にブロック状に混入
49. 「48」に同じ
50. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性並）
51. 「50」がブロック状に「25」に混入
52. 10YR5/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性並）
53. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
54. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
55. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「22」に同じ）
56. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや強い）
57. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
58. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性強い）
59. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性並）
60. 「59」が「25」にブロック状に混入
61. 「55」に同じ
62. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
63. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト（粘性強い）
64. 5Y6/1　灰色砂質シルトブロックが「58」に混入
65. 5Y6/1　灰色砂質シルトに「58」がブロック状に混入
66. 5Y6/1　灰色砂質シルトに鉄分沈着
67. 12YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）（「22」に同じ）
68. 12YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
69. 12YR4/1　褐灰色砂質シルト
70. 「69」がブロック状に「25」に混入
71. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
72. 5Y4/1　灰色粘質シルト（粘性強い）
73. 5Y3/1　オリーブ黒色粘質シルト（粘性強い）
74. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性極弱い）
75. 「73」に同じ
76. 砂と巨礫（20㎝大の円礫）の多く混じった溝状カクラン
77. 黄褐色砂質シルトを主体としたカクラン（20㎝大の円礫、ビニール等現代遺物含む）
78. 細粒砂を主体としたカクラン（最下部に植物質の堆積層あり、南ほど厚い<1～10㎝>）
79. 試掘トレンチ

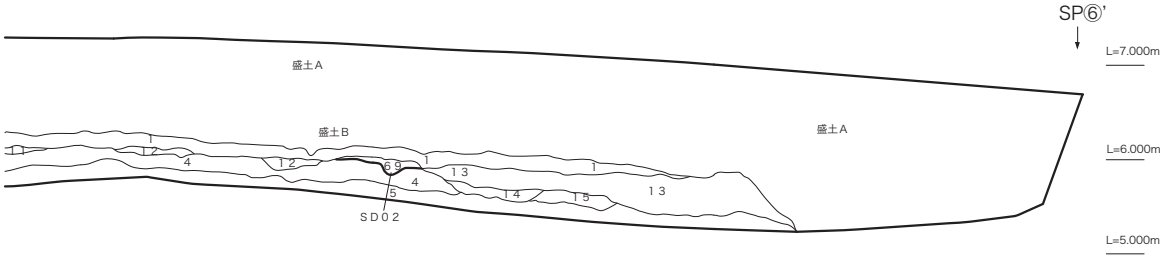
（④—④'）（1：80）



1 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト
2 10YR 3/2　黒褐色シルト（10YR 4/2　灰黄褐色シルト　斑入）
3 2.5Y 5/2　暗灰黄色シルト質極細粒砂（鉄斑・マンガン斑混じる）
4 10YR 5/2　灰黄褐色シルト質極細粒砂（鉄分の沈着が認められる）
5 2.5Y 5/2　暗灰黄色極細粒砂（鉄分の沈着が認められる
6 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト・2.5Y 3/2　黒褐色シルト　斑土（鉄斑混じる）
7 2.5Y 3/2　黒褐色シルト（鉄斑混じる）
8 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（2.5Y 5/3　黄褐色極細粒砂　斑入）
9 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（鉄斑混じる）
10 10YR 5/2　灰黄褐色シルト（鉄斑混じる）
11 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト・2.5Y 3/2　黒褐色シルト（鉄斑混じる）
12 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（2.5Y　3/3　暗オリーブ褐色シルト斑入、鉄斑混じる。大畦畔）
13 10YR 3/2　黒褐色シルト（鉄斑混じる。大畦畔）
14 10YR 3/1　黒褐色シルト（10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト斑入、鉄斑混じる）
15 2.5Y 3/2　黒褐色極細粒砂（2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト斑入）
16 2.5Y 4/2　暗灰黄色粘土質シルト（鉄斑混じる。SD04埋土）
17 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト質極細粒砂（鉄斑・マンガン斑混じる）
18 10YR 3/2　黒褐色シルト（10YR　5/2　灰黄褐色極細粒砂斑入。ＳＤ０６埋土）
19 10YR 5/2　灰黄褐色シルト・10YR 3/3　暗褐色シルト・10YR 4/2　灰黄褐色極細粒砂　斑土（鉄斑混じる。ＳＤ０６埋土）
20 10YR 5/2　灰黄褐色シルト・10YR 3/3　暗褐色シルト　斑土
21 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（鉄斑混じる）
22 2.5Y 4/2　暗灰黄色極細粒砂（鉄斑・マンガン斑混じる）
23 2.5Y 5/2　暗灰黄色細粒砂（鉄斑混じる）
24 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる。SD05埋土）
25 10YR 4/2　灰黄褐色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる。SD05埋土）
26 10YR 4/2　灰黄褐色シルト（鉄斑混じる。SD08埋土）
27 2.5Y 4/2　暗灰黄色細粒砂（鉄分の沈着が認められる）
28 10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる）
29 2.5Y 5/2　暗灰黄色シルト（2.5Y　5/3　黄褐色シルト斑入、鉄斑混じる）
30 撹乱坑
31 10YR 4/2　灰黄褐色シルト（2.5Y 4/1　黄灰色シルト斑入、鉄斑混じる）
32 10YR 3/3　暗褐色シルト
33 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト（2.5Y　3/3　暗オリーブ褐色シルト・2.5Y 5/2　暗灰黄色極細粒砂斑入、鉄斑混じる）
34 2.5Y 4/2　暗灰黄色シルト・10YR 3/2　黒褐色シルト　斑土

図 16　土層セクション　02 区西壁・北壁





35 10YR 5/2 灰黄褐色シルト（鉄斑混じる）
36 2.5Y 5/2 暗灰黄色極細粒砂・2.5Y 4/1 黄灰色シルト斑土（鉄斑混じる。SK06埋土）
37 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂（2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト斑入。SK05埋土）
38 10YR 3/2 黒褐色シルト・2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト　斑土
39 2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト（鉄斑混じる。SK06埋土）
40 2.5Y 4/4 オリーブ褐色シルト（2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂斑入、鉄斑・マンガン斑混じる）
41 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
42 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂斑入。SK06埋土）
43 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる。SK06埋土）
44 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト・10YR 3/2　黒褐色シルト　斑土
45 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト・10YR 3/2 黒褐色シルト・10YR 4/2 灰黄褐色シルト　斑土
46 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（マンガン斑混じる）
47 10YR 5/2 灰黄褐色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる）
48 2.5Y 5/2 灰黄褐色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる）
49 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（2.5Y 5/2 灰黄褐色シルト斑入）
50 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
51 10YR 3/3 暗褐色シルト（10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト斑入）
52 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト・10YR 4/2　灰黄褐色シルト　斑土（鉄斑混じる）
53 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト質極細粒砂（鉄斑混じる）
54 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR 4/3 黒褐色シルト・2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト斑入）
55 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
56 2.5Y 4/4 褐色シルト質極細粒砂（2.5Y 3/2　黒褐色シルト斑入、鉄分の沈着が多く認められる）
57 7.5YR 4/6 暗灰黄色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる。ST04埋土）
58 2.5Y 4/4 褐色シルト質極細粒砂・2.5Y 3/2 黒褐色シルト斑土（鉄分の沈着が認められる）
59 7.5YR 4/3 褐色シルト（鉄分の沈着が多く認められる）
60 10YR 5/2 灰黄褐色シルト（2.5Y 3/2 黒褐色シルト斑入）
61 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（盛土？）
62 10YR 4/2 灰黄褐色シルト・2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト　斑土（SD09埋土）
63 10YR 3/2 黒褐色シルト・10YR 4/2 灰黄褐色シルト　斑土（マンガン斑混じる）
64 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト斑入、マンガン斑混じる。SD10埋土）
65 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト（鉄斑混じる。SD10埋土）
66 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（鉄斑・マンガン斑混じる）
67 2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト（鉄斑混じる。ST04埋土）
68 2.5Y 4/2 褐色シルト質極細粒砂（鉄分の沈着が多く認められる）
69 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（10YR 4/3 灰黄褐色シルト斑入。SD02埋土）

（⑤—⑤'・⑥—⑥'）（1：80）

第３章　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

第１節　検出遺構

各調査区によって、検出遺構の性格が異なっている。遺構が明確に検出されたところは、98 区では、98A 区・98B 区境付近に東から延びる微高地から地形の傾斜する南側・北側に向かって遺構が見つかっている。また、02 区では調査区の南端、99 区では調査区の南半分で当該時期の遺構が見つかっている。当該時期の遺物包含層が存在する区域と一致する。98A 区では北東から南西方向に走る溝もしくは自然流路が数条検出されている。98B 区では、北東から南西方向に走る溝２条の南側では、水田遺構が面的に検出されている。99 区では、弧状を呈する溝とそれを前後する時期の竪穴状遺構が数基見つかっている。02 区ではコの字状を呈する落ち込みが検出されている。

第２節　水田遺構

水田遺構に関しては、「平成 10 年度年報」にすでに詳細な報告がある (早野・鬼頭・尾崎 1999)。報告者にはこれ以上の報告を行う能力はまったくない。そこでこの中から、事実報告の部分のみを抽出した。従って、「平成 10 年度年報」も併読していただけると幸いである (註 1)。

１. 遺構の概要・配置

水田跡が検出されたのは、98 B 区の北東―南西への地形の傾斜に沿って、水田の畦畔 (小区画 26・大畦畔) およびその北側に溝２条が検出された。これら水田跡を平面的に検出したのは、VII 層 (黒褐色粘土層) の上面とのことである。水田跡は 98 B 区の範囲内にとどまることなく、地形の傾斜に沿って、北東―南西方向にさらに調査区外へ面的に広がっているものと考えられる。

水田区画は、まず北西―南東方向の大畦畔が基軸として設定され、それと平行・あるいは直交する方向に小畦畔を配することによって、典型的なところで長軸が約８m、短軸が約３m の小区画を形成するものである。大畦畔は ST16・17・20・26 と ST11・15・18・25 の境にあり、その上端幅は約 80cm を、下端幅は約 120cm、高さ約 10cm を測る。一方小畦畔は幅約 20cm、高さは２～３cm を測る。水田への水配りは、田面の高低差を利用するいわゆる「田越し灌漑」によっていたものと推定される。

水田区画の北側には、北東―南西方向に並走する２条の溝が存在する (98 区 SD18・SD20)。SD18 は畦畔より北側３～８m、SD20 は同じく畦畔より北側 40m の間隔がある。この間は東側に向かって微高地が展開しており、98 調査区を通して最も高い場所である。その中でも SD20 の東側が最も高いようであり、この付近でのみ弥生時代中期中葉からの遺物の出土が見られる。こ

(註 1) これに関しては、添付 CD の中にデーターを掲載した。

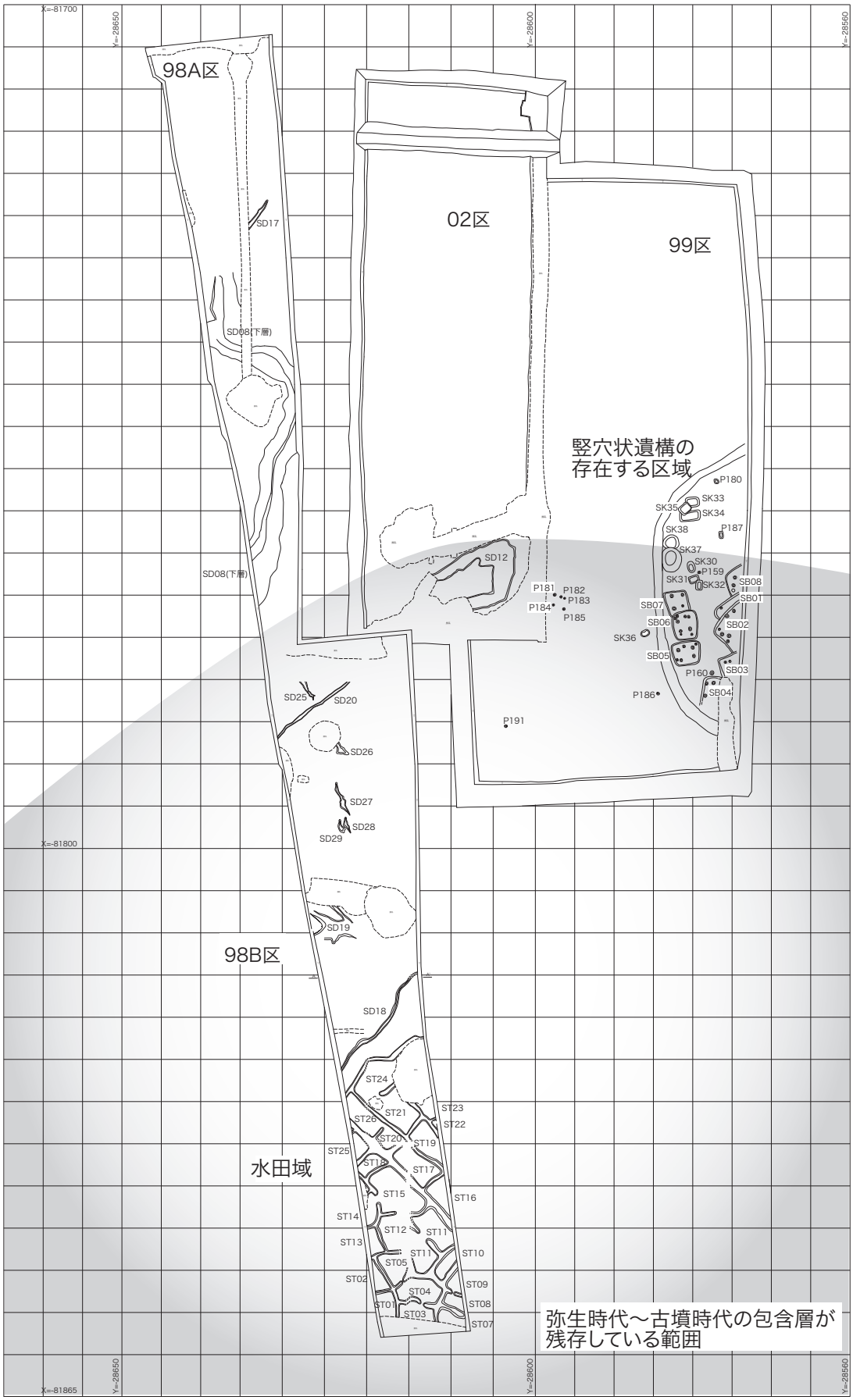


図 17 弥生時代～古墳時代の遺構配置図 (1 ：700)

の二条の溝は用水路として機能していた可能性も考えられる。また、水田面の精査によって、稲株痕とみられる径約 10cm の小穴や、耕具痕とみられる半月形、長楕円形を呈する小土坑が確認された。一方、足跡は確認されなかった。

2. 層序 (図 13・21・22)

水田跡に関係する IV 層以下の層位について、その概要は以下の通りである。

IV 層（灰黄色細粒砂層） V 層上面を被覆する洪水性の堆積で、層厚は最大で約 40cm を測る。粒径によって細かくは 3 層に区分できる。比較的起伏に富む地形は、この洪水砂によって、きわめて短期間でかなり平坦になったとみられる。IV 層には極少量の廻間 I 式期に相当する土器が包含されていた。

V 層（暗褐色粘土層） 古墳時代初頭以前の遺物包含層で、層厚は水田域では約 10cm、微高地ではやや厚く 15 ～ 20cm を測る。V 層の直上が粒子の細かな砂によって覆われた結果、地表面の凹凸が良好に保護されていた。

VI 層（灰黄色シルト層） 調査区の南部、水田域のみで堆積を確認できる V 層と VII 層の間層で、層厚は 10cm 前後を測る。IV 層と同様の色調であるが、均質なシルト質の土層でやや粘性も帯びるため、VII 層の表面を良好に保護しているとは言い難い。

VII 層（黒褐色粘土層） 古墳時代初頭以前の遺物包含層で層厚は約 20cm。水田跡はこの層の上面で検出した。V 層と比較してやや暗い色調として層を認識できる。調査区のほぼ全域で確認され、また試掘調査においても広く確認されている鍵層である。調査区の北部、微高地に相当する部分ではボソボソとした質であるが、調査区の南部、

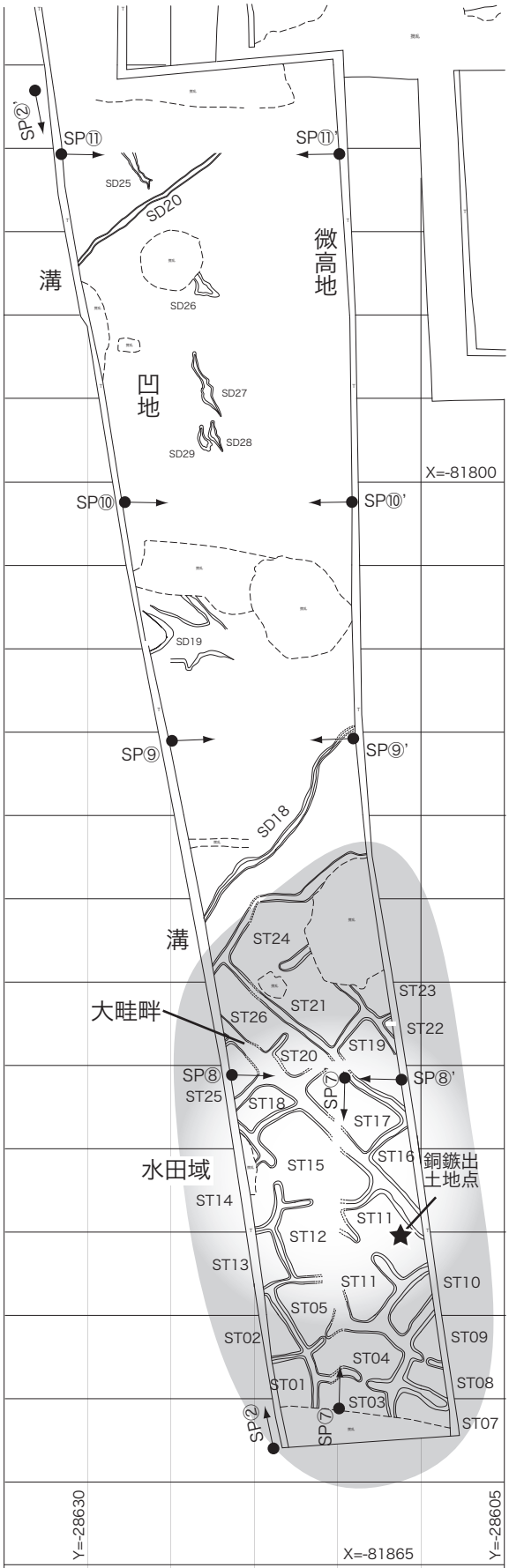


図 18　98B 区水田域遺構配置図 (1 ：400)

水田域に相当する部分では、粘性を帯びた透水性の乏しい土壌となる。

VIII 層（灰白色シルト層） 水田域を中心に確認できる VII 層と IX 層の間層。側方への連続性は良好でない。

IX 層（紫灰色粘質シルト層） 地形のベース面となる層で、調査区全体で確認できる。層厚は 20cm 前後を測る。調査区の南では透水性の乏しい粘質の土壌となる。その下位は灰白色シルト層（X層）となり、さらに約 80cm 下で粗粒砂層に達することを確認している。

なお、VIII 層以下では遺物の出土はみられなかった。

3. 水田土壌

水田跡を検出した黒褐色粘土層（Ⅶ層）は土壌生成作用によって、上位から作土層・鋤床層・鋤床層直下の斑紋集積層の順に、さらに細かく層が分化する。作土層は、褐色気味の腐植質の層として認識されるが、水田面全域で確認されるわけではなく、層厚もわずか 2 ～ 3cm 程度である。鋤床層は層厚 5 ～ 10cm で、その直下に上位からの浸透水によって還元溶脱された鉄、マンガンが沈殿し、鉄サビ色の斑紋集積層を形成する。斑紋集積層は硬化している部分が広く認められ、下層への水の浸透を妨げるものとなっている。Ⅶ層下

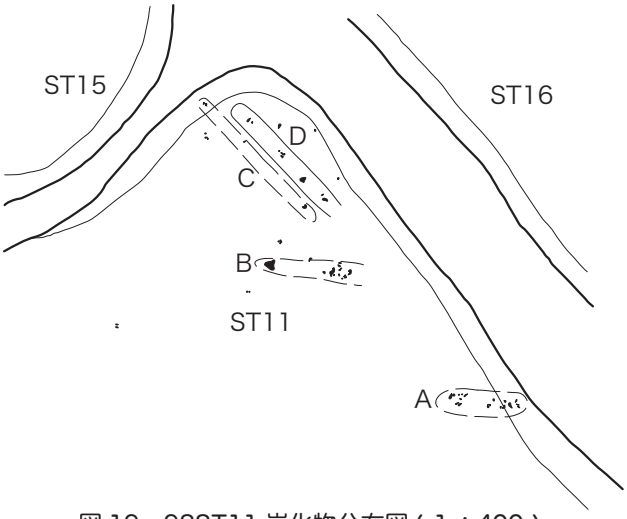


図 19　98ST11 炭化物分布図 (1 ：400)

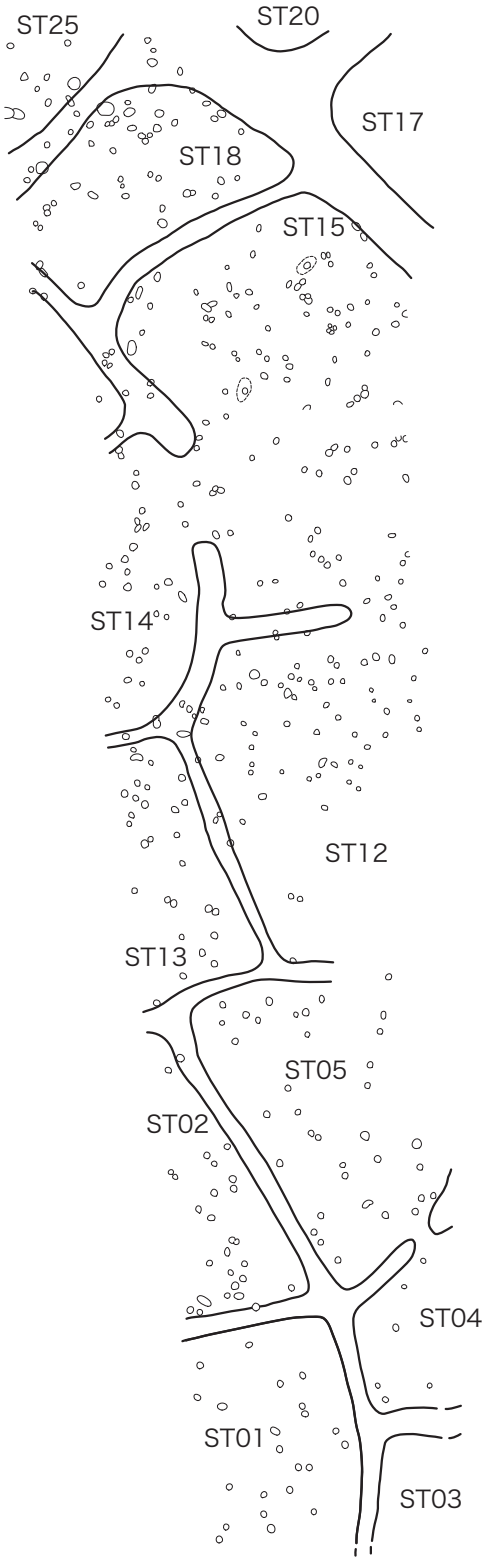


図 20　水田遺構内稲株痕配置図 (1 ：400)

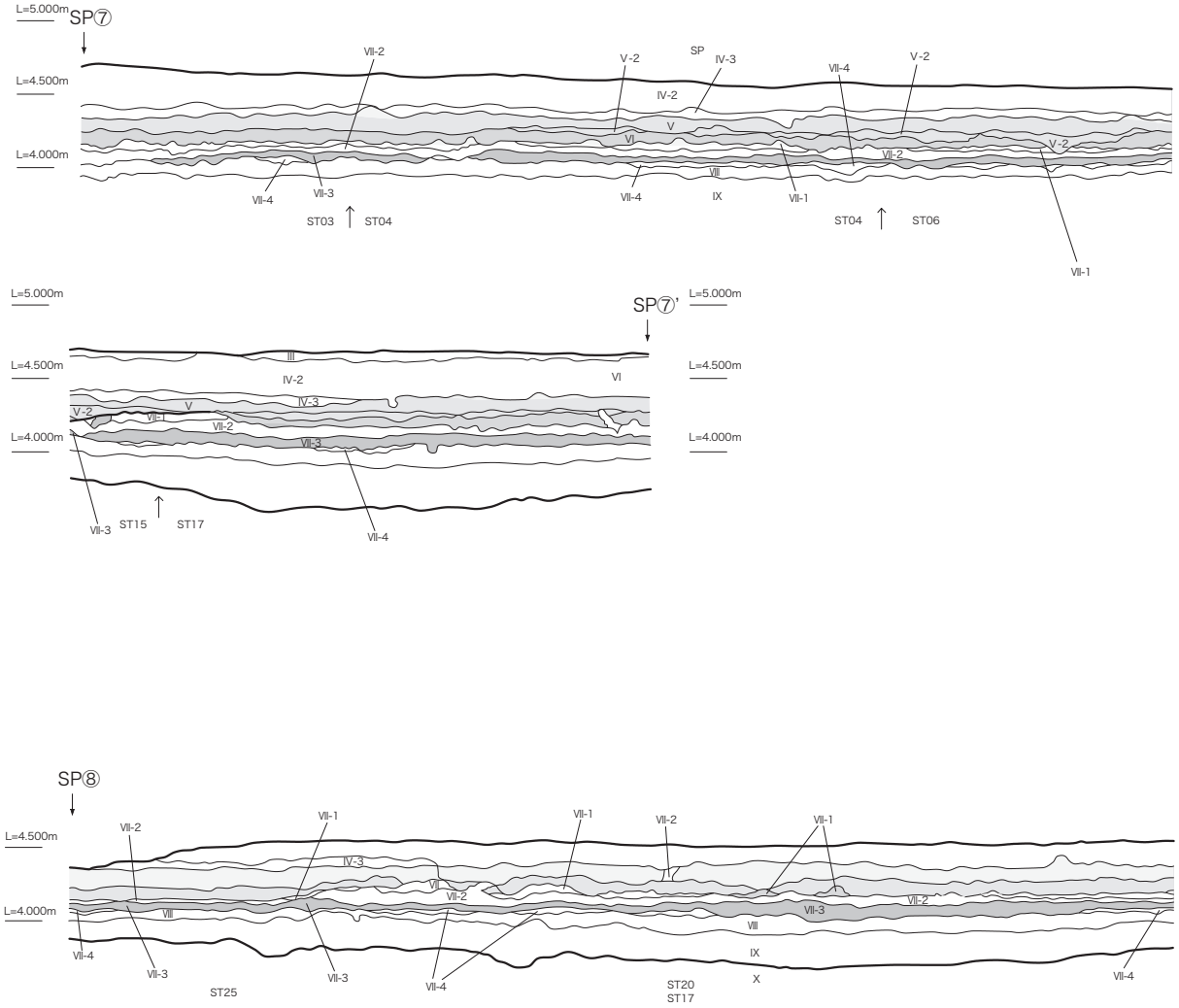


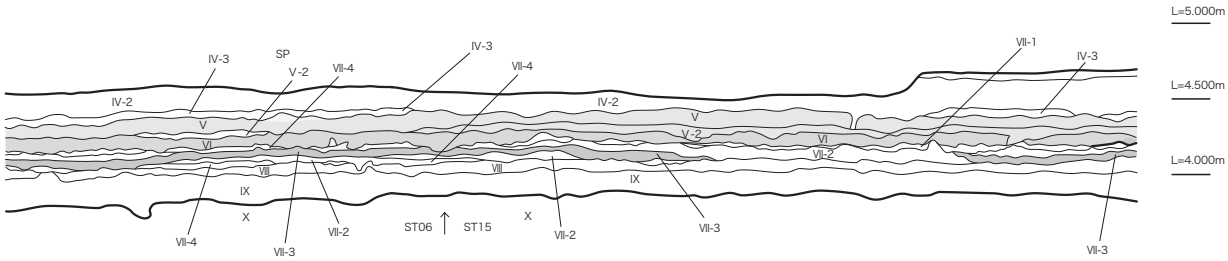
図 21　98B 区水田域土層断面図 1
SP 番号は図 18 に一致。

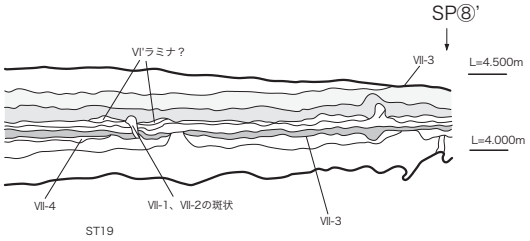
位のIX層（紫灰色粘質シルト層）はグライ化した土壌で、地下水の季節的変動部位の指標である暈管状斑紋が多く含まれる。

4. 各部詳細説明

畦畔と水田区画　畦畔は地形の傾斜に合わせて、傾斜と直交する方向に基軸となる北西〜南東方向の畦畔をまず設完し、それと直交する方向の畦畔が「アミダクジ」状、あるいは「＋」状に接合して、小区画を形成する。基軸となる畦畔で大畦畔としたものは、地形の変換点（T.P. ＋4.2m）に設定されており、上端幅約 80cm、下端幅約 120cm、高さ約 10cm を測る。この大畦畔がさらに大きい区画を形成していたかどうかは不明である。小畦畔は典型的なものでは幅約 20cm、高さ 2 〜 3cm を測る。小畦畔によって区画された水田一筆は長軸 8m、短軸 3m の大きさが基本となる。

大畦畔から 1 区画南に設定された畦畔より南においては、面積がやや小さい不定形の水田区画と





SP ⑦—⑦ '・SP ⑧—⑧ '(1 ：50)
土色および SP ②—② ' は図 13 参照。

して検出しているが、この部分は傾斜のほとんどない平坦な地形となることから不自然にもみられる。その理由として、この部分が水利系統の末端部分にあたっており、水回りが悪い場合の保水性が考慮されている可能性がまず考えられるかもしれない。しかし、調査段階において、何度か作り直された畦畔を同時に検出してしまった可能性、あるいは作土の流失がこの部分では著しかったことをも考慮すると、耕作によって巻き上がった作土を畦畔と誤認してしまった可能性も否定できない。今後の調査においては、水利系統を十分に考慮した水田区画の検出が望まれよう。

水利系統の復原　今回検出した水田においては、調査面積の制約などから、水利系統の復原には自ずと限界が生じる。細かな実証は今後の作業として残されるが、小河川から水が得られたとして、溝 1 と溝 2 がそれぞれ用水路としての役割を果たし、水田へと水を導いていたものと考えられる。

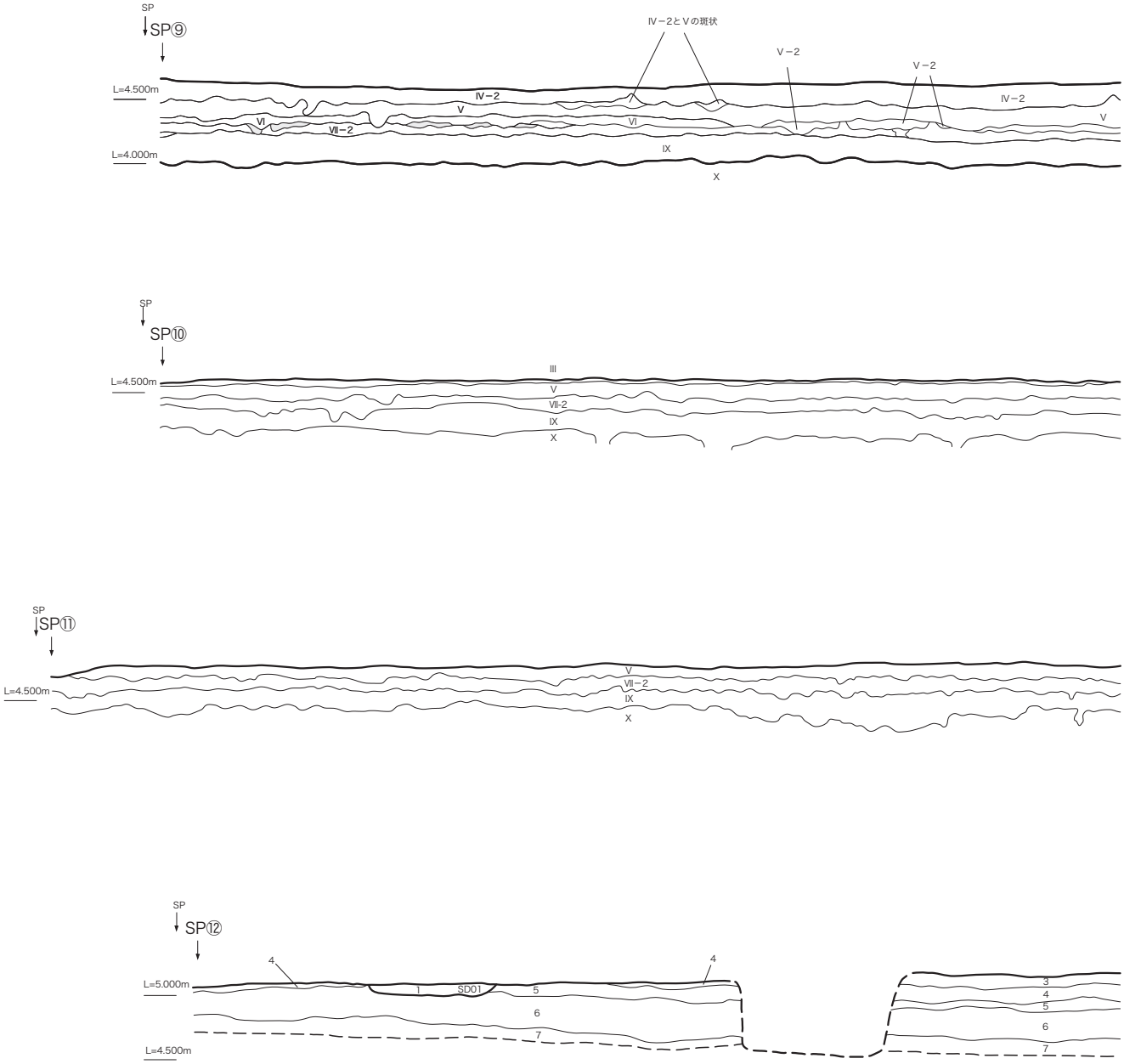
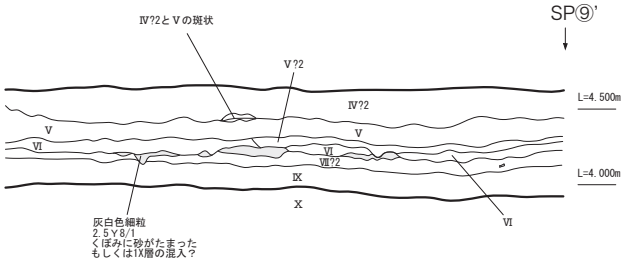
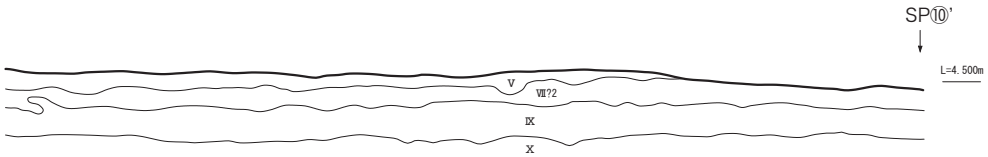
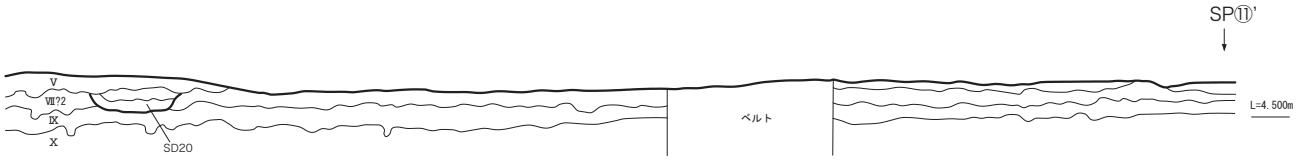
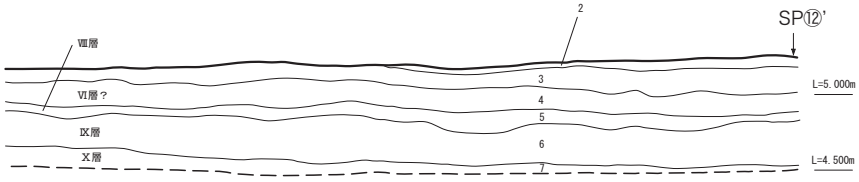


図 22　98B 区水田域土層断面図 2
SP 番号は図 18 に一致。









1. 10YR4/2　シルト・10YR8/6極細粒砂斑入
（3層→1層）
2. 10YR7/2　シルト
3. 10YR3/2　シルト質粘土
古代～中世遺物包含層
4. 10YR6/3　シルト
弥生前～中期遺物包含層
（Ⅵ層に対応するか？）
5. 10YR8/2　極細粒砂質シルト（Ⅷ層）
6. 10YR5/1　極細粒砂質シルト（Ⅸ層）
7. 10YR7/1　細粒砂（Ⅹ層）

SP ⑨—⑨ '・SP ⑩—⑩ '・SP ⑪—⑪ '・SP ⑫—⑫ '(1 ：50)

5．水田面で観察できるもの－稲株痕と耕具痕

稲株痕　水田面を精査することによって、水田面一面に無数の凹みが分布することが明らかとなった。水田跡を検出したⅦ層以外の層を精査した際に凹みはほとんど確認されず、Ⅶ層上面でも凹みは基本的には水田域のみでしか見受けられないことから、これらの凹みは稲株痕である可能性が高いと判断された。確認された稲株痕は径が10cm 前後を測るものがほとんどで、円形、もしくはやや不整な円形を呈する。深さは３～ 4cm のものが最も多い。断面形は幾種類か認められ、比較的浅い断面椀形のものと、やや深く、ほぼまっすぐ下方へのびるか、もしくはやや八の字状に下方へと広がるものが典型的なものである。埋土は上位のⅥ層の灰黄色シルトが混入したものである。水田面と比較してまばらではあるものの、畦畔上にも確実に凹みは確認される。なお、現地での調査時には、稲株痕の配列に規則性を認めることはできなかった。

耕具痕　水田面での精査では、稲株痕に混じって平面半月形、もしくは三日月形を呈する耕具痕とみられる凹みも確認できた。これらは幅 15cm 前後、探さ３～ 5cm を測るものが多い。残存状態が良好なものでは、斜めに踏み込まれていることが観察でき、踏み込まれた角度から、鋤跡と判断されようか。ただし、耕具痕は水田面を耕起するような連続的なものとしては検出されず、かなりまばらに検出されたことに注意したい。

第３節　その他の遺構

a.98 区 SD08(下層)　この自然流路は上層を古代末から中世の遺物を包含するものの、下層では弥生時代の遺物を包含する。水田跡が営まれていた段階で、微高地を挟んで北側に落ち込む自然流路の可能性がある。この流路も概ね北東―南西方向に向かって流れているようであり、途中で合流したりクランク状に屈折したりしている。断面形状は緩やかなU字状を呈する。検出時で最大幅 16m・深さ 1.6m を測る。(図 12)

b.99 区竪穴状遺構など (図 23 ～ 25)　99 区では、埋土に弥生中期の遺物を含む溝状遺構をはじめ、竪穴状遺構・土坑・ピットが検出されている。遺構は 99 区東端を中心に検出され、さらに東側に展開する様相を呈する。これらの遺構検出時の詳細なレベル状況は不明であるが、この部分が最も高い微高地であった可能性もある。竪穴状遺構 (SB01 ～ 08) は平面プランが方形状で、中からピットも検出されているものもある。いずれも壁溝の存在は不明瞭のようであり、SB08 の土層断面図で溝状のものが観察されるものが唯一である。また、いずれも明瞭な貼床・焼土などは見られなかった。SD10 は、調査区内では 30m 程にわたり弧状に展開する溝状の遺構で、SB07・08・09 に近接して存在する。断面形状は皿状を呈するもので、検出面からの深さは 25cm ほどであり、竪穴状遺構と深さは変わらない。しかし、当調査区からは被熱によるためか、若干黒色を呈する径 10cm 以上の河原石が割れた状態で出土している。これは当時期の居住域にしばしば見られる状況であることから、当調査区付近が何かしらの活動の場であった可能性はあろう。

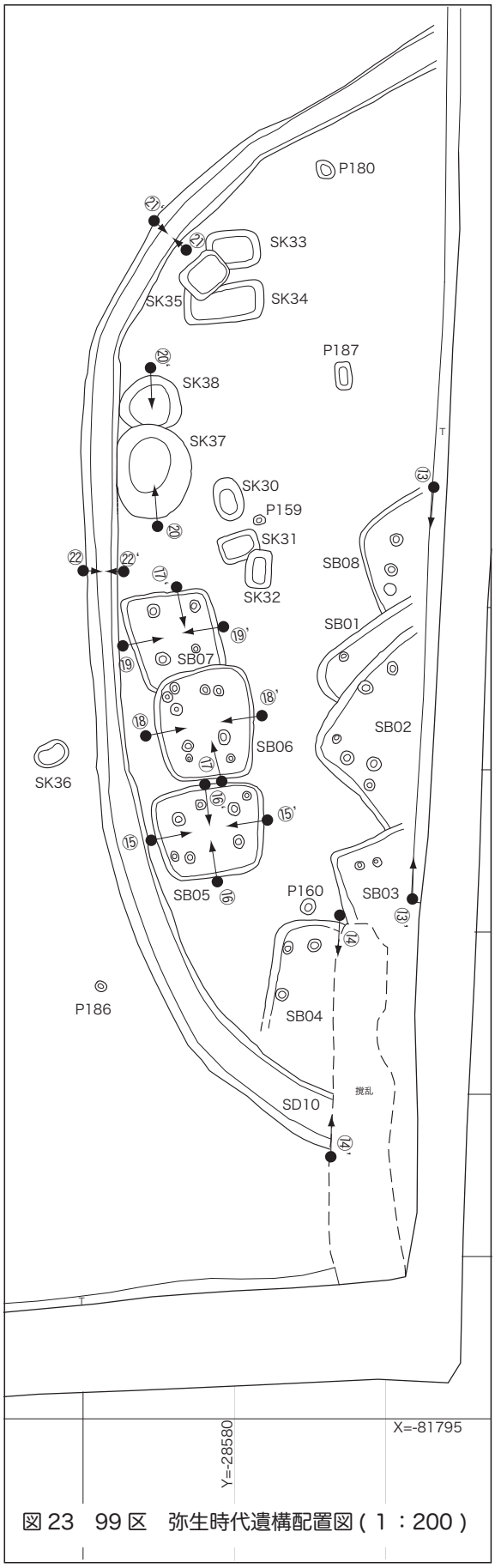
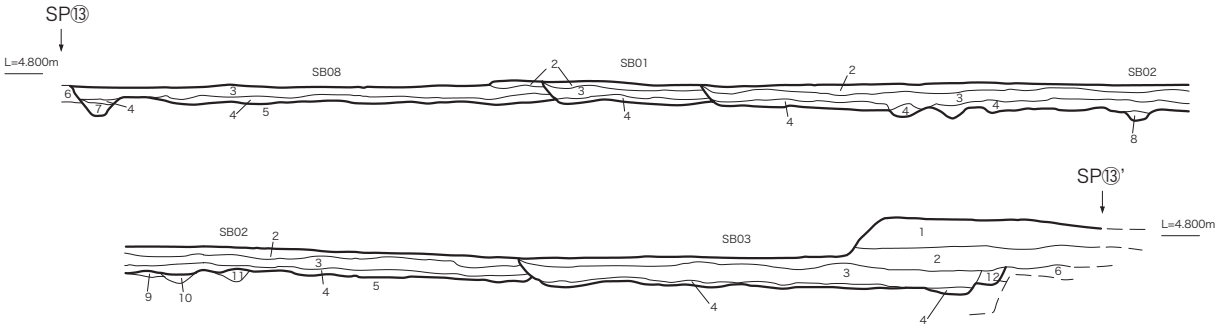
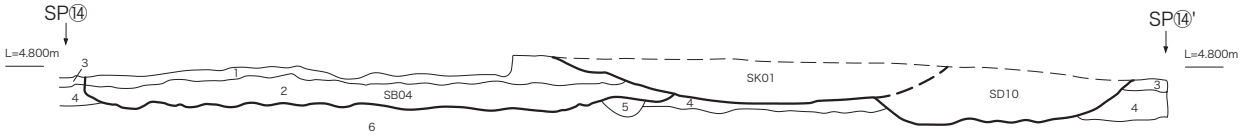


図 23　99 区　弥生時代遺構配置図 (1 ：200)



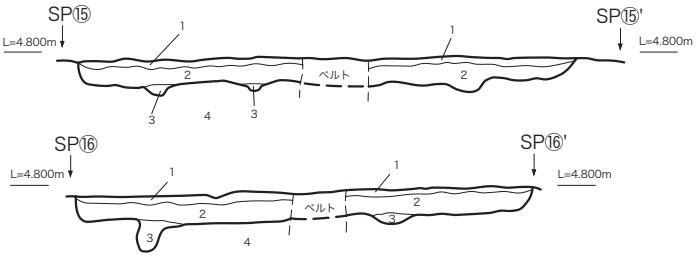
SP⑬

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（粘性弱い）
2. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト（粘性弱い）
3. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性弱い）
4. 「3」がブロック状に「5」に混入
5. 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂
6. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（粘性弱い）
7. 10YR4/2 灰黄褐色極細粒砂が「5」に混入
8. 「7」に同じ
9. 「7」に同じ
10. 「7」に同じ
11. 「7」に同じ
12. 「2」が「3」にブロック状に混入



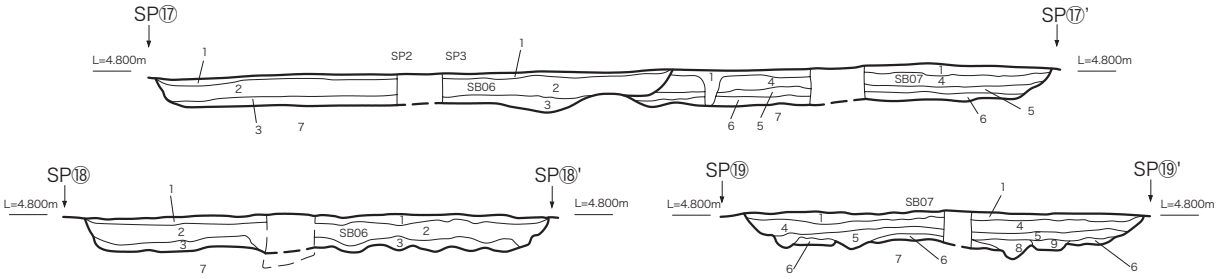
SP⑭

1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト（粘性弱い）
2. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性弱い）
3. 10YR3/3 暗褐色粘質シルト（粘性弱い）
4. 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト（粘性弱い）
5. 「6」に「2」がブロック状に混入
6. 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂



SP⑮・⑯

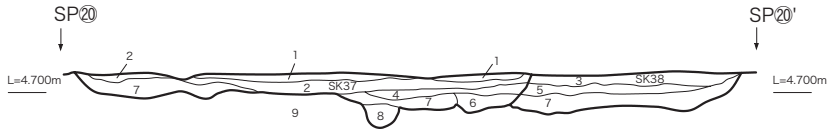
1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト（粘性弱い）
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
3. 「2」が「4」に混入
4. 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂



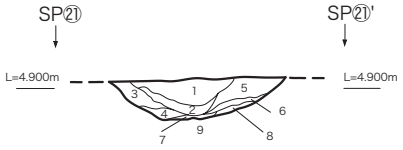
SP⑰・⑱・⑲

1. 10YR2/3 黒褐色粘質シルト（粘性弱い）
2. 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
3. 「2」が「7」に混入
4. 「2」に同じ
5. 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂
6. 「5」が「7」に混入
7. 5Y5/2 灰オリーブ色極細粒砂
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルトが「6」に混入
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂

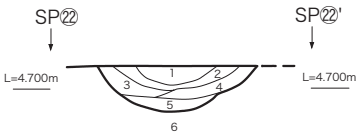
図 24　99 区各遺構土層断面図 1　（1：40、SP 番号は図 23 に一致）



1. 10YR3/5　暗褐色粘質シルト（粘性並）
2. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
3. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性弱い）
4. 10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト
5. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
6. 5Y5/2　灰オリーブ色極細粒砂が「4」に混入
7. 5Y5/2　灰オリーブ色極細粒砂に上層の「2」「4」「5」が混入
8. 10YR4/1　褐灰色極細粒砂が「9」にブロック状に陥入
9. 5Y5/2　灰オリーブ色極細粒砂



1. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト（粘性並）
2. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
3. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
4. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）に「9」のブロックが混入
5. 「3」に同じ
6. 10YR4/1　褐灰色極細粒砂
7. 「9」に「2」がブロック状に混入
8. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト
9. 2.5Y4/3　オリーブ褐色極細粒砂



1. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト（粘性並）
2. 10YR2/2　黒褐色粘質シルト(粘性やや強い)
3. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト(粘性やや強い)
4. 10YR3/2　黒褐色粘質シルト(粘性やや強い）に「6」が混入
5. 「6」に「3」がブロック状に混入
6. 2.5Y4/3　オリーブ渇色極細粒砂

図 25　99 区各遺構土層断面図２　（１：40 、SP 番号は図 23 に一致）

c.02 区 SD12　98A・B 区の境に広がる微高地上に存在する落ち込みである。近代以降の耕作が及ばず弥生時代から古墳時代の包含層が残存していた区域の北端にあたり、五条川に向かって南側に地形の傾斜が始まる地点付近である。地形の傾斜に沿って、北東―南西方向に傾いたコの字状を呈している。検出時で、幅３m・深さ 10cm を測る。性格などは不明である。

第４節　出土遺物

a. 土器および土製品 (図 26 ～ 30)

98B 水田検出の出土土器 (1 ～ 5)　1・2 は台付甕脚部である。1 は外面に縦方向あるいは斜方向のハケ目がある。脚部内面は縦方向に著しいユビナデが見られる。廻間 I 式以降か。2 は外面・内面ともに器面調整がユビナデを主体としており、脚部端部が内面側に「張り出す」ようになっている。高蔵式以降か。3 は外反する甕である。外面調整ナデ・内面調整横方向のハケで、外面には口縁端部に接して隆帯の貼付けがあり、ハケと同一工具により押し当てられている。口縁端部にも横方向にハケ目がみられる。高蔵式か。4・5 は深鉢あるいは甕の胴部片である。いずれも表面の摩滅が著しい。

98A 出土土器 (6 ～ 21)　98A 区の遺構検出時に出土した遺物で、98A 区でも南東端、すなわち 98B 区と接する「微高地」付近で出土した資料が主体である。6・9・12・13・21 は壺類、7・14 ～ 19 は甕、8・10・11・20 は深鉢である。壺は細頸壺と広口壺があり、貝田町式から高蔵式にかけてのものが見られる。13 は胴部上半部片で、竹管状工具より横方向あるいは弧状に沈線が施されている。甕は、口縁部と胴部片がある。14 ～ 16 は 3 と同様のもので、高蔵式か。深鉢は外面が条痕調整のもので、11 は櫛状工具によるものである。

98A SD08 出土土器 (22 ～ 43)　22 ～ 37 は SD08 下層から出土した資料である。22 ～ 28 は弥生中期末高蔵式に属し、31 も同様かも知れない。22・26 は条痕系深鉢、22 は外面に太い条痕が施されており、口縁内面にも同一工具の連続押圧が施されている。23 は 3 と同様のものである。28 の細頸壺は、口縁部に沈線による斜格子目が施されており、頸部は縦方向のミガキののち、横方向に太沈線が施されている。29・30・32 ～ 37 は弥生後期から終末期にかけての資料である。29 は台付甕脚部、30・32・33 は壺、34 ～ 37 は高坏である。29 は外面にハケ目が縦および斜方向にみられ、内面にも同様にハケ目がある。35 は脚部および坏部の外面および内面に縦方向のヘラミガキが行われており、その後口縁部に関しては横方向にナデ調整がなされている。38 ～ 43 も SD08 埋土から出土した資料である。38・39 は弥生中期中葉貝田町式新段階 / に属すると思われる細頸壺である。40 は弥生後期山中式の壺で、外面に赤彩が施されている。41 ～ 43 は古墳時代の古式土師器である。41 は松河戸 I 式に属すると思われる高坏で、坏部と脚部の接合部が外側に張り出す。42・43 は高坏脚部で、42 は廻間式、43 は松河戸式になるか。

99 SD10 出土土器 (44 ～ 48)　いずれも弥生中期に属すると考えられる。44・46 は甕で、44 は高蔵式。45・47・48 は壺である。

02 SD09 出土土器 (49・50)　いずれも壺片と思われる。50 は胴部下半の屈曲部に二条の隆帯が貼付けられている。

02 SD12 出土土器 (51 ～ 56)　51 ～ 55 は甕、56 は台付甕の脚部である。51 は頸部屈曲部に横

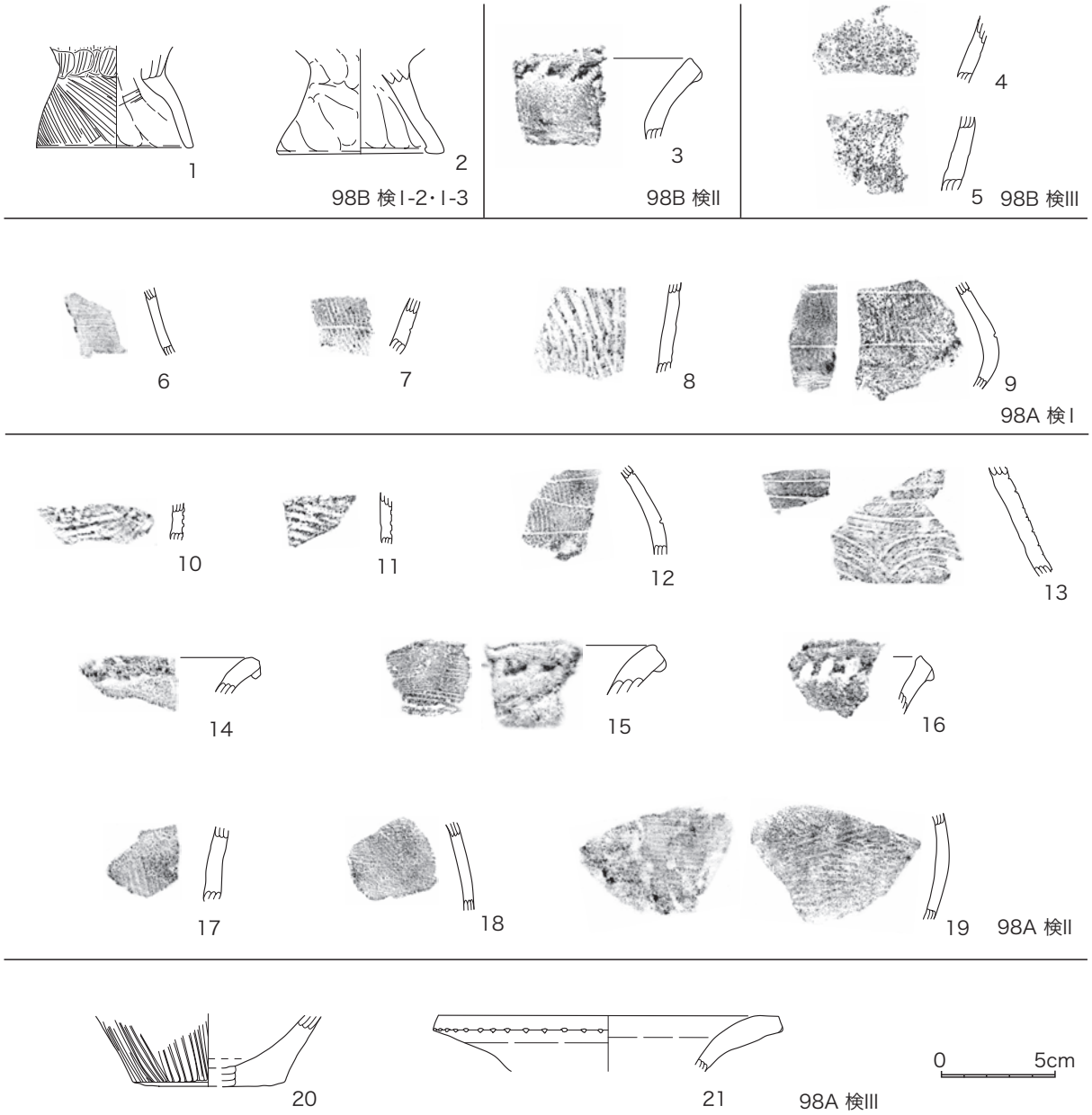
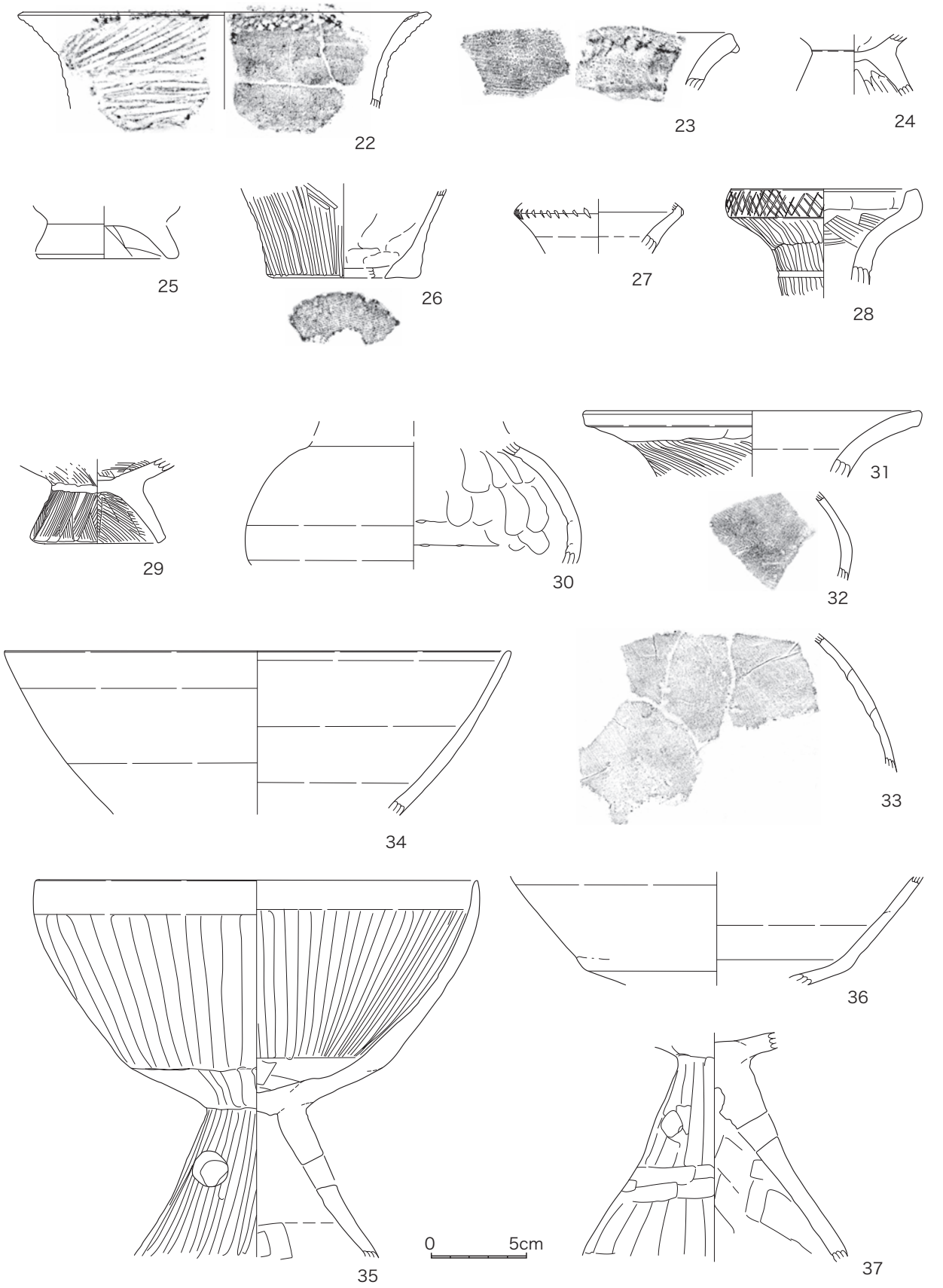


図 26　弥生時代～古墳時代の土器 1 (1 ： 3)

方向のハケ目が見られる。52 は口縁が受口状に屈曲する。53 は胴部上半に櫛状工具による沈線と連続刺突文が施されている。いずれも弥生後期に属すると思われる。

その他　76 は鉢の胴部と考えられ、上半はヨコナデ、下半はケズリ調整が見られる。縄文時代晩期末の馬見塚式に属する可能性がある。77 は遠賀川系の壺胴部上半部で、3 本の沈線状の文様が横走する。71 は壺で、表面の風化が著しいものの、胴部上半に横走する沈線が 1 条見られる。弥生前期でも新相か。72 ～ 75 は貝田町式新相を示すものか。58 は外面に横方向の粗い条痕がみられ、同一工具により口縁端部内面は刺突列、外面は押し引きを施している。58 ～ 62 は甕で高蔵式。63 ～ 65 は壺で中期後半か。79 ～ 81 も同時期



98A SD08下層

図 27　弥生時代〜古墳時代の土器２(１ ： ３)

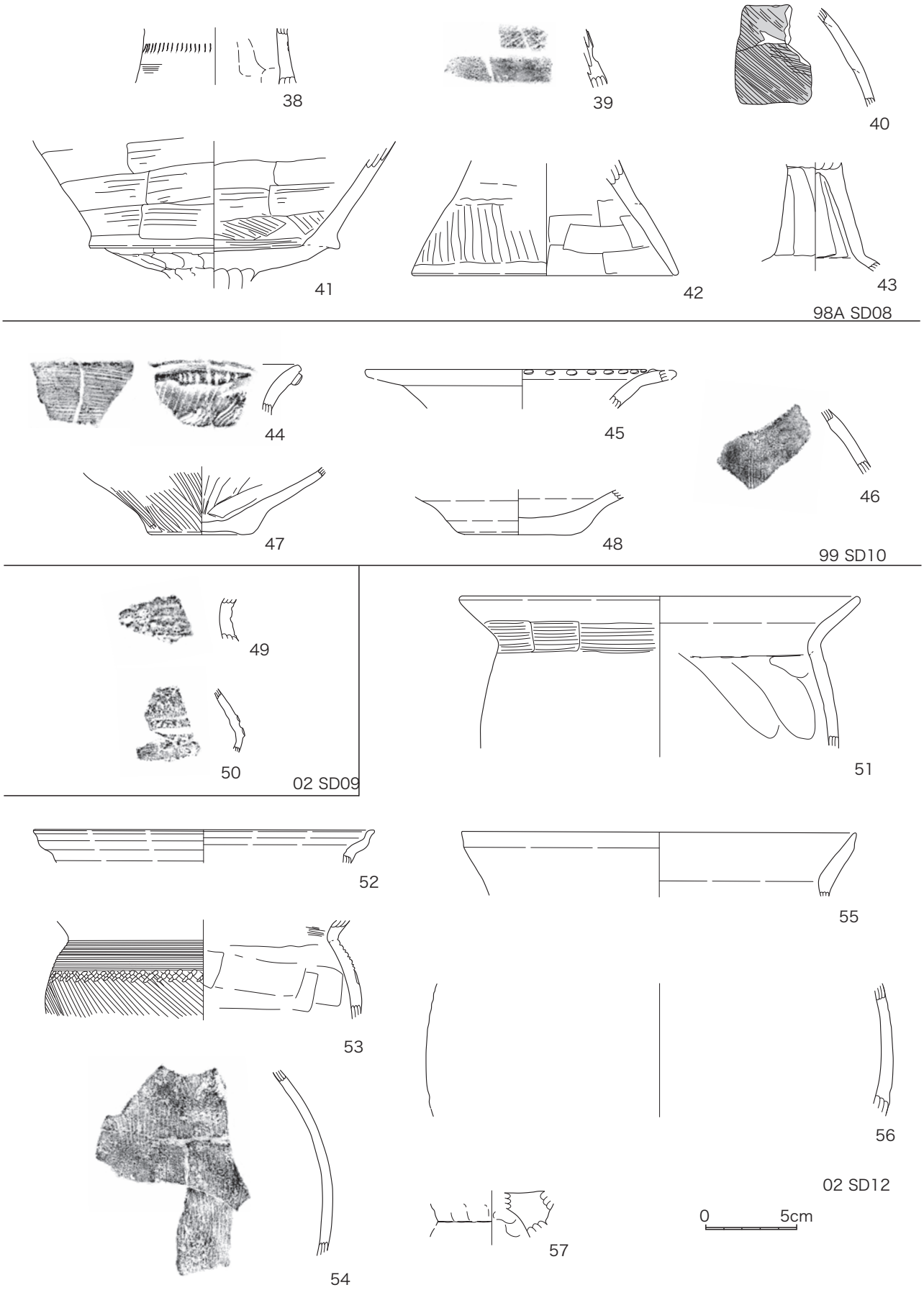


図 28　弥生時代～古墳時代の土器３(１ ： ３)

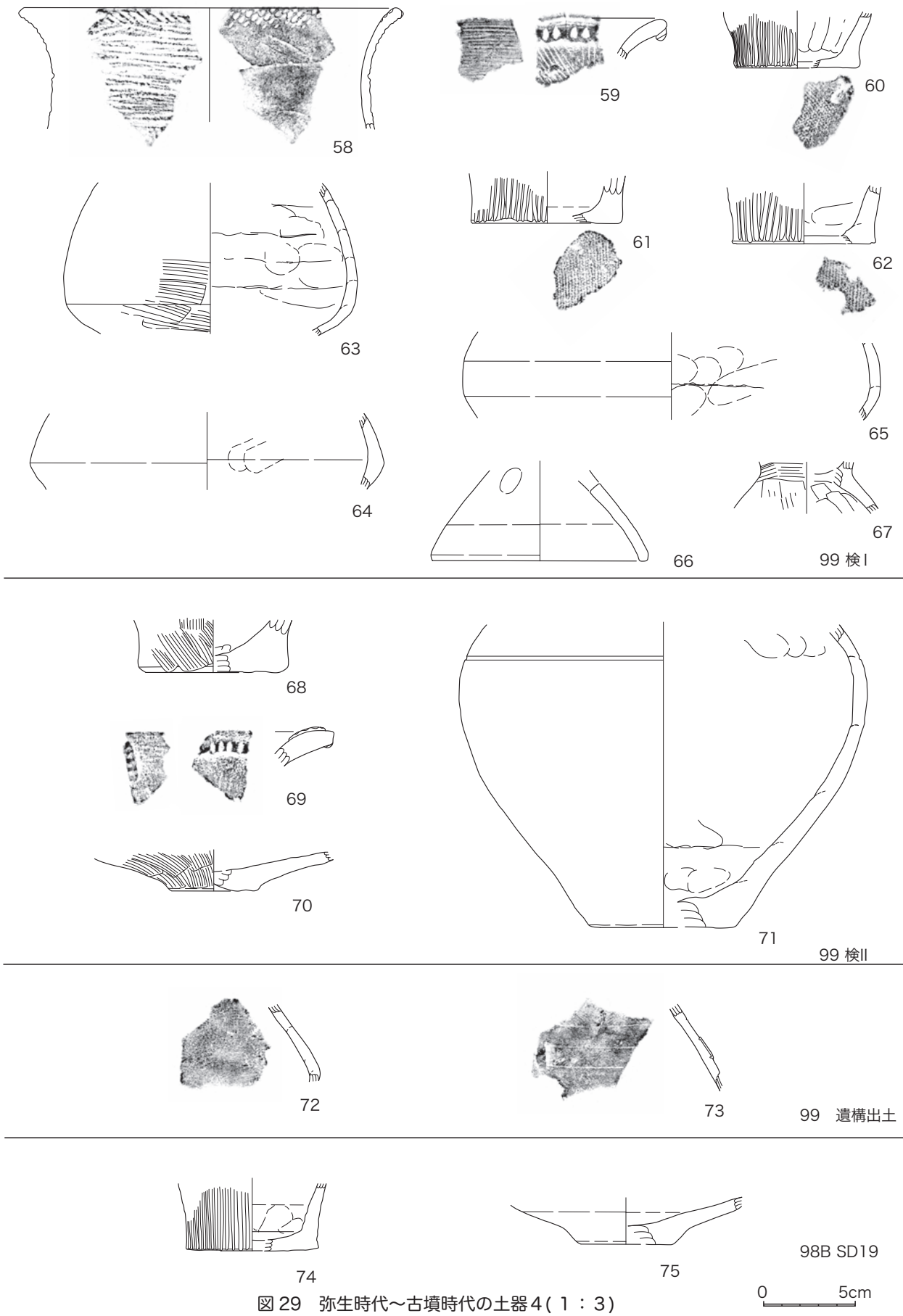


図 29　弥生時代～古墳時代の土器４(１ ： ３)

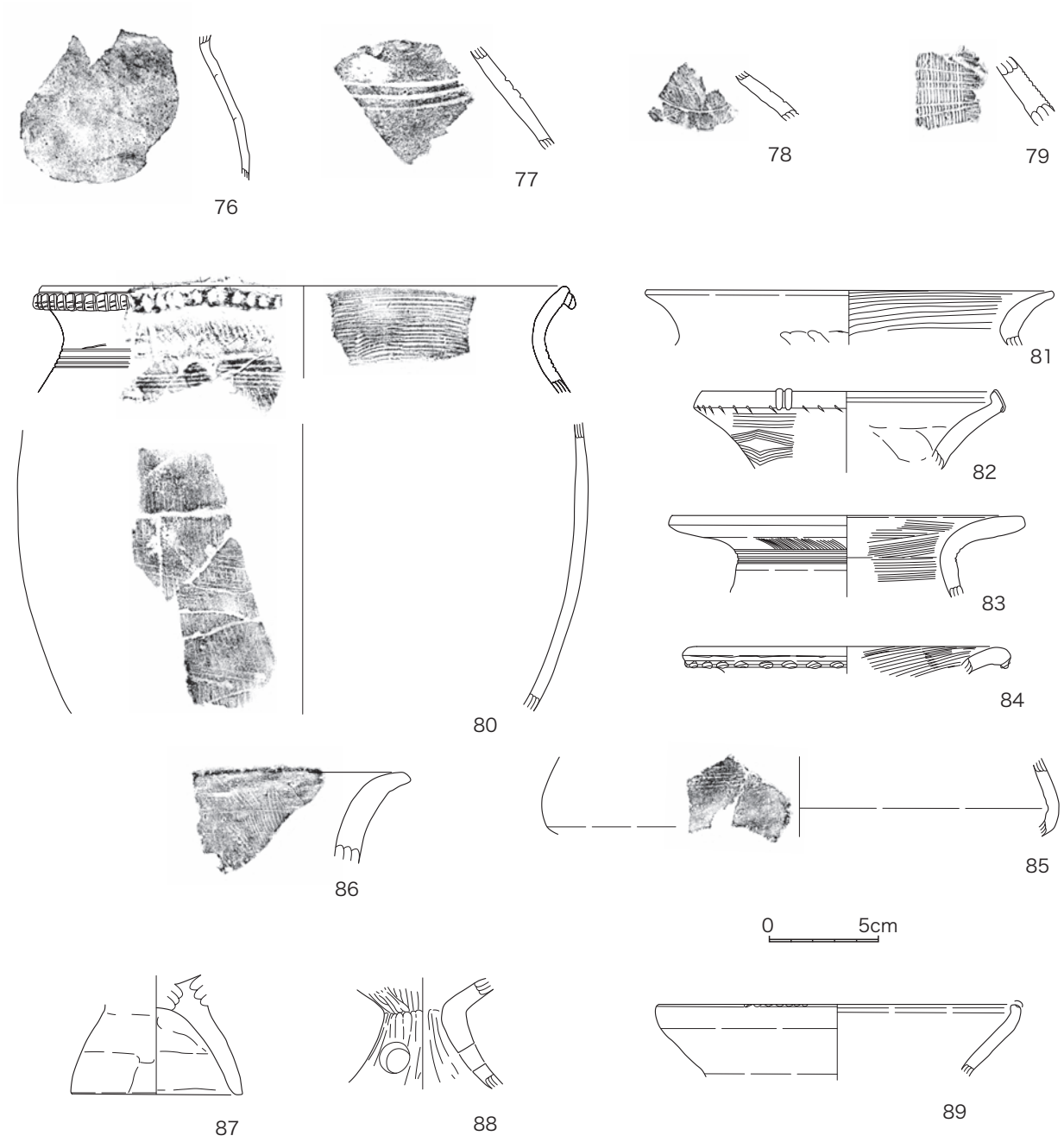


図 30　弥生時代〜古墳時代の土器５(１ ： ３)

と考えられる。80 は口縁端部外面に貼付け隆帯のある甕である。66・67 は高坏・器台の脚部で、弥生後期〜終末に属するものと考えられる。87・88 も弥生後期以降に属すると考えられるもので、89 は古墳時代初頭に属すると思われる甕と考えられる。

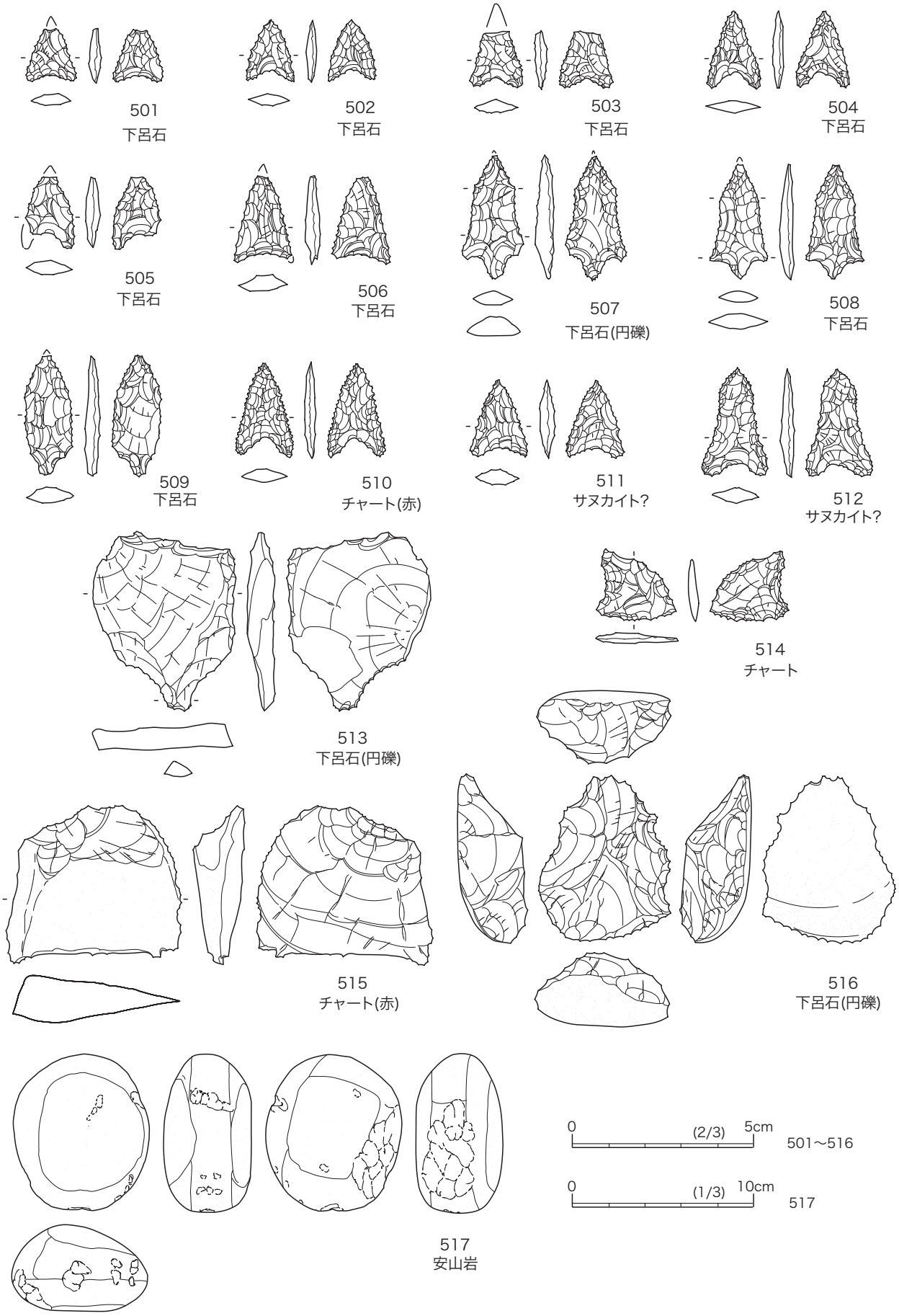


図 31　弥生時代～古墳時代の石器

b. 石器 (図 31)

石鏃 (501 ～ 512)　12 点出土した。基部形態では無茎鏃 (501 ～ 506・510 ～ 512) と有茎鏃 (507 ～ 509) とに分けられる。先端部の平面形態では、五角形を呈するものが有茎鏃 (507・508) と無茎鏃 (512) の両者で認められる。断面形状では、凸レンズ状もしくは扁平な菱形を呈するものと、台形もしくはカマボコ状を呈するもの (507・509 など) とがある。510 は側縁が鋸歯状を呈するものである。使用石材は下呂石が圧倒的に多いものも、チャート (510) やサヌカイトと思われる石材 (511・512) も見られる。

スクレイパー類？(514)　調整の見られる剥片で、縁辺の一部に若干不連続な微細剥離が認められるものである。チャート製。

剥片・石核 (513・515・516)　当遺跡から出土した、小型剥片石器 (ツール) に対応すると考えられる剥片は数片のみである。513 は下呂石円礫の剥片で、同一方向から剥片作出を行った様子が窺えられる。515 はやや角礫化した原石から作出されたチャートの剥片である。516 は下呂石円礫の石核である。礫表皮から打点を変えながら、同一方向に剥片 (恐らく貝殻状剥片か) の作出が行われている。

磨石・敲石 (517)　可能性のあるものも含めて３点あるが、１点のみ図示した。やや長楕円形を呈する礫の平面・側面に敲打痕が認められるもので、特に側面の一部分に敲打痕が集中しているのが確認できる。

その他　当遺跡からは表面が黒色化および赤色化した礫が計 31 点出土している。これらの色調変化は恐らく被熱によるものと考えられる。石材はほぼ濃飛流紋岩で、重量が 20g 程度のものもあれば 1000g を越える大きなものも存在する。これらの礫のいくつかは割れており、その割れ面には赤色化した部分が見られる場合はあるものの、黒色化した部分は見られない。これらのいくつかは「炉縁石」の可能性がある。「割れ」は打点が明瞭に認められるものも若干あるものの、多くは「割れ」の方向が不明瞭なものである。これらの中には台石一個体分が複数個に分割されたと考えられるものもある。

c. 金属製品 (図 32)　上述したように、98B 区大畦畔脇から銅鏃が 1 点出土している。無茎鏃と考えられ、現存で長さ 3.05cm・幅 1.32cm・厚さ 0.39cm を測る。脚部および縁辺が各所で欠失しているものの、平面形態は五角形を呈する可能性がある。側面観からでは、最大厚は現存で先端より３分の１ほどの位置になるようである。断面形状は扁平な菱形を基本とする。平面は両面ともに縦・横方向に研磨痕が見られるものの、基部の凹部分は研磨などの調整は行われておらず、鋳出した状態そのままの可能性がある。

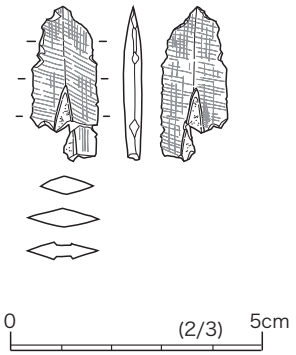


図 32　弥生時代～古墳時代の青銅器 (銅鏃)

第４章　古代以降の遺構・遺物

第１節　検出遺構

各調査区で面的に遺構が展開する状況が見られた (図 33 ～図 40)。遺構の種類としては、溝・ピット・土坑があり、近世以降については部分的に水田跡も検出された。加工円盤などを除いて、当時の意図的な状態で遺物が出土している例が少なく、かつ遺構内に遺構内からの出土遺物量はそれほど多くないことから、明確に時期決定できる遺構は多くない。

遺構の主体となる溝に関して見ると、東―西 (あるいは南―北) 方向に展開するものと、北西―南東 (あるいは北東―南西) 方向に展開するものとの、大きく二群に分かれる。大まかには、前者は方位に沿った溝で、後者は地形の傾斜に沿った溝、という傾向は窺えられるものの、98A 区では南―北方向気味の溝にも地形の傾斜が影響している可能性がある。以下､時期ごとに報告する。

第２節　古代の遺構

98A 区を中心に須恵器・灰釉陶器の出土が見られた。しかし、当該時期の遺構として提示できるものは、極めて少ない。後述するように、98A 区 SD03・SD06・SK19 などでは、古代の遺物が出土している。しかし、遺構の配置・断面形状などの様相から、積極的に当該時期の遺構とすることは難しい。

ここで報告するのは、厳密な意味での古代の遺構ではない。古代にはすでに埋没した可能性のある遺構について言及する。

98 A区 SD05　検出時で幅 550cm・深さ 170cm ほどを測り、断面形状は緩やかな V 字状を呈する。堆積の状況により、粘土・砂・シルトの互層の下層と、粘土を中心とする上層とに分かれる。下層の砂は粗粒砂を主体としており、下層堆積時の水流は著しかったものと考えられる。出土遺物は希少ではあったが、上層からは古代の須恵器が出土している (98)。

98 A区 SD08　検出時で幅 570cm・深さ 180cm ほどを測り、断面形状は緩やかな V 字状を呈する。これも堆積の状況により、粘土・砂・シルトの互層の下層と、粘土を中心とする上層とに分かれる。下層に見られる砂は細粒砂や極細粒砂が主体のようである。下層からは、第３章で報告したように、弥生中期から古墳時代にかけての遺物がまとまって出土している (22 ～ 43)。また、この溝を掘り込んで設けられている、98 A 区 SD03・06 からは、古代の須恵器・土師器がまとまって出土している (100 ～ 108)。

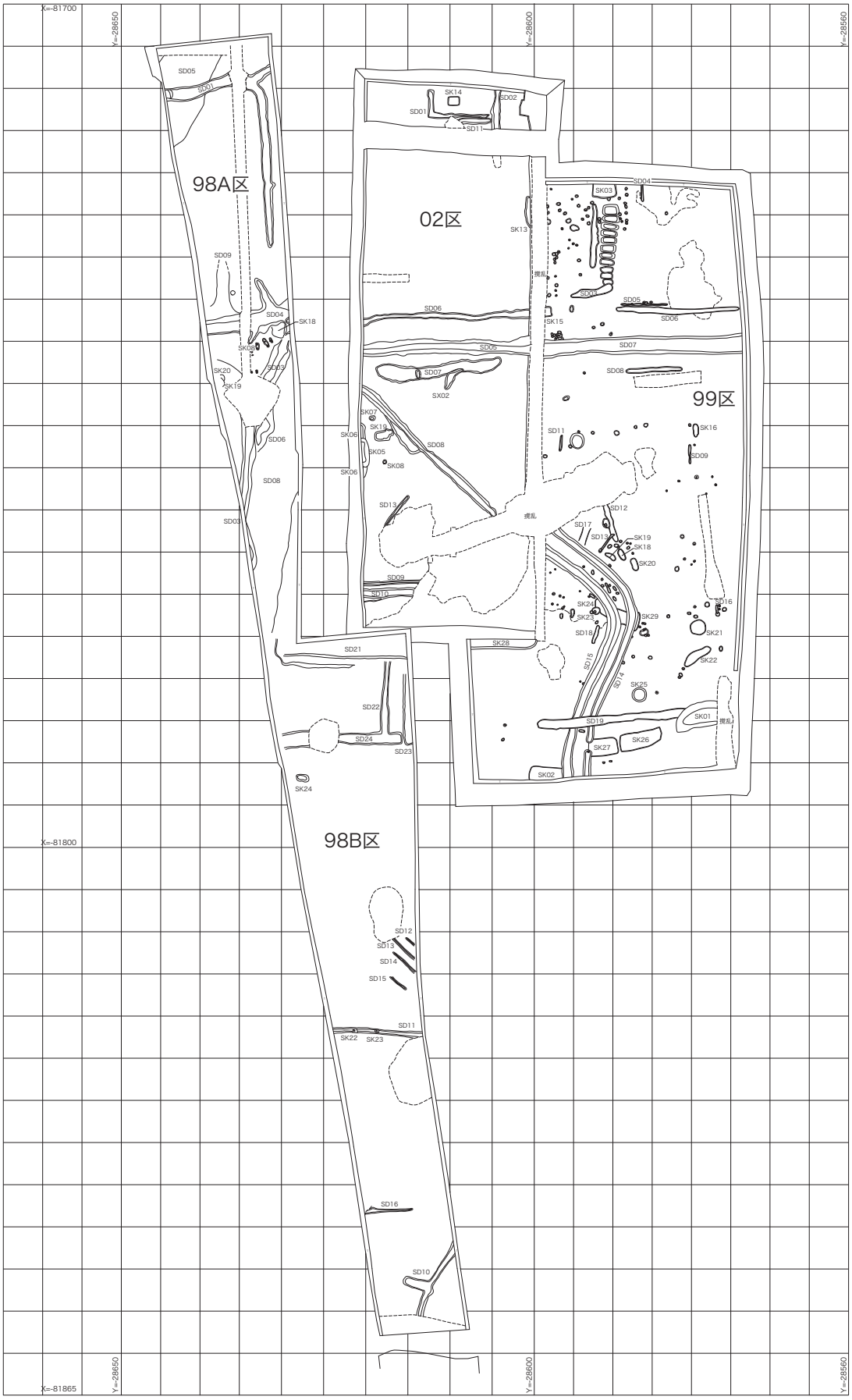


図 33　古代以降の遺構配置図 (1 ：700)

第３節　中世の遺構

この面で検出された遺構群の主体をなすと考えられる。上述したように、溝の方向として北西―南東 (あるいは北東―南西) 方向に展開するものと、東―西 (あるいは南―北) 方向に展開するものとの、大きく二群に分かれる。

１. 北西―南東 (あるいは北東―南西) 方向の溝

98 A 区 SD03・06　南―北方向気味の溝で、若干北東―南西方向に振れている。SD03 は SD06 の上層部である。検出時で幅 180cm ～ 200cm・深さ 40 ～ 50cm を測り、断面形状は逆台形気味を呈する。当地点は、弥生時代中期以降に埋まり始めた SD08 の埋土上層中に設けられており、周囲よりも窪地化していたためか、その後 98 A 区 SD02・04・07 など幾条もの溝が重なることとなっている。溝内からまとまった遺物の出土をみたものの、これらは SD08 上層付近の遺物が混入したものと考えられる。

98 B 区 SD10　北東―南西方向の溝に、北西―南東方向の溝が接している。検出時で、幅 80cm を測る。溝内から中世の山茶碗などがまとまって出土している。

99 区 SD14、99 区 SD15・02 区 SD08

99 区 SD14・15 は平行しており、北西―南東方向から北東―南西方向に屈曲している。検出時では、SD14 が幅 110cm・深さ 30cm ほどを測り、断面形状は浅いＵ字状を呈する。同じく SD15 では、幅 170cm・深さ 70cm を測り、断面形状は深いＵ字形を呈する。SD14 よりも SD15 の方が、より遺構の法量が大きい傾向がある。SD14 は調査区南端付近で一旦途切れるようである。また、SD14・15 の埋土中からは、山茶碗などの

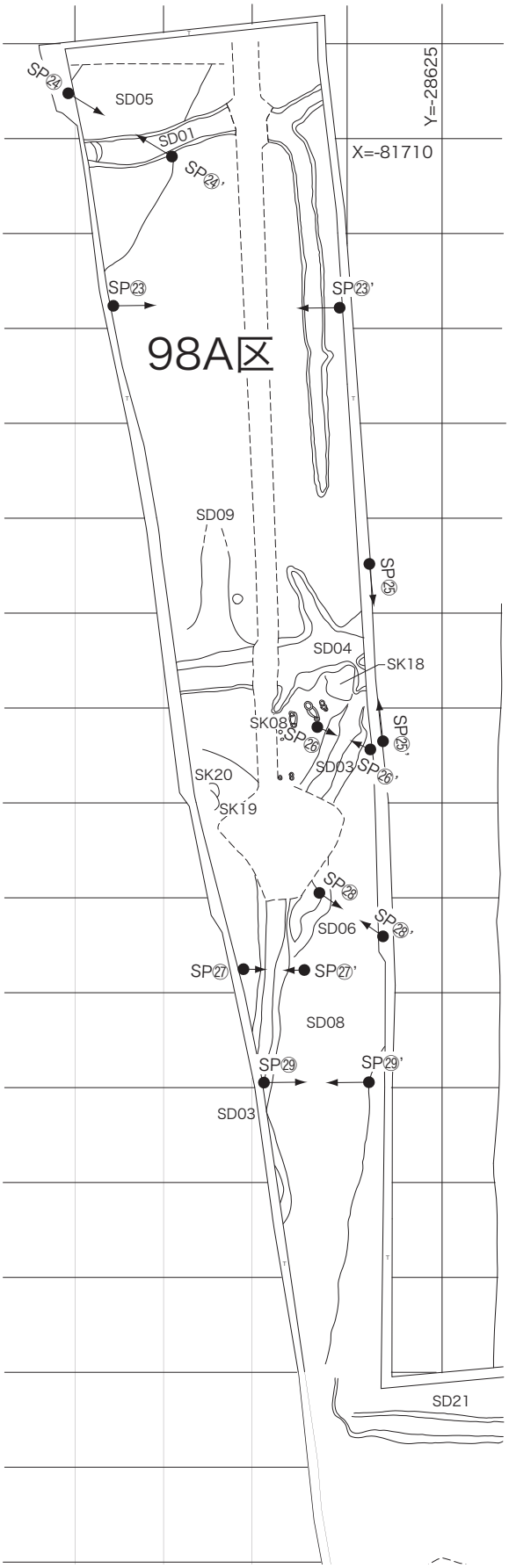


図 34　98 A 区古代以降遺構配置図 (１：350)

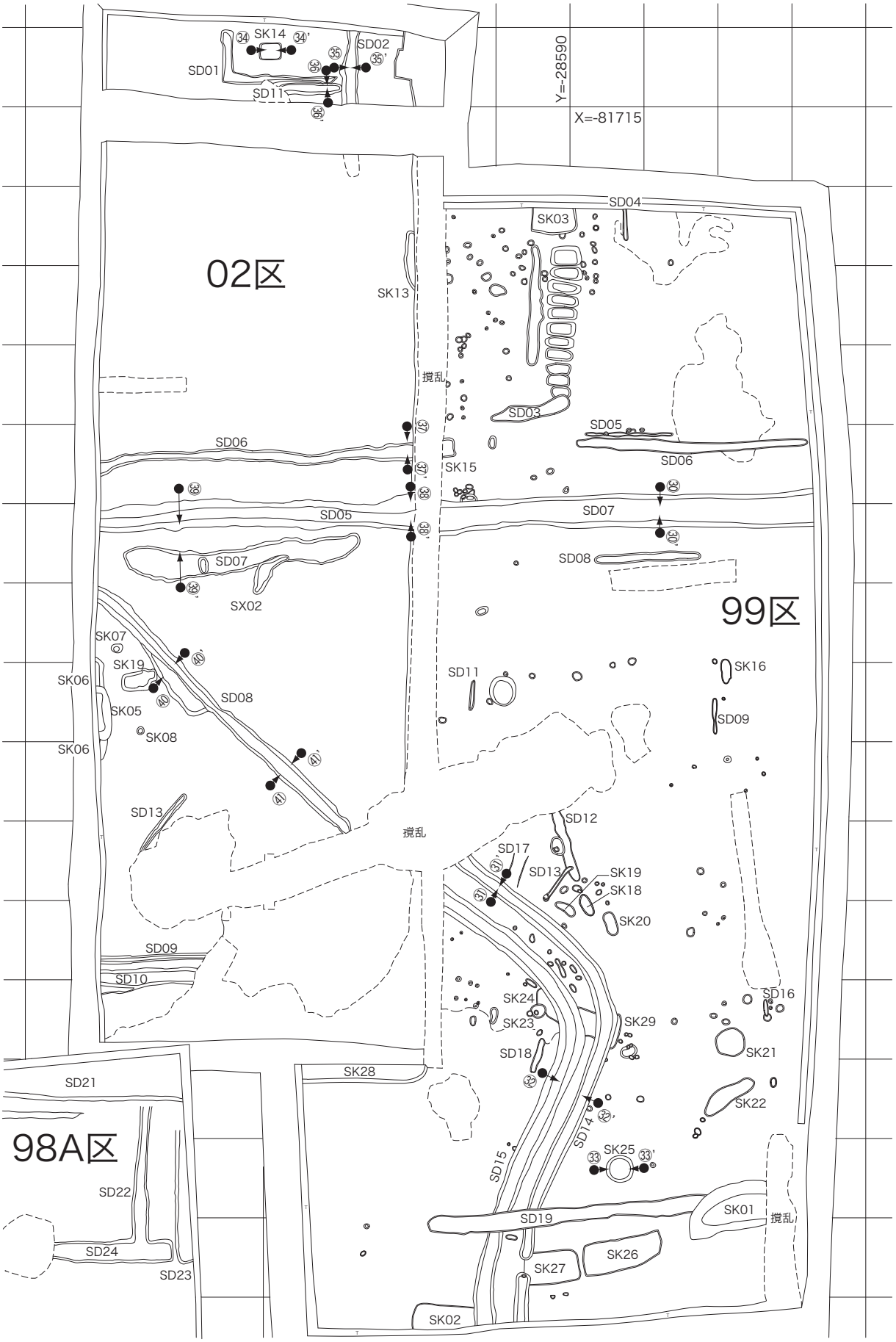
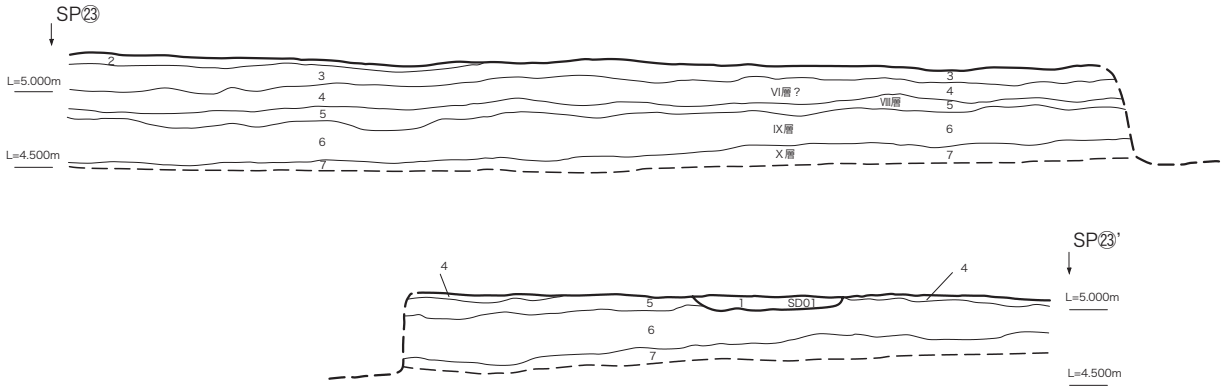
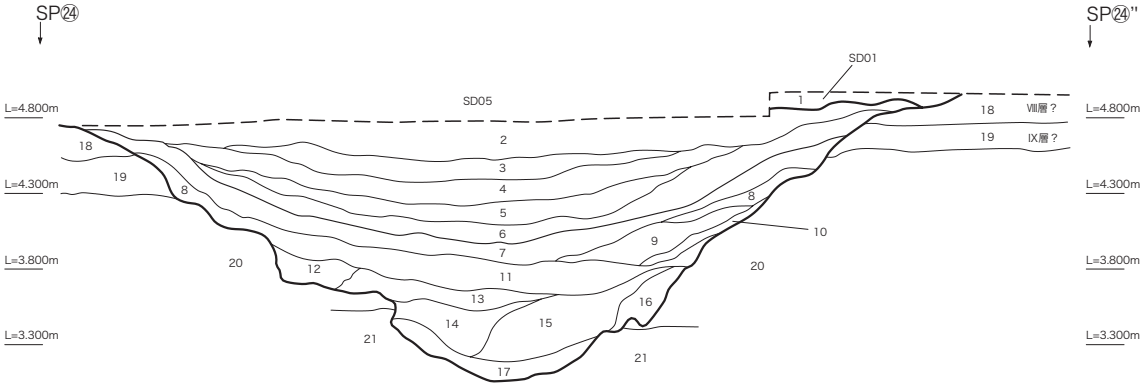


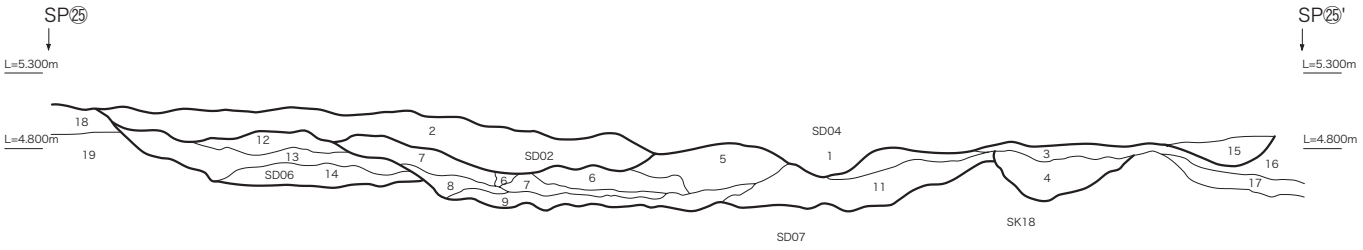
図 35　99 区・02 区古代以降遺構配置図 (1 ：350)



1. 10YR4/2　シルト・10YR8/6極細粒砂斑入（3層→1層）
2. 10YR7/2　シルト
3. 10YR3/2　シルト質粘土 古代～中世遺物包含層
4. 10YR6/3　シルト　　弥生前～中期遺物包含層（VI層に対応するか？）
5. 10YR8/2　極細粒砂質シルト（VIII層）
6. 10YR5/1　極細粒砂質シルト（IX層）
7. 10YR7/1　細粒砂（X層）



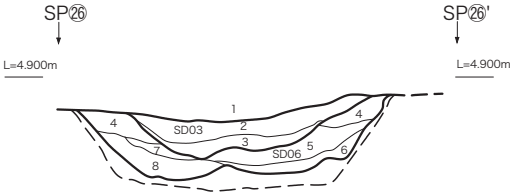
1. 10YR4/2　粘質シルト(10YR8/1極細粒砂斑入)
2. 7.5YR3/2　粘土(2.5Y8/3極細粒砂斑入)
3. 10Y3/1　粘土
4. 10Y2/1　粘土
5. 5GY3/1　粘土
6. 2.5GY4/1　粘土
7. 7.5Y4/1　極細粒砂質シルト
8. N5/0　シルト質粘土
9. 5GY2/1　粘土,N7/0シルト混じり
10. 5GY6/1　シルト
11. 7.5Y7/1　粗粒砂と7.5Y4/1粘土の互層
12. 5GY6/1　シルト
13. 2.5GY4/1　粘土（5GY6/1シルト少量斑入）
14. 2.5GY4/1　粘土（5GY6/1シルト斑入）
15. 2.5GY2/1　粘土
16. 2.5GY2/1　粘土,5GY6/1シルトブロック混入
17. 2.5GY2/1　粘土ブロック,粗粒砂混じり
18. 10YR8/1　シルト
19. 10YR3/1　砂質シルト
20. 5GY6/1　シルト
21. 5Y7/3　粗粒砂



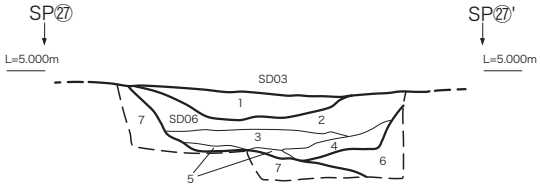
1. 2.5Y4/2　シルト　Mn斑の沈着が顕著（中世？）1.2層の下位にFe沈着する
2. 2.5Y7/2　細粒砂(中世？の洪水性堆積)
3. 2.5Y5/1　粘質シルトと2.5Y7/1シルトの縞状
4. 2.5Y5/1　粘質シルト(炭化物少量混)
5. 2.5Y5/1　粘質シルト(炭化物少量混)
6. N5/0　粘土と2.5Y7/2細粒砂(ラミナ状)
7. N5/0　粘土(細粒砂斑入)
8. N4/0　粘土
9. N8/0　細粒砂(N4/0粘土ブロック混)
10. 5Y4/1　シルト質粘土(2.5Y7/2細粒砂互層状N4/0粘土ブロック混)
11. 5Y4/1　シルト粘土質(2.5Y7/2細粒砂の互層状)
12. 5Y3/1　粘土(5Y7/1極細粒砂斑入　Fe斑沈着)
13. 10YR3/2　粘土(Fe斑沈着)
14. 5Y5/1　粘土(Fe斑沈着)
15. 2.5Y5/1　シルト(2.5Y8/1極細粒砂の互層状)
16. 5Y7/1　細粒砂
17. N3/0　粘土
18. 10YR5/2　シルト(Mn斑の沈着が顕著)
19. 2.5Y7/1　細粒砂

図 36　各遺構など土層断面図 1 (1 ： 50)

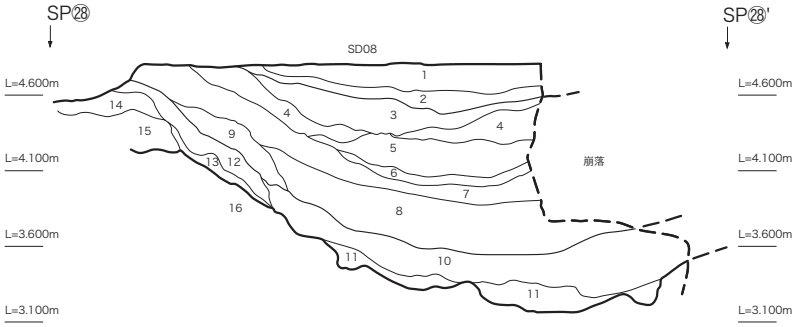
SP 番号は図 34・35 に一致



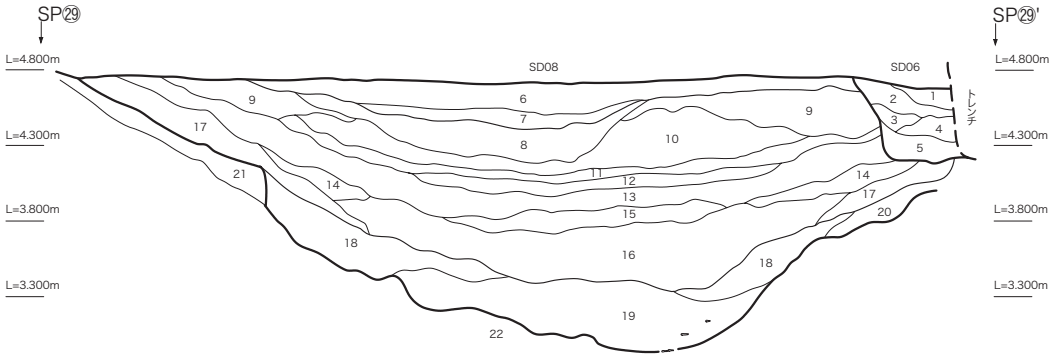
1. 5Y8/2　細粒砂（中世：洪水性の堆積）
2. 5Y8/3　シルト-SD03
3. 5Y6/1　粘質シルト-SD03
4. 10YR5/3　シルト
5. 5Y5/1　粘土
6. 5Y4/1　粘土(5Y8/1極細粒砂斑入)
7. 5Y5/1　シルト質粘土(5Y8/1極細粒砂の互層状)
8. 5Y4/1　粘土



1. 2.5Y6/2　シルト-SD03
2. 10Y5/2　シルト-SD06
3. 2.5Y4/2　細粒砂-SD06
4. 10YR3/3　粘質シルト-SD06
5. 2.5Y6/1　細粒砂＋10Y3/2粘質シルト（斑土)-SD06
6. 10YR3/2　粘質シルト
7. 2.5Y6/1　細粒砂-ベース



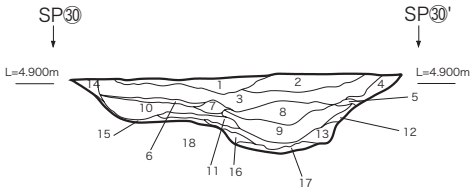
1. 5Y3/1　腐植質粘土
2. 5Y4/1　粘土
3. 5Y6/2　極細粒砂質シルト
4. 5Y6/2　シルト
5. 5Y7/3　中粒砂
6. 5Y6/2　シルト
7. 7.5Y5/1　シルトと7.5Y8/1中粒砂の互層
9. 7.5Y5/1　シルト質極細粒砂
10. 10Y3/1　粘土と5Y8/4粗粒砂のラミナ
11. 10Y3/1　粘土と5Y8/4粗粒砂のラミナに7.5Y2/1粘土ブロック含む
12. 2.5GY5/1　シルト
13. 7.5Y6/2　シルト7.5Y8/1粗粒砂まじり
14. 7.5Y8/1　シルト
15. 7.5Y7/1　中粒砂
16. 7.5Y8/1　粗粒砂



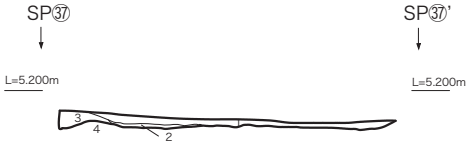
1. 5Y6/3　シルト(炭化物少量しまり有り)
2. 5Y5/2　粘質シルト
3. 5Y4/1　シルト質粘土
4. 5Y6/1　粗粒砂
5. 5Y4/1　シルト質粘土と5Y7/1細粒砂の斑土
6. 5Y3/1　腐しょく質粘土
7. 5Y4/1　粘土
8. 5Y6/2　極細粒砂質シルト
9. 5Y6/2　シルト
10. 5Y7/3　中粒砂
11. 5Y6/1　細粒砂
12. 5Y5/2　細粒砂
13. 5Y6/2　シルト
14. 5Y7/2　中粒砂
15. 5Y6/1　極細粒砂
16. 7.5Y5/1　シルトと7.5Y8/1中粒砂の互層
17. 7.5Y5/1　シルト質極細粒砂
18. 10Y3/1　粘土と5Y8/4粗粒砂のラミナ
19 10Y3/1　粘土と5Y8/4極細粒砂のラミナに7.5Y2/1粘土ブロック含む
20. 10G2/1　粘土
21. 7.53/2　粘土
22. 7.5Y8/1　粗粒砂

図 37　各遺構など土層断面図２(１：50)

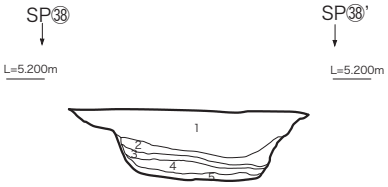
SP 番号は図 34・35 に一致



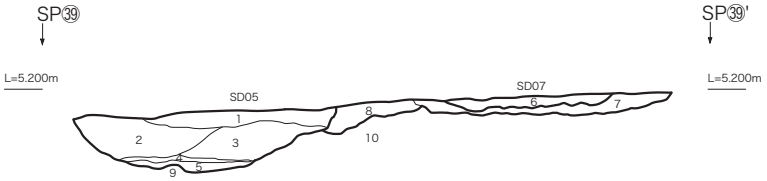
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色極細粒砂
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
4. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂
5. 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂（鉄分沈着）
6. 「3」に鉄分沈着
7. 「5」に同じ
8. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性並）
9. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性やや強い）
10. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性やや強い）
11. 10YR4/1 褐灰色粘質シルト（粘性やや強い）
12. 10YR4/1 褐灰色極細粒砂
13. 10YR4/1 褐灰色粘土
14. 「4」に同じ
15. 10YR4/1 褐灰色細粒砂に「13」がブロック状に少し混入
16. 10YR5/1 褐灰色細粒砂が「13」に少し混入
17. 10YR5/1 褐灰色細粒砂に「13」がブロック状に混入
18. 10YR5/1 褐灰色細粒砂または2.5Y4/3オリーブ褐色細粒砂



1.10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト（鉄斑混じる）
2.10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト（鉄斑混じる）
3.10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト（鉄斑混じる）
4.10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト質極細粒砂（鉄分沈着が認められる）

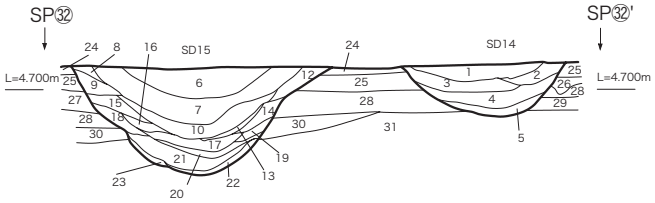


1.2.5Y 4/3 オリーブ褐色シルト（マンガン斑、鉄斑混じる）
2.2.5Y 4/2 暗灰黄色シルト（マンガン斑混じる）
3.10YR 4/6 褐色シルト（鉄分の沈着が認められる）
4.10YR5/2 灰黄褐色粘土（10YR 4/2 灰黄褐色細粒砂 斑入、鉄斑混じる）
5.10YR 5/3 にぶい黄褐色細粒砂（地山）

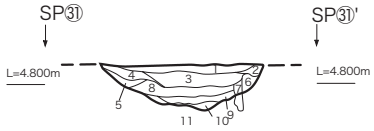


1. 10YR 6/4 にぶい黄橙色シルト（鉄斑混じる）
2. 10YR 4/2 灰黄褐色シルト（鉄斑、マンガン斑混じる。
10YR4/4 褐色シルト質極細粒砂 斑入）
3. 10YR 5/4 にぶい黄褐色シルト・10YR 7/1 灰白色シルト斑土、マンガン斑混じる
4. 10YR 4/6 褐色シルト（鉄分沈着が認められる）
5. 10YR 5/2 灰黄褐色粘土（10YR 4/2 灰黄褐色細粒砂 斑入、鉄斑混じる）
6. 10YR 3/4 暗褐色シルト（鉄斑混じる）
7. 10YR3/3 暗褐色シルト（10YR 4/4 褐色シルト 斑入）
8. 10YR 3/2 黒褐色シルト（鉄斑混じる）
9. 10YR 5/3 にぶい黄褐色細粒砂（地山）
102.5Y 5/2 暗灰黄色シルト（鉄分沈着が認められる）

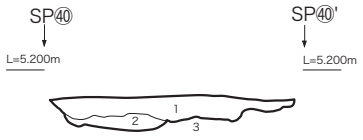
図 38 各遺構など土層断面図 3 (1 ： 50)
SP 番号は図 34・35 に一致



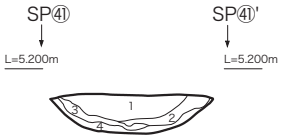
1. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
2. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
3. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
4. 10YR4/1　褐灰色砂質シルト
5. 10YR4/1　褐灰色極細粒砂
6. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
7. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
8. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性弱い）に「9」の斑点
9. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
10. 10YR4/1　褐灰色粘土
12. 「9」に同じ
13. 「10」に「14」が混入
14. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性並）
15. 「14」に同じ
16. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
17. 10YR4/1　褐灰色粘土
18. 10YR4/1　褐灰色粘土に10YR4/1褐灰色極細粒砂混入
19. 10YR4/1　褐灰色粘土に「14」に混入
20. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト（粘性強い）
21. 10YR4/1　褐灰色粘土に「31」混入
22. 「31」に「21」がブロック状に混入
23. 10YR2/2　黒褐色粘土がブロック状に「31」に混入
24. 「8」と同じ
25. 「9」と同じ
26. 「9」に2.5Y4/2　暗灰黄色極細粒砂混入
27. 「15」に同じ
28. 2.5Y4/1　暗灰黄色極細粒砂
29. 10YR4/1　褐灰色極細粒砂
30. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト
31. 10YR4/2　灰黄褐色極細粒砂



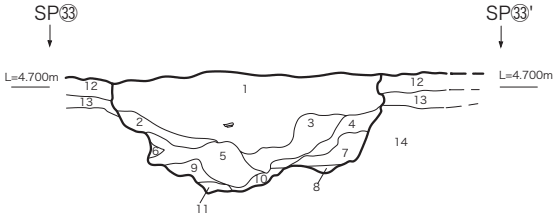
1. 10YR5/2　灰褐色砂質シルト
2. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）のブロックが「1」に混入
3. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
4. 10YR4/3　にぶい黄褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
5. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
6. 「5」に同じ
7. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性並）
8. 「3」に「4」が斑状に混在
9. 10YR5/2　灰褐色粘質シルト（粘性並）に10YR2/3黒褐色粘質シルト（粘性並)がブロック状に混入
10. 「7」に「11」がブロック状に混入
11. 10YR4/2　灰黄褐色極細粒砂



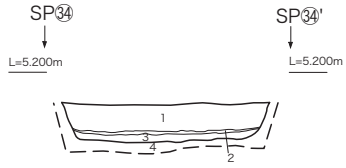
1.2.5Y 5/4　黄褐色粘質土
2.2.5Y 4/4　オリーブ褐色粘質土
3.10YR 6/3　にぶい黄褐色



1.2.5Y 5/4　黄褐色粘質土
2.2.5Y 4/4　オリーブ褐色粘質土（7.5Y 5/6　明褐色シルト）
3.2.5Y 5/4　黄褐色粘質土（7.5YR 5/6　明褐色シルト）
4.7.5YR 5/6　明褐色シルト

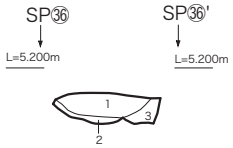


1. 10YR5/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性弱い）
2. 10YR4/2　灰黄褐色粘質シルト（粘性並）
3. 「2」に同じ
4. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや弱い）
5. 10YR2/3　黒褐色粘質シルト（粘性やや強い）
6. 5Y6/2　灰オリーブ色極細粒砂
7. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト
8. 10YR4/1　褐灰色粘質シルト
9. 「7」に同じ
10. 「5」が「14」に混入
11. 「8」に同じ
12. 10YR3/3　暗褐色粘質シルト
13. 10YR3/2　黒褐色砂質シルト
14. 5Y5/2　灰オリーブ色極細粒砂



1. 10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト（マンガン斑、鉄斑混じる）
2. 10YR 4/2　灰黄褐色シルト（鉄分沈着が見られる）
3. 10YR 4/1　褐灰色シルト（鉄分沈着が認められる）
4. 10YR5/3　にぶい黄褐色極細粒砂（鉄分沈着が認められる）

1．2.5Y 4/3　オリーブ褐色シルト質極細粒砂



1.10YR 5/3　にぶい黄褐色シルト
2.10YR 4/3　にぶい黄褐色シルト
3.10YR 3/3　暗褐色シルト

図 39　各遺構など土層断面図４(１：50)

SP 番号は図 34・35 に一致

中世陶器片のほか、加工円盤がまとまって出土している。02 区 SD08 は平面的位置関係より、99 区 SD15 と同一遺構の可能性がある。検出時で、幅 110cm ～ 160cm・深さ 20cm ほどを測り、断面形状は浅い皿形を呈する。一部南西側に幅の広がる部分があるが、浅い段がつくような状態となっている。

2. 東―西 (あるいは南―北) 方向の溝

98 A区 SD01　東―西方向の溝と南―北方向の溝が連結しており、連結部でややクランク状を呈するものである。検出時で幅 100cm・深さ 10cm ほどを測り、断面形状は皿形を呈する。本来は調査区内で南折していた溝に、屈曲点で東西方向の溝をさらに設けた可能性もある。

98 A区 SD04　東西に延びる溝に対し、幾条かの溝が南北気味の方向で接している。東西の溝は、調査区東側で北折するかもしれない。当地点は幾条もの溝が重なり合っている所である。検出時においては、本遺構がそれらのなかで最上位に位置する。幅 250cm・深さ 20cm ほどを測り、断面形状は浅い皿状である。

98 A区 SD21・22・23・24　直交・平行する関係の溝群で、有機的な関係が考えられるものである。SD24・23 では端部が方形状になっている。幅は 100cm ～ 250cm を測る。これらの遺構群との位置関係から、99 区 SK28 と 99 区 SD19 も有機的関係があるかもしれない。

99 区 SK15・02 区 SD06　検出時で、幅 150 ～ 190cm・深さ 10cm ほどを測り、断面形状が浅い皿形を呈するものである。99 区 SD06 とは平面的位置関係より、同種の遺構と考えられ、両者の間には 10m ほどの間隔がある。99 区 SD19 も西端に同様の収束部が見られることなどからも、同様の遺構の可能性がある。

99 区 SD07・02 区 SD05　検出時で、幅 150 ～ 220cm・深さ 50cm ほどを測り、断面形状がU字形ないしは逆台形状を呈するものである。最も深い部分は溝南側であり、溝北側には低い段状のものが存在する。埋土中からは山茶碗を中心とする中世陶器片がまとまって出土している。

3. 土坑など

99 区 SK25　径 170cm ほどの円形を呈する土坑で、深さ 80cm ほどを測る。断面形状はU字形を呈しているが、遺構底面は凹凸が著しい。埋土中からは山茶碗片を中心とする中世陶器片がまとまって出土している。

02 区 SK14　105 × 150cm ほどの長方形を呈する土坑である。深さ 25cm ほどを測り、断面形状は箱形を呈する。埋土は水平堆積をしており、他の土坑・溝の堆積状況とは明らかに異なる。

第４節　戦国期以降の遺構

99 区 SD03・SK04 ～ 14　L 字状に屈曲する遺構で、遺構底面の凹凸が著しいものの、一連の遺構と考えられる。幅 170cm・深さは５～10cm を測る。02 区 SD07 も遺構底面の凹凸が著しく、同様の成因よる遺構と考えられる。

02 区 SD01・SD11　これも L 字状に屈曲する遺構で、幅 60cm・深さ 10cm を測る。

02 区 ST02・03　02 区では、近世以降と考えられる水田の畦畔が一部検出されている。北東―南西方向に大畦畔が走っており、それに直交する方向で小区画が確認されている。大畦畔の一部は途切れており、流水口であったと考えられる。さらに畦畔に伴う土坑も数基検出されている。

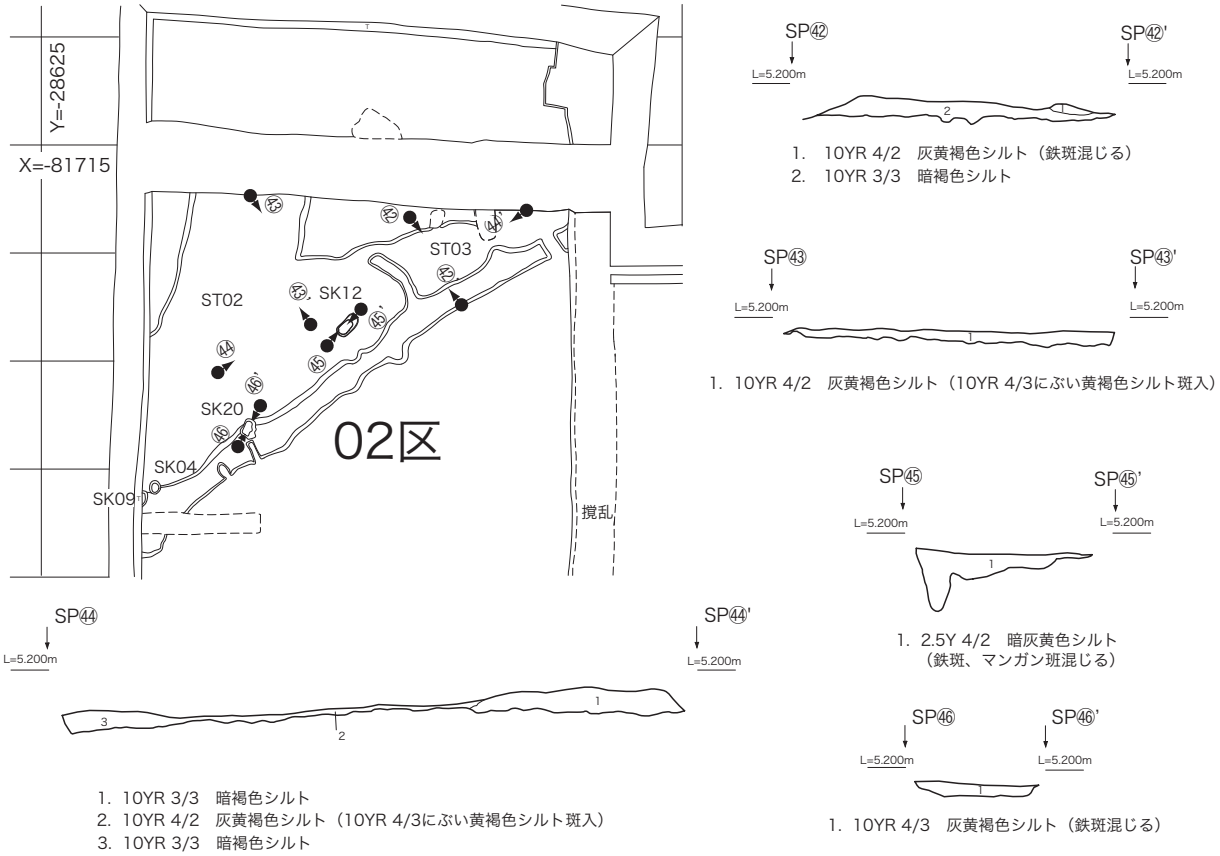


図 40　02 区 ST02・03(平面１：350、土層断面 １：50)

第５節　出土遺物

１. 陶器類

98 A 区 SD03・06 出土遺物 (94・100 ～ 108)　上で報告したように、これらの遺物は遺構掘削および埋土が埋まる時期を示すものではない。94・100・101・108 は須恵器の坏身。102 は須恵器の蓋で、宝珠つまみを有するものである。103 は須恵器鉢。104 は須恵器壺・105 は須恵器横瓶の可能性がある。106・107 は土師器甕で、外面および口縁内面にハケ調整がみられる。いずれも７世紀後半から８世紀前半に属すると考えられる。

98 A 区 SD02・04・05・07 出土遺物 (91 ～ 93・95 ～ 97・98・109 ～ 111)　95・96・98・110 は須恵器坏。98 はロクロによる回転ヘラケズリの底部に高台がつく。110 は高台の付かない坏であり、底部付近の外面には墨書が見られる。109 は須恵器盤。97 は灰釉陶器碗で、口縁部から胴部にかけてツケガケによる釉がみられる。91･92･111 は山茶碗類碗である。高台裏には著しい圧痕は見られない。111 の内面には炭化物付着痕が見られる。

98 B 区 SD10 出土遺物 (112 ～ 116)　112 は灰釉陶器小碗で、113 は同じく深碗である。112 は東濃系と考えられ、大原２号窯式から虎渓山１号窯式に属すると考えられる。114 ～ 116 は山茶碗類碗である。いずれも高台裏には著しい圧痕は見られない。

99 区 SD07・02 区 SD05 出土遺物 (120 ～ 135・165 ～ 170)　120 は須恵器大甕片。121･131 は灰釉陶器碗類で、121 が小碗。外面にはユビ痕が残されている。165 は須恵器長頸瓶である。122 ～ 130・132 ～ 135・166 ～ 170 は山茶碗系碗であり、134・135 は北部系と考えられる。134・135 は貼付けられた高台の裏に籾殻圧痕が著しい。

99 区 SD14 出土遺物 (136 ～ 145)　136 は灰釉陶器小碗である。折戸 53 号窯式から東山 72 号窯式に属するか。137 ～ 145 は山茶碗系碗である。138 は北部系と考えられる。貼付け高台の裏の圧痕が著しいもの (143･144) と、著しくないものとがある。141 は内外面に炭化物付着痕が見られる。

99 区 SD15 出土遺物 (146 ～ 157)　146・147・150・151 は灰釉陶器碗類。146 は直立気味の貼付高台がある。折戸 53 号窯式。150 は美濃系か。151 は底部外面に墨書の跡が存在する。157 は灰釉陶器壺瓶類。156 は土師器甕で、いわゆる清郷型である。148・149・152 ～ 155 は山茶碗系碗である。

99 区 SK25 出土遺物 (158 ～ 164)　いずれも山茶碗系碗で、158 は小碗と考えられる。160 は底部外面に墨書の跡が存在する。161 では底部内面に、164 では内外面に炭化物付着痕がみられる。

02 区 SD08 出土遺物 (172 ～ 177)　172 は須恵器碗で、断面形状が三日月形の貼付高台がみられる。黒笹 90 号窯式。173 ～ 177 は山茶碗系碗である。173・176 は底部外面に炭化物痕が見られる。

その他出土遺物

須恵器・灰釉陶器 (179 ～ 189・191・192)　ロクロ回転による調整が行われており、底部は回転によるヘラケズリ調整が行われてい

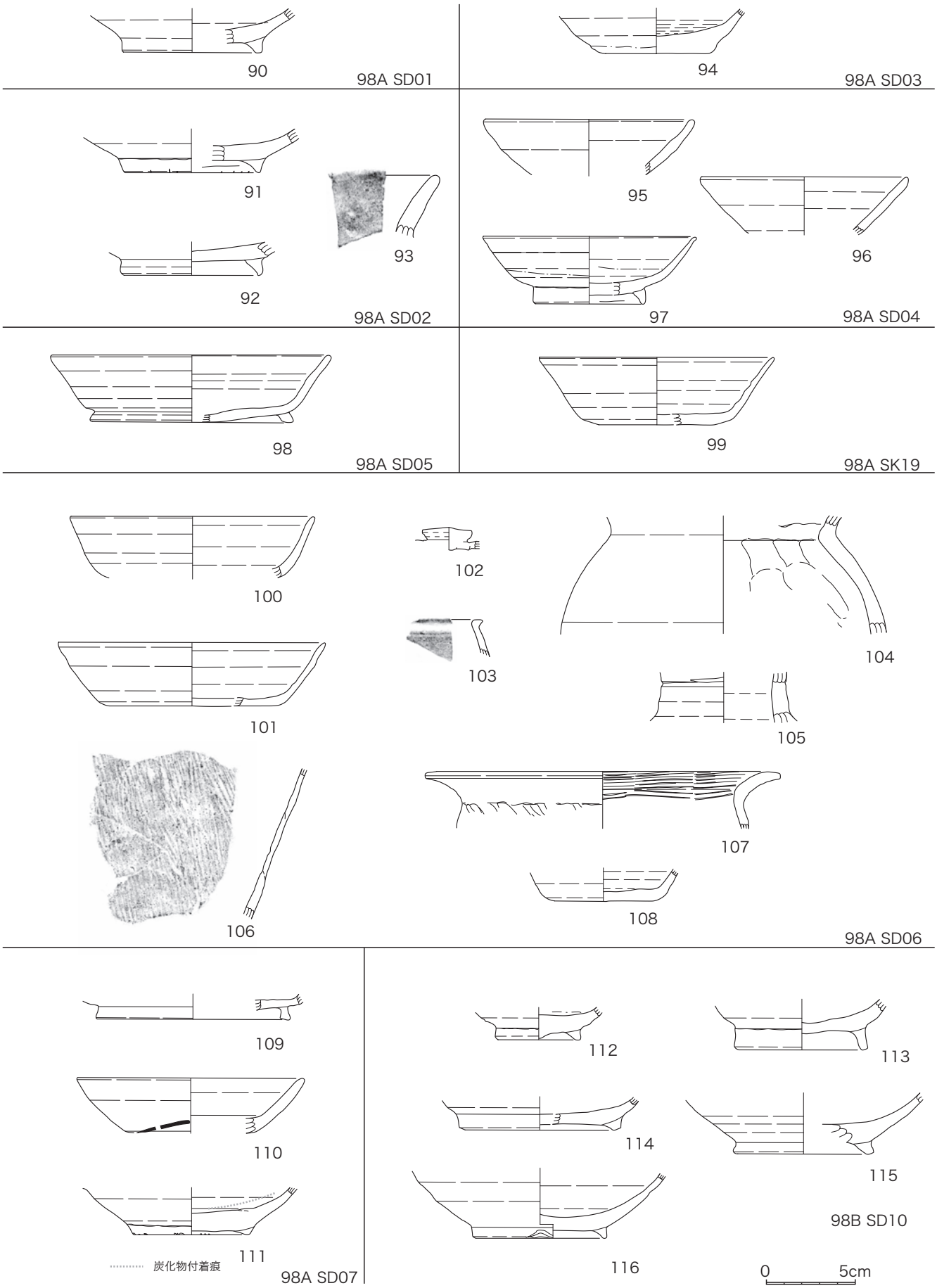


図41　古代以降出土遺物1　（1：3）

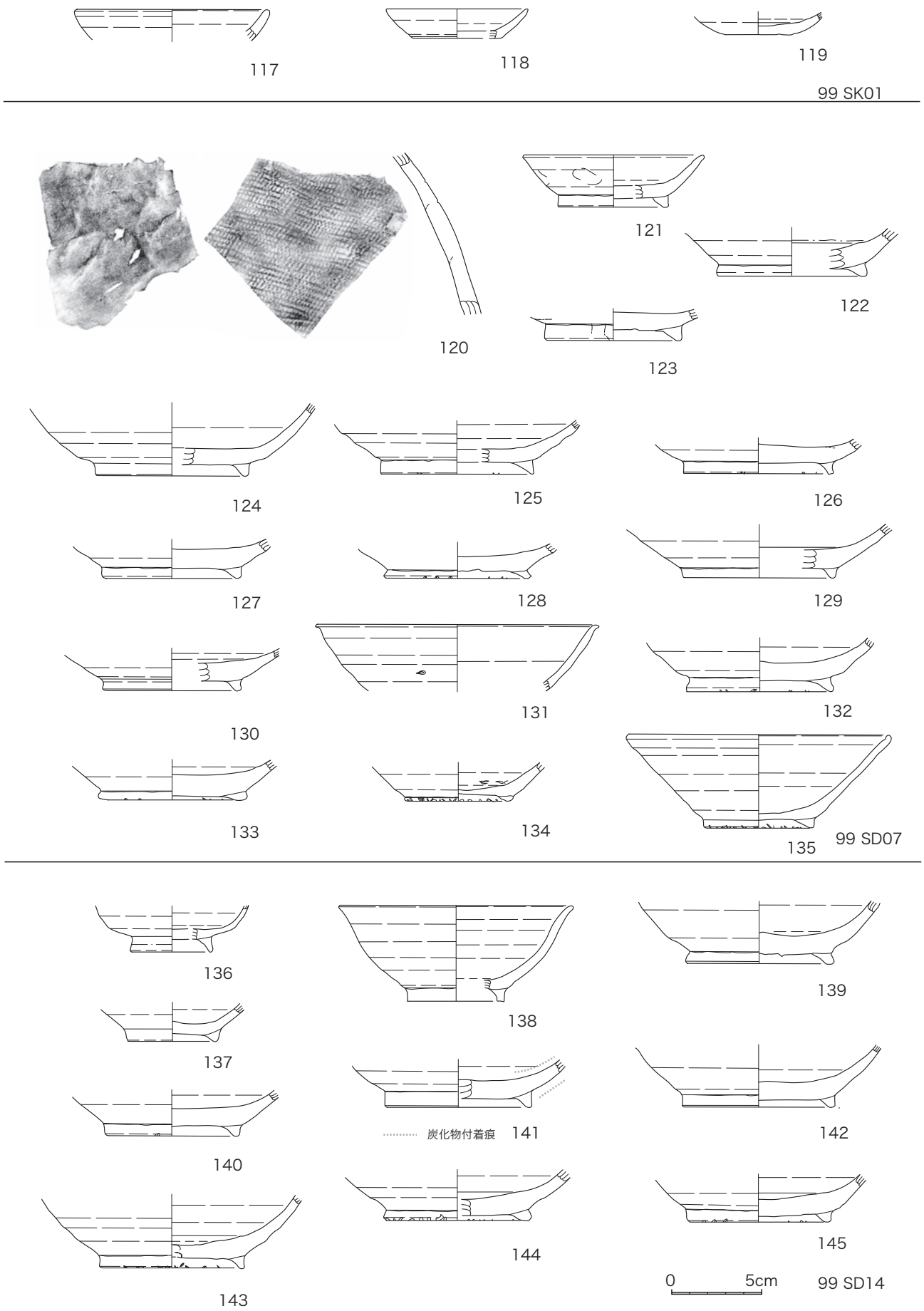


図 42　古代以降出土遺物２　（１：３）

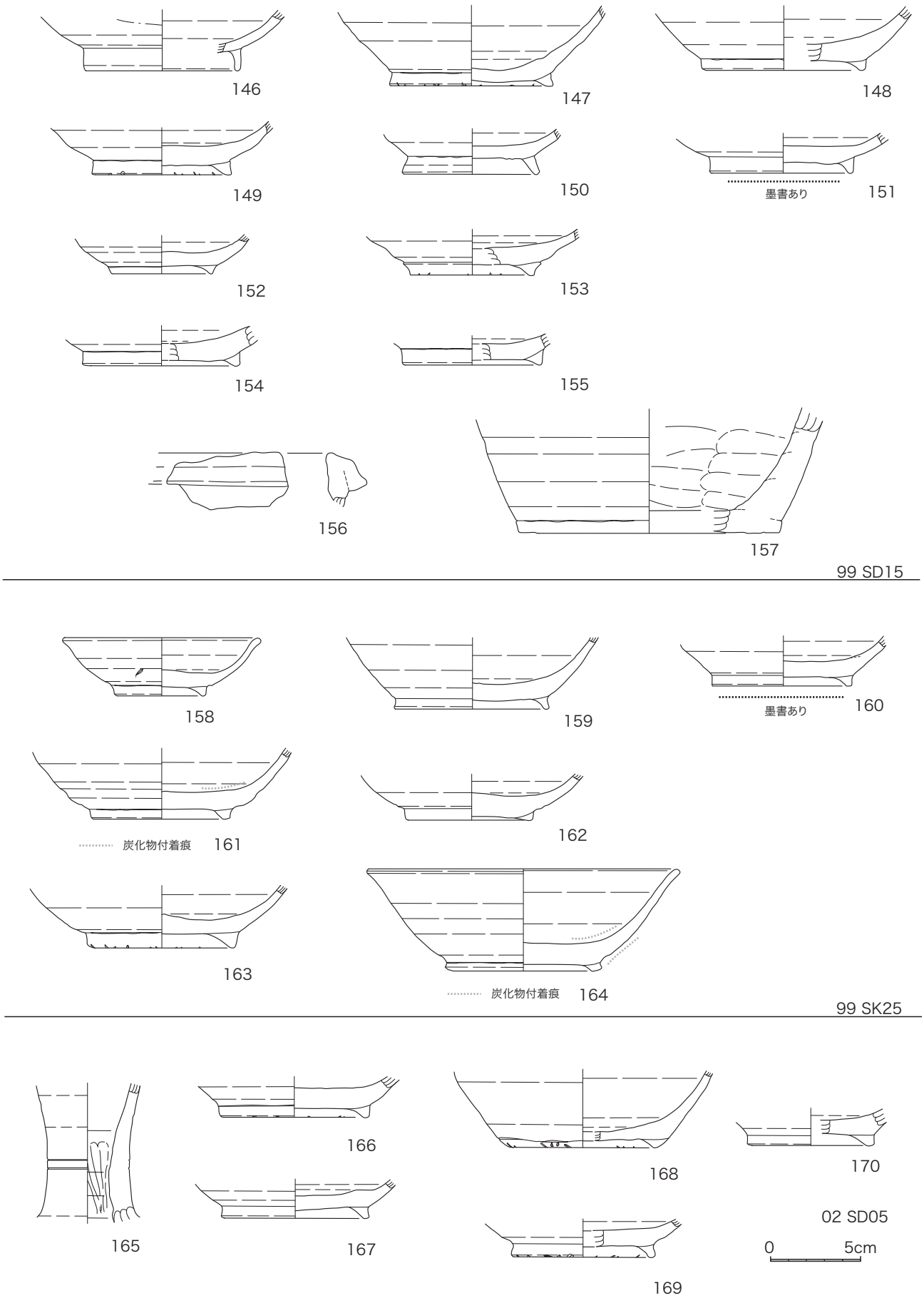


図 43　古代以降出土遺物３　（１：３）

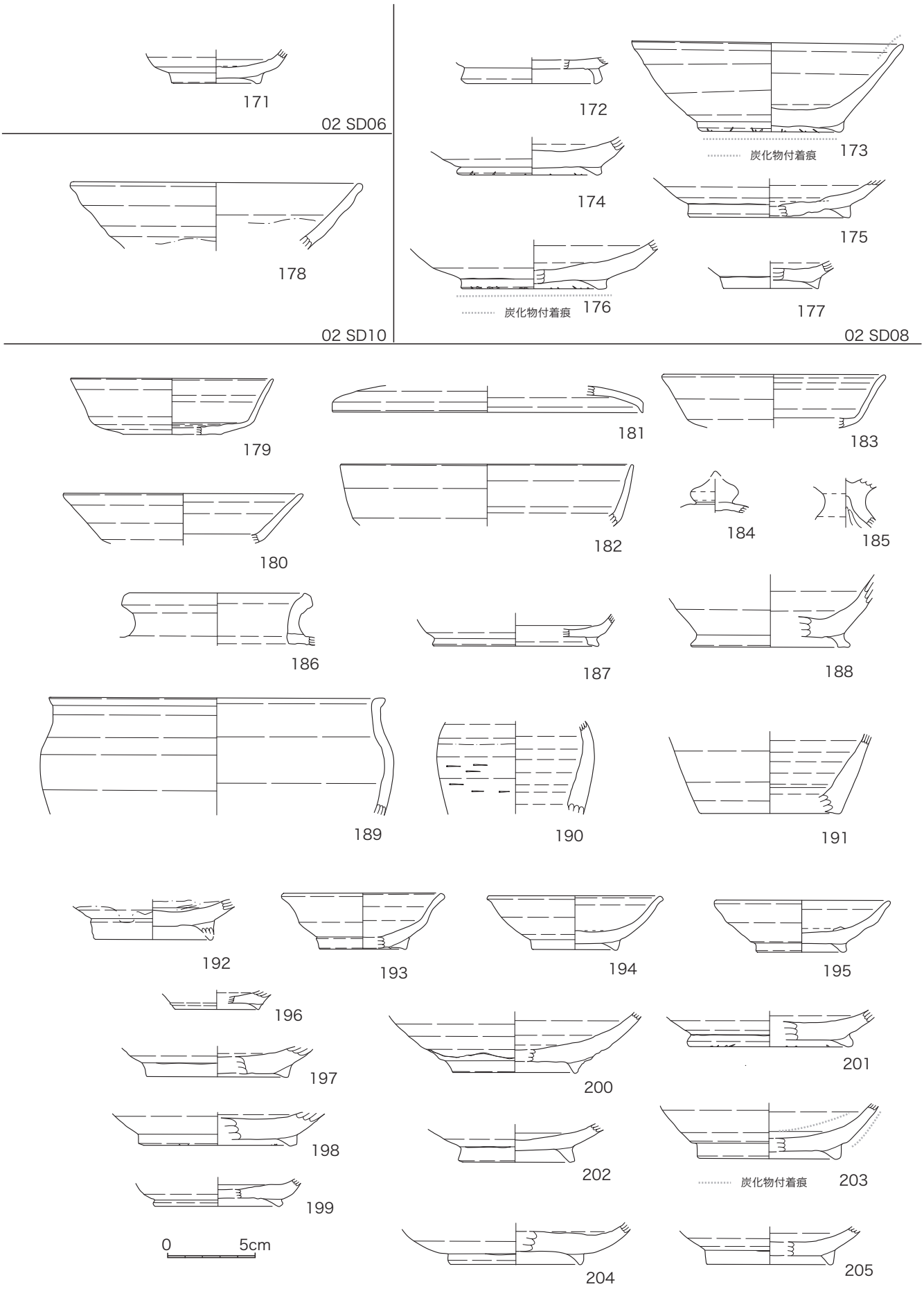


図 44　古代以降出土遺物４　（１：３）

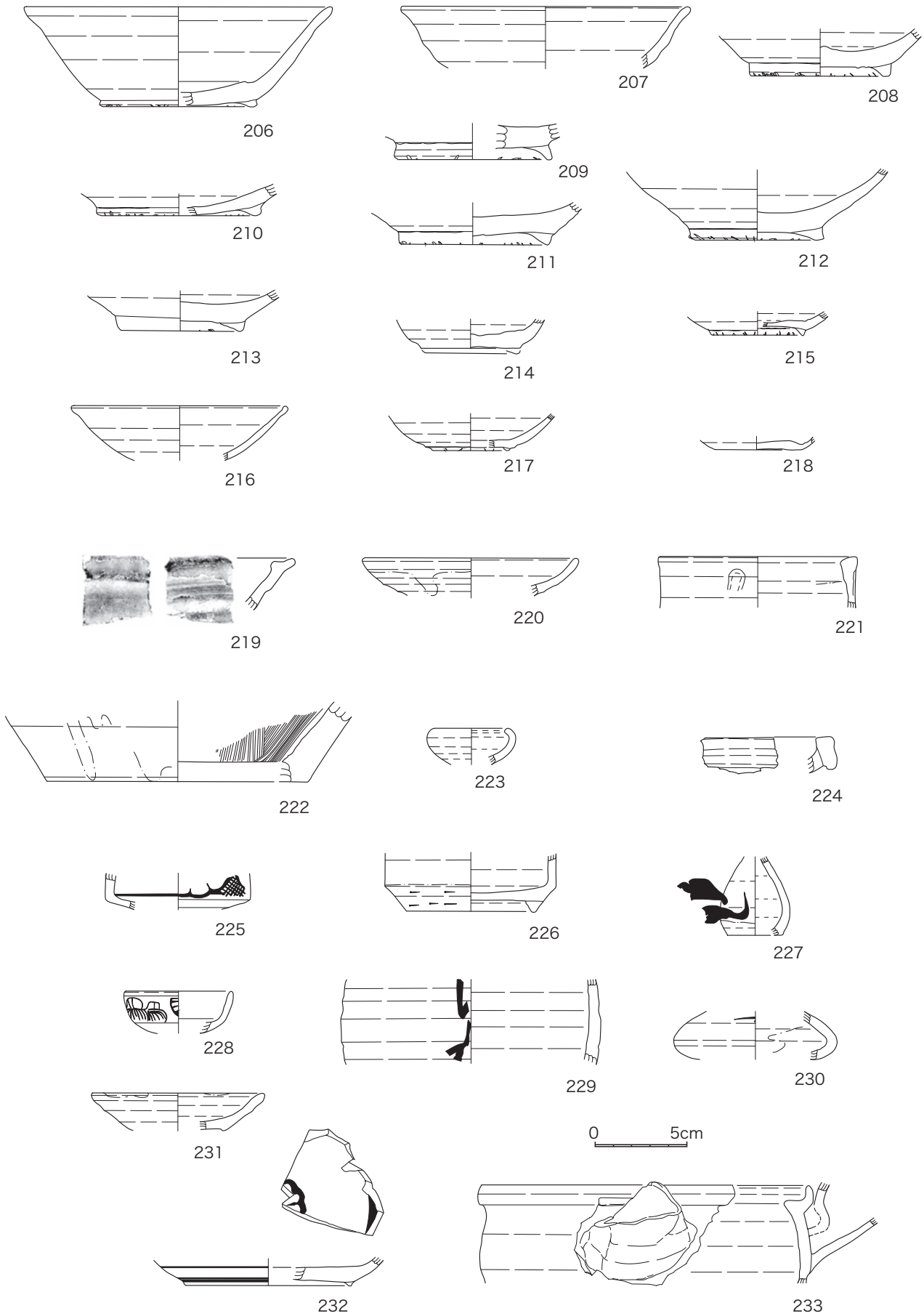


図 45　古代以降出土遺物５　（１：３）

る。179 は須恵器坏身でⅠ -41 号窯式。180・182・183 も須恵器坏身で 8 世紀代のもの。187 も須恵器坏身で折戸 10 号窯式である。181 は須恵器坏蓋でC -2 窯式。184 も須恵器坏蓋で、宝珠つまみを呈する。8 世紀前半期のもの。185 は須恵器高坏で、7 世紀後半のもの。186 は須恵器横瓶の口縁・頸部と考えられるもので、7 世紀代のもの。188 は須恵器長頸瓶で 8 世紀後半。189 は須恵器鉢で鳴海 32 号窯式のものである。191 は須恵器壺瓶類で、8 世紀代のもの。192 は灰釉陶器碗で、内外面に釉のツケガケがみられる。

青磁 (117)　碗類の口縁部のみが 1 点出土している。

土師器皿 (118・119)　胴部の調整はロクロ回転によるもので、底部に糸切痕が残されている。12 世紀代のものか。

山茶碗系 (193 ～ 218)　193 ～ 196 は小碗、口径 10cm・器高 3 cm ほどの法量を有し、底部裏面は糸切痕の上に高台の貼付けが行われている。197 ～ 214 は碗である。高台裏に圧痕が見られないものが多い中で、208・210 ～ 212 では籾殻圧痕が見られる。215 ～ 218 は北部系で、215 ～ 217 は碗、218 は小皿である。

古瀬戸系 (178・219)　178 は平碗、219 は折縁深皿である。

戦国期から近世陶器 (190・220 ～ 233)　190 は志野の壺瓶類と考えられる。

2. 土製品・陶器転用品 (図 46・47)

管状土錘 (301)　細長い形状をなすもので、表面にはナデ調整時の稜線がやや見られる。7.4 × 2.9 × 2.8cm の法量を有し、孔は径 1.0cm を測る。

陶器転用品　調整および使用痕の様相によって、以下の 3 群に分けられる。

陶器転用品 a(302 ～ 321)　陶器片周囲を敲打調整しているもので、製作痕としての研磨や使用痕などが認められないものである。平面形態はやや不定形気味ではあるが、断面形状などを勘案すると、扁平よりはむしろブロック状になっているのが特徴である。使用されている陶器片は山茶碗片であり、特に底部の使用が目立つ。調整は 316 など一部の例を除き、片側からの連続した敲打によって調整が施されているものが目立つ。

陶器転用品 b(322 ～ 333)　陶器片周囲を敲打調整しているもので、製作痕としての研磨や使用痕などは認められないものが多いなかで、323・332 は縁辺に研磨痕が見られ、特に 332 では、敲打の稜線が失われている。平面形態・断面形状などを勘案すると、扁平な円板状を意図したものと考えられる。陶器片は戦国期～近世の碗類・擂鉢などの胴部片を使用している。

陶器転用品 c(334 ～ 336)　戦国期～近世の擂鉢片を利用しているものである。胴部片使用しているもの (334) と、底部付近の胴部片を利用しているもの (335・336) がある。縁辺は敲打による調整が行われている。334 には、縁辺および陶器外面側に、336 には縁辺に使用痕がみられる。

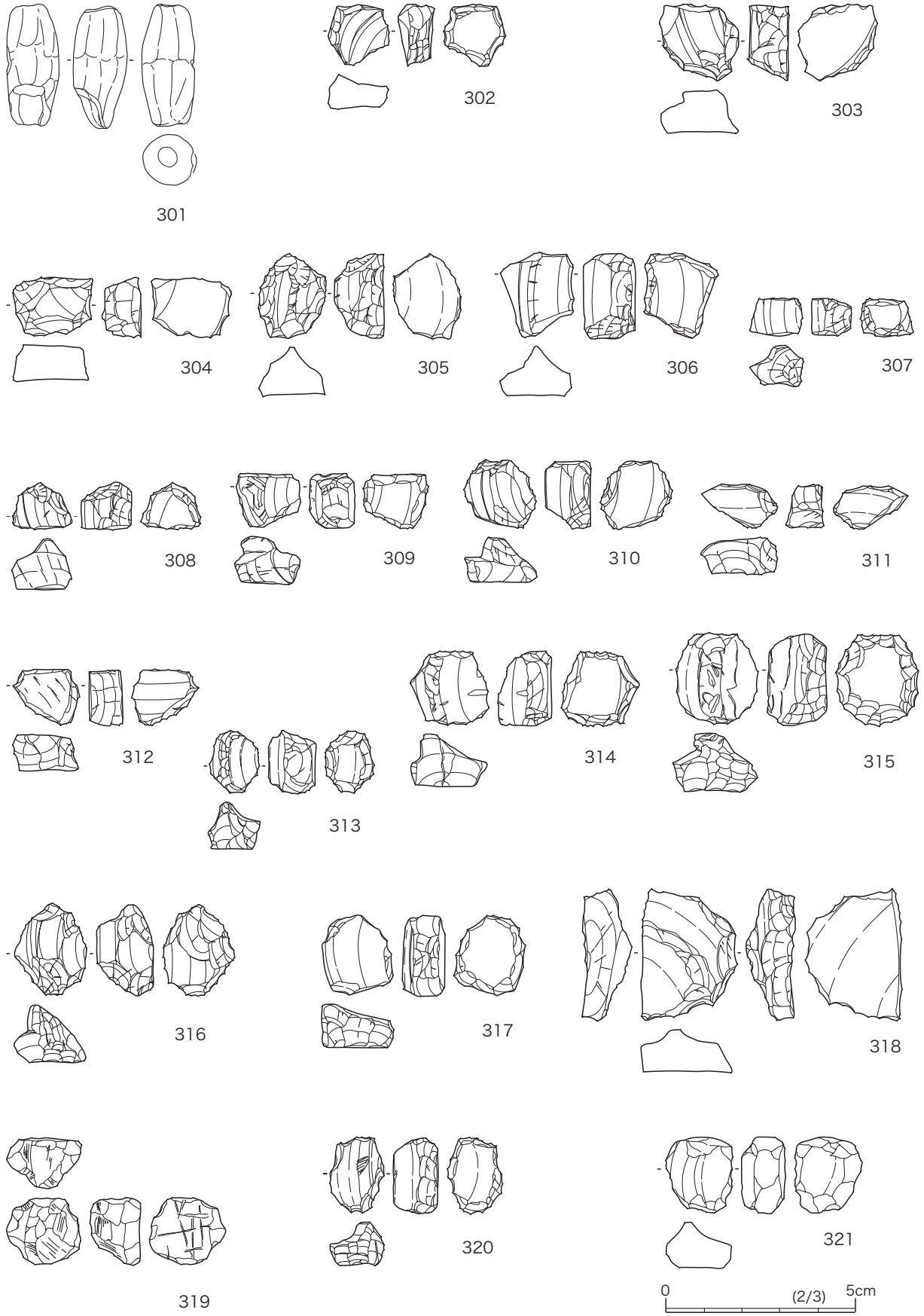


図46　古代以降出土遺物6　（1：2）

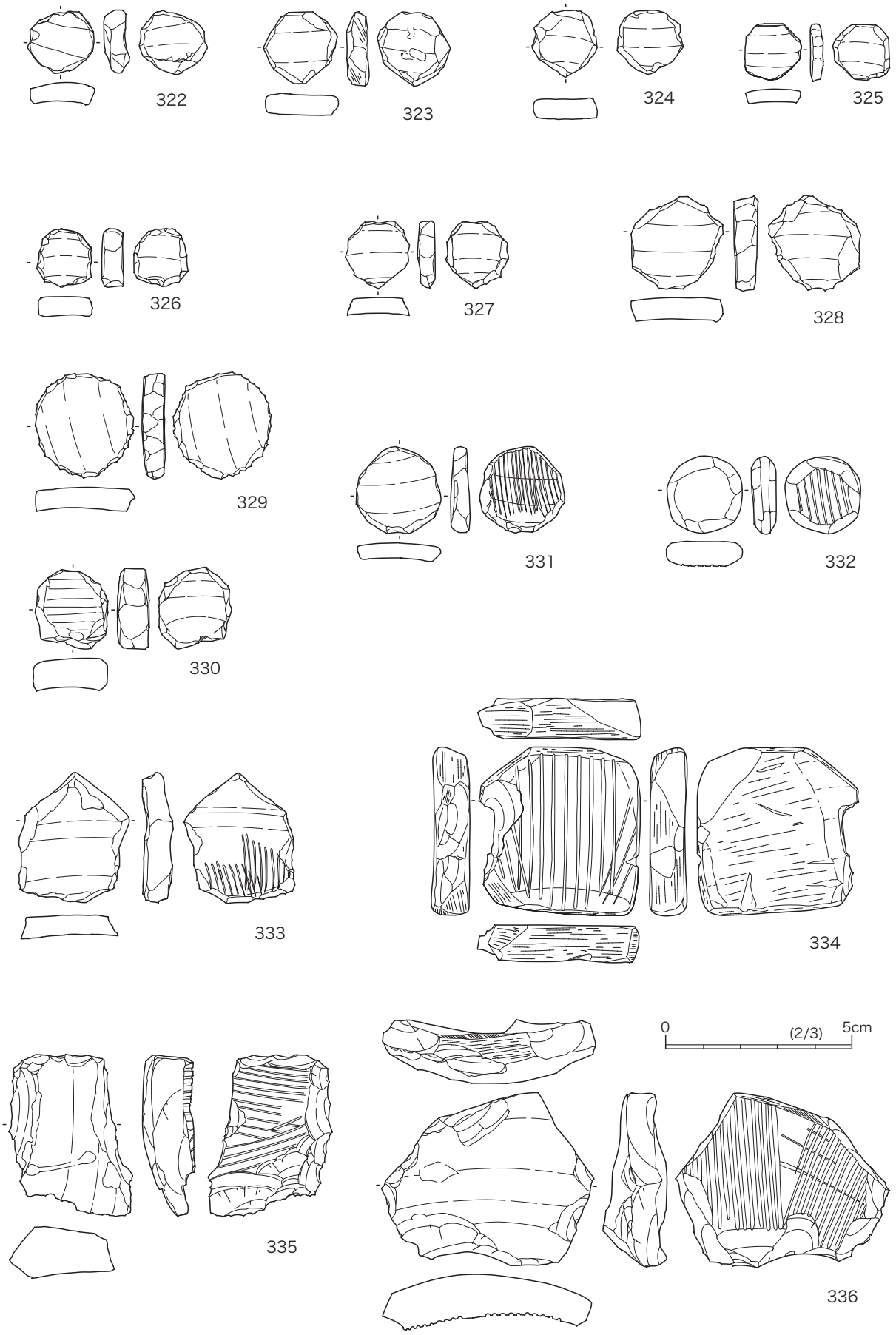


図47　古代以降出土遺物7　（1：2）

3. 石器類 (図 48)

火打石 ?(518)　縁辺部に不連続な剥離が認められるものである。チャート製。

砥石 (519・520)　519 は敲打調整によって扁平な板状にしたものである。平面および側面には各方向に使用痕が残されている。520 は剥落した細片かもしれない。長軸方向に使用痕が見られる。

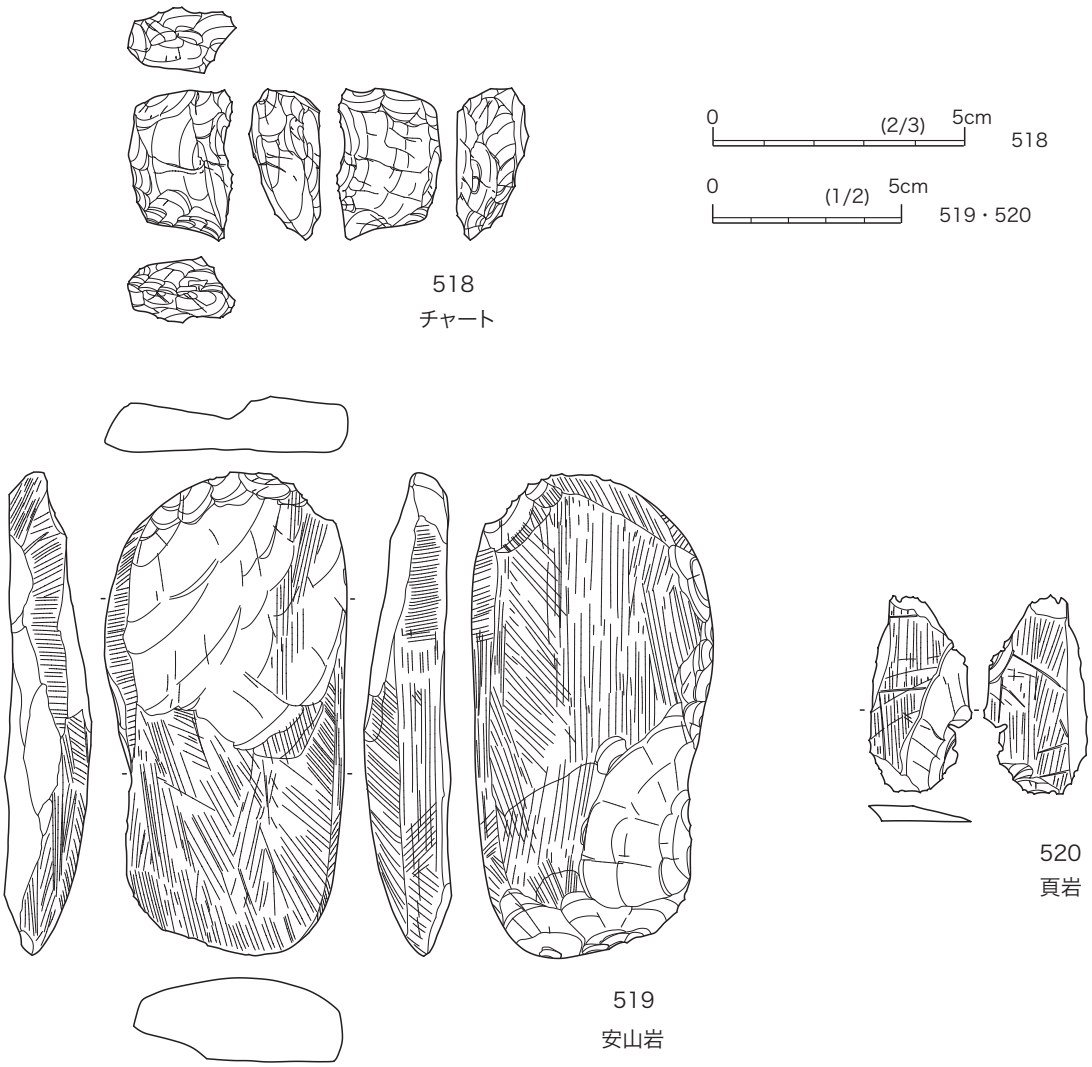


図 48　古代以降出土遺物８　(518 は３：２、519・520 は１：２)

第５章　自然科学的分析

第１節　堆積環境

鬼頭　剛（愛知県埋蔵文化財センター）・古澤　明（有限会社　古澤地質調査事務所）

１　はじめに

濃尾平野北部、一宮市丹陽町の伝法寺野田遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、テフラ分析、放射性炭素年代測定および表層地形解析から新たな知見が得られたので報告する。

２　試料および分析方法

伝法寺野田遺跡の地下層序解析のため、調査区全体において地表面や遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった。層序断面図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からはテフラ分析や放射性炭素年代測定用試料を採取した。層序断面図および試料の採取は鬼頭が行なった。

テフラ分析の試料は洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ（1/8 ～ 1/16）に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の 200 粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため、1000 粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置 MAIOT(古澤 ,1995) を使用した。測定精度は火山ガラスで± 0.0001、斜方輝石および角閃石で± 0.0002 程度である。分析は古澤が行なった。

放射性炭素年代測定はガス比例計数管（GPC）法と加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。ガス比例計数管法の試料はアルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管に入れ、真空ポンプで引きながら 800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。測定はラドン崩壊のために約 1 ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量 400cc のガス比例計数管に充填し、β - 線を計数して 14C 濃度を算出した。14C 濃度について同位体分別効果の補正後、補正した 14C 濃度を用いて 14C 年代を算出した。14C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。ガス比例計数管法の測定はパリノ・サーヴェイ株式会社を通じて学習院大学放射性炭素年代測定室（Code No.: Gak）に依頼した。加速器質量分析法は 125 μ m の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された 14C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した 14C 濃度を用いて 14C 年代を算出した。14C 年代値の算出には、14C の半減期として Libby の半減期 5,568 年を使用した。14C 年代の暦年代への較

正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成には愛知県一宮市発行の「尾張西部（一宮）都市計画図(1/2500)」、岩倉市発行の「尾張北部（岩倉市）都市計画図(1/2500)」、西春日井郡西春町発行の「都市計画図(1/2500)」、西春日井郡春日町の「都市計画図(1/2500)」にプロットされた標高値を用いた。等高線図の作成および解析は鬼頭が行なった。

3　分析結果

3-1 伝法寺野田遺跡の深掘層序

伝法寺野田遺跡の調査区全体では7地点で深掘層序断面を得ているが、それらのうち主要な3地点（図49）について各地点ごとに述べる。

調査区北端の地点1（02区）では深度約1mの深掘断面を得た（図49）。下位層より、標高4.00～4.53mまでは灰白色の中粒砂層である。基質に若干のシルト成分を含む。淘汰は比較的良好である。標高4.53～4.82mは黄灰色を呈するシルト質粘土層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高4.82～4.92mは灰色の粘土質シルト層である。本層も塊状・均質で、堆積構造はみられない。標高4.92～5.08mは黒褐色のシルト質粘土層である。なお、標高4.92～5.08mの黒褐色シルト質粘土層の頂部（標高5.08m）が遺構検出面にあたる。

地点2（02区）では調査区南端の西壁面で層序断面を確認した。下位層より、標高4.00～4.65mは灰色～灰褐色のシルト層からなる。堆積構造はみられなかった。標高4.65～5.27mは黒褐色～灰褐色の粘土層である。堆積構造はみられない。なお、標高4.65～5.27mの粘土層において、標高4.65～4.94mは黒褐色を呈し、標高4.94～5.27mは褐色～灰褐色であった。標高4.78～4.94mからは弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片が、標高4.94～5.15mからは中世のものが、標高5.15～5.27mからは近世の土器片が出土している。

地点3（98A区）ではバックホーにより遺構面のさらに下位を掘削した。下位層より、標高2.83～3.80mは灰色のシルト質砂層からなる。基質はシルトで、砂層にはトラフ状斜層理が観察される。標高3.80～4.08mは灰色シルト層である。堆積構造はみられない。標高4.08～4.19mは赤褐色粘土層である。堆積構造はみられない。標高4.19～4.45mは褐色～褐灰色粘土層である。標高4.45～4.83mは黄灰色のシルト層ないしシルト質ないしシルト質砂層からなる。なお、標高4.08～4.37mからは弥生時代中期頃、標高4.45～4.76mには古墳時代、標高4.76～4.83mは近世の遺物が出土している。

3-2 テフラ分析

地点1(02区)で確認された4層準において下位より各層準につき1試料の、試料1（標高4.36m）、試料2（標高4.68m）、試料3（標高4.86m）、試料4（標高5.01m）の計4試料を採取した。4試料からは明確にテフラの識別できる層準はみられなかった。しかし、いずれの試料にも微量の火山ガラスが含まれ、ガラスの含有量は試料1から試料4へ、すなわち下位層から上位層へ増加する傾向がみられる（図50）。

試料は火山ガラスの屈折率の特徴から下部（試料1・2）と上部（試料3・4）とに分けられる。

下部（試料1･2）はバブルウォール･タイプ（Bw）で屈折率が1.499-1.501の火山ガラスを含む。このほか、発泡のみられない火山岩片の様なガラス（屈折率1.449-1.499）も含まれる。上部にはパミスタイプおよび低発泡の火山ガラスが含まれる。これらのガラスの屈折率は1.497～1.505を示す。

3-3 放射性炭素年代測定

地点1（02区）で1試料、地点2（02区）で3試料、地点3（98A区）で5試料の放射性炭素年代値を得た（表3・表4・表5）。地点1の最下位層である中粒砂層（標高4.00～4.53m）の標高4.00mから採取した炭質物は11335, 11315, 11300 cal yrs BP(BC 9390,9365,9355)(PLD-1672)と、今回の全試料中でもっとも古い年代値を示した（表2）。地点2の標高4.00～4.65mの灰褐色シルト層上部の標高4.60mから採取した有機質土壌は4515, 4470, 4445 cal yrs BP(BC 2565,2520,2500)(PLD-1669)を（表4）、地点3の標高3.80～4.08mの灰色シルト層の下部、標高3.83mの有機質土壌で4850 cal yrs BP(BC 2900)(PLD-20204)、灰色シルト層の上部にあたる、標高4.07mの有機質土壌は3635 cal yrs BP(BC 1685)(PLD-20203)を示し（表5）、およそ4800年前～3600年前代の年代値を示した。また、考古学的に水田跡と考えられる標高4.08～4.19mの赤褐色粘土層では標高4.10mから採取した有機質土壌で3830, 3875, 3780 cal yrs BP(BC 1880,1835,1830)(Gak-20202)、標高4.19mから採取した有機質土壌で3360 cal yrs BP(BC 1410)(Gak-20201)と約3800～3400年前代であった（表5）。地点3（98A区）の標高4.19～4.45mの褐色～褐灰色粘土層の標高4.30mから採取した有機質土壌は1880 cal yrs BP(AD 70)(Gak-20205)と全試料中でもっとも新しい年代値を示した。

3-4伝法寺野田遺跡周辺の等高線図

東西約2.9km、南北約2.1kmの範囲の等高線図全体では標高5.0mから標高7.6mまでの等高線が描かれ、北および北東方向で相対的に高く、西および南側で低い傾向がある（図51）。本地域の等高線を概観すると、地形の尾根状あるいは谷状を呈する部分が入り組み、かつ閉曲線として孤立丘状ないしは凹地状の部分がみられ、たいへん複雑な地形の様相を呈している。

図の中央部分を東から西へ流下する五条川を中心にさらに地形要素を詳しくみてみると、西春日井郡西春町の徳重付近には標高6.2～6.8mで東から西方向へ傾斜する谷地形が確認される。そこよりさらに南側0.5kmの西春日井郡西春町の法成寺の北側にも、標高5.6mから標高6.8mにおいて東から西方向へ傾斜する谷地形がみられる。また、調査範囲の南側に位置する西春日井郡西春町の宇福寺、同町の山之腰、同町丸瀬町に囲まれる標高5.4～6.0mの範囲にも北から南方向へ傾斜する谷地形がみられる。岩倉市川井町の標高6.0～6.4m、一宮市丹陽町の伝法寺付近の標高6.0～6.6m、一宮市丹陽町の九日市場北方の標高5.8mには閉曲線で囲まれる凹地状の地形が現われる。

いっぽう、相対的に高いところでは、岩倉市野寄町の北方から岩倉市川井町の東側を経て、西春町の徳重の東側にいたる標高7.0～7.6mに尾根状の部分がみられる。岩倉市北島町の北西および北側にも標高7.0～7.6mの高い部分がみられる。また、川井町と伝法寺との間に挟まれる範囲

には標高 6.6 ～ 7.0m までに舌状地形が、伝法寺の南側にあたる標高 6.6 ～ 7.0m にも閉曲線状をなして北西 - 南東方向にのびるもの、宇福寺の西側にも標高 6.8 ～ 7.6m に孤立丘状を呈する相対的に高い場所がみられる。これらのうち、伝法寺野田遺跡のある調査地点は川井町と伝法寺との間に挟まれる、現在の五条川から北側に広がる標高 6.6 ～ 7.0m の舌状地形の西端部に位置しているのがわかる（図 51）。

4　考察

4-１堆積層序から推定される伝法寺野田遺跡調査地点の古環境

伝法寺野田遺跡の地下層序では標高およそ 4.5m よりも低いところに、北側の地点 1（02 区）で中粒砂層が、南側の地点 3（98A 区）ではシルト質砂層が認められ、砂成分が卓越した。これらの地層には下底面が船状の形をしたトラフ状斜層理がみられた。トラフ状斜層理は河川の流路といった一方向流が流路の底につくる砂堆（デューン）の移動とその累積により形成されるものである。砂堆の形態には二次元的なものと三次元的なものとに分けられる。先に述べたトラフ状斜層理は三次元的なものにあたる（ハームズほか，1975）。一般に三次元的な砂堆は、より大きな流速のもとで形成される（コステロ＆サウザード，1981）。これらの砂層の形成時期に関して、地点 1 の標高 4.00 ～ 4.53m でみられた中粒砂層からはテフラ鉱物が検出できなかったものの、それよりも上位の地層からは火山ガラスが微量ながら検出された。試料 2 に含まれる火山ガラスはバブルウォールタイプであることと、屈折率が 1.499-1.501 に集中することから姶良 Tn（AT）テフラと考えられる。なお、無発泡ガラスの起源は不明である。試料 4 に含まれる火山ガラスはパミスタイプないしは低発泡であり、屈折率が 1.497-1.505 程度であることから伊豆カワゴ平 (Kg) テフラに類似している。これらのガラスの産出する層準の下位層に姶良 Tn（AT）テフラと考えられるガラスが産出すること、および上部（試料 3・4）からは鬼界アカホヤ（K-Ah）テフラ起源の火山ガラスが微量ながら産出することから、試料 4 には伊豆カワゴ平 (Kg) テフラが混在していると考えられる。姶良 Tn(AT) テフラの噴出年代は約 3 万年前の、伊豆カワゴ平 (Kg) テフラは愛知県では松河戸 (MT) テフラに対比されており、約 3000 年前のテフラ層であることから、テフラ分析の結果から地点 1 の堆積物はその間の堆積記録をもつものと推定される。いっぽうで、砂層の最下部（標高 4.00m）から採取した炭質物は 11335, 11315, 11300 cal yrs BP(PLD-1672) の数値年代を示した。放射性炭素年代試料は姶良 Tn(AT) テフラが検出された層準よりも下位にあり、年代値の逆転が生じている。砂層はその上位でみられるシルト層や粘土層に比べて水理学的なエネルギーが大きく、上流域の堆積物を削剥し運搬する可能性も高い。堆積物の層相や標高値を考慮すると、姶良 Tn(AT) テフラが示す年代値は明らかに古すぎるものと考えられる。検出された姶良 Tn(AT) テフラは二次堆積物であると判断できる。いずれにせよ、地点 1 の堆積物は完新統の年代を示している。

いっぽう、地点 3 の最下位層として標高 2.83 ～ 3.80m にシルト質砂層がみられた。本層を覆う標高 3.80 ～ 4.08m の灰色シルト層の標高

3.83m から採取した有機質土壌は 4850 cal yrs BP(BC 2900)(Gak-20204) を示したことから、下位でみられる砂層は少なくともそれよりも前に堆積が完了していたことがわかる。これらのことから、調査地点では約 5000 年前前後までは砂堆とよばれる舌状の高まりが河道中に配置し、その高まりと高まりとの間にできた低いところをぬうように、低水時の流水が網状に流れる網状河川の流路内であったことがわかる。

下位でみられた砂層と比較して上位にはシルトや粘土の細粒な粒子を主体とし、それらが上方へ累積した。堆積物は塊状かつ均質であり、堆積構造はみられなかった。植物の根跡などがみられることから生物撹乱を被った地層である。特に地点 3 の標高 4.08 ～ 4.19m でみられた粘土層は塊状で固結度も高く、全体が酸化されて赤褐色を呈した。考古学的には本層と本層の上部で水田耕作が推定され、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出されており、考古学的な所見と調和的である。なお、本層下部の標高 4.10m から採取した有機質土壌は 3830, 3875, 3780 cal yrs BP(BC 1880,1835,1830)(Gak-20202)、本層上部の標高 4.19m から採取した有機質土壌は 3360 cal yrs BP(BC 1410)(Gak-20201)、また、本層直下の紫灰色粘土層の最上部標高 4.07m から採取した有機質土壌で 3635 cal yrs BP(BC 1685)(Gak-20203) の数値年代を示した。これらのことから、少なくとも約 3000 年前代には粘土層形成されていた。なお、調査区からはこの約 3000 年前代に相当する考古遺物は検出されていない。この事実から、地層形成後と人為的な活動が行なわれる間には時間間隙が存在することがわかる。また、本層が生物撹乱を受けていることから、堆積後には離水環境が卓越し、洪水により上方へ堆積物を累積させるとともに、一時的な堆積の休止をくり返す自然堤防であったと推定される。以上のことから、調査地点の堆積環境は網状河川→自然堤防へと変化したことがわかる。

4-２伝法寺野田遺跡周辺地域の古環境

伝法寺野田遺跡の周辺には権現山遺跡、三ツ井遺跡、猫島遺跡があり、これらの調査においても今回と同様に深掘層序解析を行なっている。伝法寺野田遺跡から約 0.3km 北東の岩倉市北島町・野寄町の権現山遺跡では、標高 2.0 ～ 5.8m に淘汰良好な厚い中粒砂～粗粒砂層が認められ、そこでは明瞭なトラフ状斜層理が観察された。この砂層の標高 2.4m から採取された木片 2 点は 4780 ± 80 yrs BP(Gak-19911)、4630 ± 70 yrs BP(Gak-19912) であった（鬼頭・上田 , 2003)。しかし、これらの年代値はガス比例計数管（GPC）法により測定された値であり、δ 13 の値が算出されておらず、今回の伝法寺野田遺跡で得られた加速器質量分析（AMS）法の値とを単純に比較することはできない。そこで、δ 13C が算出されていない値について、δ 13C の値が -25‰に規格化されたものと仮定して、暦年代較正プログラム CALIB4.3 により 14C 年代値を暦年代に較正した。すると、5580, 5505, 5490 cal yrs BP(BC 3630, 3560, 3540)(Gak-19911) および 5435, 5425, 5320 cal yrs BP(BC 3485, 3475, 3370)(Gak-19912) となり、およそ 5500 年前前後の値を示した。権現山遺跡の最下層の砂層は約 5500 年前以降に堆積したと推定される。

今回の伝法寺野田遺跡でも最下位層にはトラフ状斜層理の発達する砂層が確認された。この砂層を覆う粘土層の標高 3.83m から採取した有機質粘土層は 4850 cal yrs BP(BC 2900)(Gak-20204) を示した。このことから、伝

法寺野田遺跡における砂層の堆積は、少なくとも4900年前頃には終了していたことがわかり、先に示した権現山遺跡の結果とほぼ同じ値を取り、調和的である。

また、現在の地形解析の結果と比べてみると、伝法寺野田遺跡の調査地点の南側約0.2kmにおいて、現在の五条川がそれまで西流していたところから、調査地点近傍にて南西方向へのゆるい屈曲を示し、その屈曲部から北ないし北西方向へ舌状地形が確認された。先に述べた権現山遺跡そして伝法寺野田遺跡はちょうど舌状地形の上に位置するのである。約5500～5000年前には調査地点を活動的流路が存在していたと指摘できる。また、その流路は徐々に、あるいは突発的に変化したと予想される。岩倉市川井町には舌状地形の東側に標高6.0～6.4mの凹地が確認できる。現在の地形面に現われるほど浅いため、現在に近い一時期に、調査地点の東側に流路が存在した可能性があろう。

伝法寺野田遺跡より約1.5km北の三ツ井遺跡でも最下位層には砂層が認められ、砂層より採取された標高5.0m付近の木片は14C年代値で3410±70 yrs BP(Beta-105388)、補正14C年代値で3360±70 yrs BPを得た（鬼頭ほか，1999）。この値はδ13Cの値が-28.0‰が得られているので暦年代補正を施せる。従って、CALIB4.3により補正すると3630, 3620, 3610, 3600, 3590 cal yrs BP(Beta-105388)となる。砂層を覆う黒色粘土層の値が補正14C年代で2560±50 yrs BP(Beta-105387)で、暦年代補正を施すと2740 cal yrs BPとなった。

伝法寺野田遺跡から約1.8km北東の猫島遺跡の最下位層は粗粒な堆積物と細粒なものとに大きく二分でき、粗粒堆積相では最下位の中礫層とそれを覆う極粗粒～粗粒砂が確認された。礫層を覆う砂層の下部からは数値年代が得られており、極粗粒砂層中の標高7.10mより採取された木片が4225, 4205, 4175, 4170, 4155 cal yrs BP(PLD-929)を、シルト質細粒砂層の標高5.84mから得た木片が4075, 4030, 3990 cal yrs BP(PLD-930)の年代値であった（鬼頭ほか，2003）。伝法寺野田遺跡、権現山遺跡、三ツ井遺跡、猫島遺跡では最下位層には淘汰良好なトラフ状斜層理が発達した砂層が共通して認められるものの、伝法寺野田遺跡および権現山遺跡ではおおよそ5000年前までに砂層の堆積が完了しているのに対し、三ツ井遺跡と猫島遺跡では約4000年前前後の年代値を示すことから、同じ層相にも関わらず、およそ2km隔たった地点において約1000年間の時間間隙が存在することがわかり、三ツ井遺跡や猫島遺跡よりも約1000年はやく、当地に活動的流路が流下し、かつ地形の凹凸と露出した離水環境を出現させていたことがわかった。

謝辞

本論を作成するにあたり、愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の川添和暁氏・早野浩二氏には伝法寺野田遺跡および周辺遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた。図面の整理では愛知県埋蔵文化財センター元研究補助員の尾崎和美氏にお世話になった。名古屋工業大学大学院生（調査当時）の服部陽介氏には分析試料の採取をお手伝いいただいた。試料の整理・保管と図面作成では元整理補助員の服部恵子氏・田中和子氏・宇佐見美幸氏・山口きみ代氏、整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

Costello, W. R. and Southard, J. B., 1981, Flume experiments on lower-flow-regime bedforms in coarse sand, J. Sed. Petrol., 51, 849-864.

古澤　明 , 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析 , 地質学雑誌 , 101, 123-133.

Harms, J. C., Southard, J. B., Spearing, D. R. and Walker, R. G., 1975, Depositional Environments as Interpreted from Primary Sedimentary Structures and Stratification Sequences, Short Course Notes, 2, SEPM, Dallas, 161p.

鬼頭　剛･堀木真美子･尾崎和美 , 1999, 三ツ井遺跡の古環境解析 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 87 集「三ツ井遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 118-146.

鬼頭　剛・上田恭子 , 2003, 濃尾平野北東部, 権現山遺跡の古環境変遷 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 110 集「権現山遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 58-65.

鬼頭　剛・堀木真美子・上田恭子 , 2003, 濃尾平野北東部, 猫島遺跡の古環境変遷 , 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集「猫島遺跡」, 愛知県埋蔵文化財センター , 115-124.

表３　地点 1(02 区) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, AD/BC)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	1σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
4.00	中粒砂層	炭質物	9985±40	-22.2	BC 9390,9365 9355	11335,11315, 11300	BC 9410-9345（34.4%） BC 9600-9555（27.6%） BC 9470-9435（18.3%） BC 9330-9310（10.8%）	11355-11295（34.4%） 11550-11500（27.6%） 11415-11385（18.3%） 11280-11260（10.8%）	PLD-1672（AMS）

表４　地点 2(02 区) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, AD/BC)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	1σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
4.60	灰褐色シルト層	有機質土壌	4025±30	-18.7	BC 2565,2520, 2500	4515,4470,4445	BC 2540-2505（46.4%） BC 2575-2550（35.2%） BC 2505-2490（18.4%）	4490-4455（46.4%） 4525-4500（35.2%） 4455-4440（18.4%）	PLD-1669（AMS）
4.72	黒褐色粘土層	有機質土壌	2700±30	-19.8	BC 830	2780	BC 845-815（54.2%） BC 895-875（34.2%） BC 860-850（11.6%）	2790-2760（54.2%） 2845-2825（34.2%） 2805-2800（11.6%）	PLD-1670（AMS）
4.87	黒褐色粘土層	有機質土壌	2310±30	-18.9	BC 390	2340	BC 400-375（91.9%）	2350-2325（91.9%）	PLD-1671（AMS）

表５　地点 3(98A 区) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	堆積物	試料の種類	^{14}C年代 (yrs BP)	δ^{13}C PDB (‰)	暦年代較正値 (1σ, AD/BC)	暦年代較正値 (1σ, cal yrs BP)	1σ暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1σ暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No. (method)
3.83	紫灰色粘土層	有機質土壌	4300±90	-20.3	BC 2900	4850	BC 3035-2860（75.6%）	4980-4810（75.6%）	Gak-20204（GPC）
4.07	紫灰色粘土層	有機質土壌	3390±70	-21.1	BC 1685	3635	BC 1750-1600（86.1%） BC 1560-1530（10.6%）	3700-3550（86.1%） 3510-3480（10.6%）	Gak-20203（GPC）
4.10	赤褐色粘土層	有機質土壌	3530±90	-21.5	BC 1880,1835, 1830	3830,3875, 3780	BC 1960-1740（96.5%）	3910-3690（96.5%）	Gak-20202（GPC）
4.19	赤褐色粘土層	有機質土壌	3130±80	-23.6	BC 1410	3360	BC 1500-1365（72.4%） BC 1360-1305（27.6%）	3450-3315（72.4%） 3310-3255（27.6%）	Gak-20201（GPC）
4.30	褐色粘土層	有機質土壌	1940±70	-17.6	AD 70	1880	BC 5-AD130（88.4%）	1950-1815（88.4%）	Gak-20205（GPC）

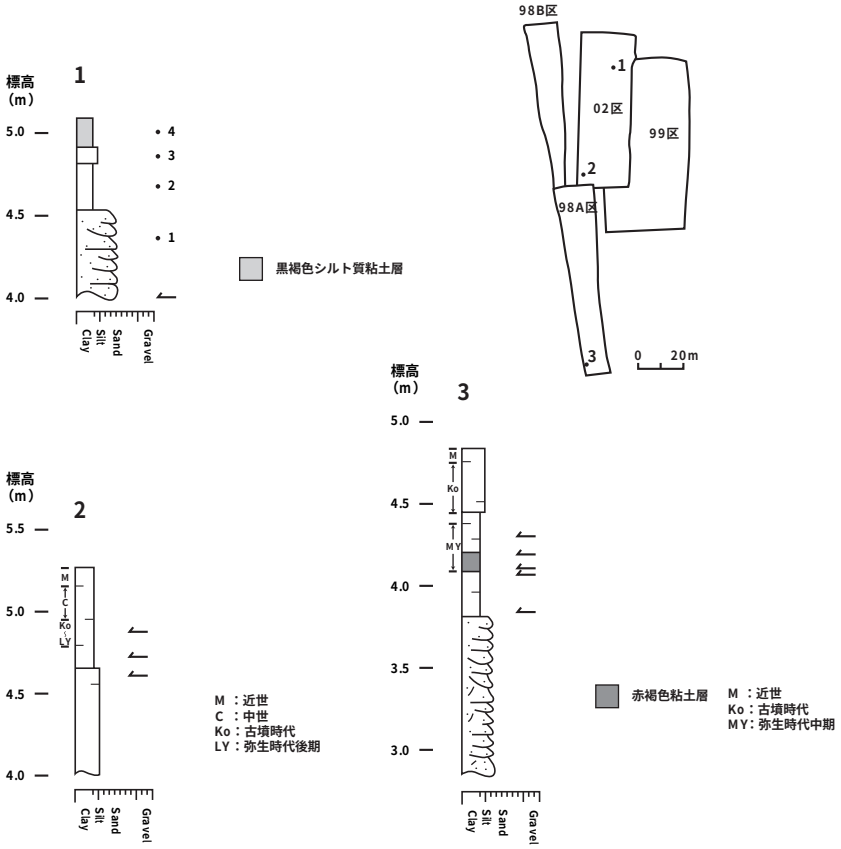


図 49　伝法寺野田遺跡における深掘調査地点

柱状図横の黒丸（●）および数字はテフラ分析用試料採取層準を，矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を示す．

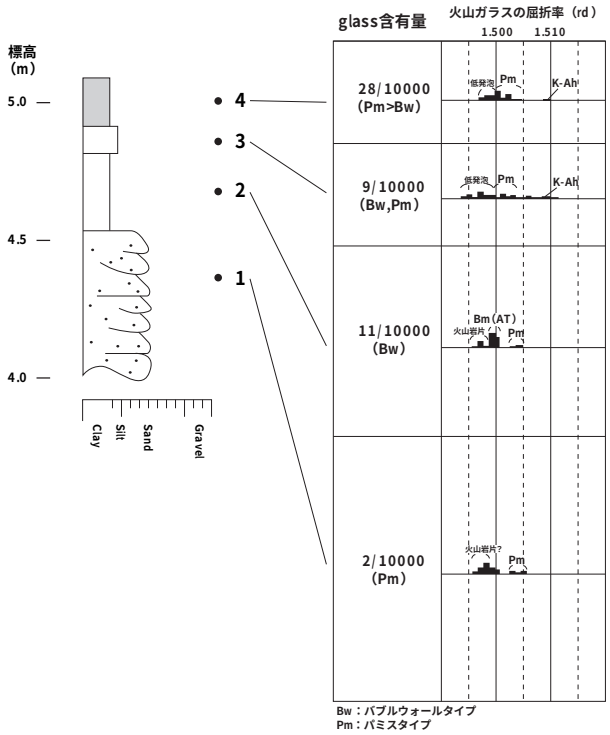


図 50　地点 1(02 区) における火山ガラスの屈折率ヒストグラム

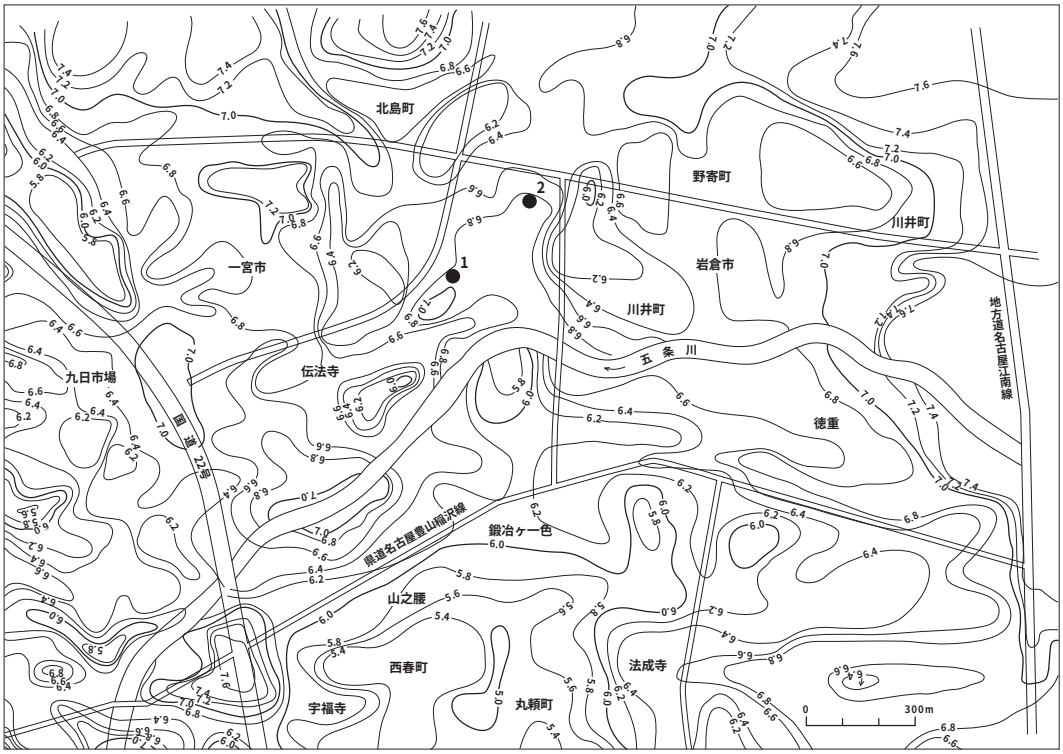


図 51　調査地周辺の等高線図

数字 1・2 は調査地点と周辺の遺跡を示す .

1. 伝法寺野田遺跡 (今回の調査地点) 2. 権現山遺跡

等高線 (m) は一宮市発行の「尾張西部 (一宮) 都市計画図 (1/2500)」, 岩倉市発行の「尾張北部 (岩倉市) 都市計画図 (1/2500)」, 西春町発行の「都市計画図 (1/2500)」, 春日町発行の「都市計画図 (1/2500)」の標高値を基に鬼頭が作成 . 等高線間隔は 0.2m.

地名は北島 (きたじま), 野寄 (のより) , 川井 (かわい) , 九日市場 (ここのかいちば) , 伝法寺 (でんぽうじ) , 徳重 (とくしげ) , 鍛冶ヶ一色 (かじがいしき) , 山之腰 (やまのこし) , 宇福寺 (うぶくじ) , 丸瀬 (まるせ) , 法成寺 (ほうじょうじ) である .

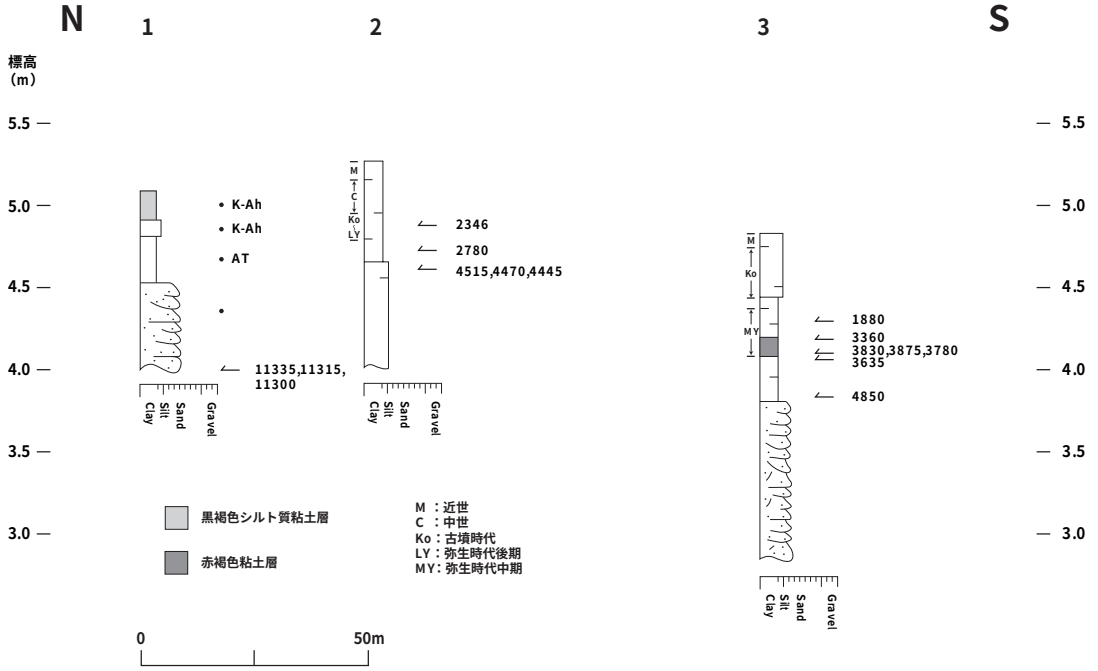


図 52　深掘による南北層序断面図

各地点の層序は経線方向に投影している . 矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を、数値は暦年代較正値 (cal yrs BP) を示す。柱状図右横の黒丸 (●) はテフラ分析用試料採取層準を示す。K-Ah: 鬼界アカホヤテフラ , AT: 姶良 Tn テフラ

第２節　伝法寺野田遺跡出土資料の鉛同位体比

東京国立文化財研究所 保存科学部　　平尾良光・榎本淳子・早川泰弘

１　はじめに

愛知県の伝法寺野田遺跡から出土した銅鏃について、愛知県埋蔵文化財センターの服部信博、鬼頭剛氏から化学的測定の依頼があった。化学組成（蛍光Ｘ線分析法による）は測定済みとのことなので、資料に含まれる鉛の同位体比測定を行い、産地に関して考察した。

２　資　料

資料は愛知県一宮市伝法寺野田遺跡から出土した銅鏃１点である。伝法寺遺跡は一宮市の南東部にあり、弥生中期の水田跡の他、古墳時代前期、古代・中世の遺構・遺物が確認されている。銅鏃は弥生時代中期の水田跡の畔付近から出土した。また、他の遺物との関係からこの銅鏃は弥生時代中期中葉からは時期が下らないとされている。資料の全体像は末尾の写真で示されるが、分析用には微量の粉錆が供された。

３　測　定

３−１　鉛同位体比法

１）　鉛同位体比法による青銅原料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した[1]。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が異なればそれぞれの鉱山毎に特有の（固有の）値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に反映されるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地の違いを示すと推定される。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、１マイクログラムの鉛があれば十分である。資料の金属部分でも錆部分でも同位体比は変わらないことが示されている。

２）　鉛同位体比の測定

資料から少量の金属を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて直流２Ｖで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.1 μｇに相当する鉛をリン酸−シリカゲル法で、レニウムフィラメント上に載せ、サーモクエスト社製の全自動表面電離型質量分析計 MAT262 に装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を 1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した鉛標準物質 NBS-SRM-981 で規格化し、測定値とした[2]。

4　鉛同位体比の測定結果と考察

4－1　鉛同位体比測定値

測定された鉛同位体比を表１で示した。得られた値を今までに測定された他の資料の値と比較してみると、図53、54のようになった[(1)]。

図53は縦軸が$^{208}Pb/^{206}Pb$の値、横軸が$^{207}Pb/^{206}Pb$の値である。この図をＡ式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち、日本の弥生時代に相当する時期の東アジア地域において、Ａは中国前漢鏡が主として分布する領域で、華北の鉛である。Ｂは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛と推定される。Ｃは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が集中する領域である。Ｄは朝鮮半島産の多鈕細文鏡と細形銅剣が分布する幅のあるラインの中心領域として示されることが判っている。図54は縦軸が$^{207}Pb/^{204}Pb$の値、横軸が$^{206}Pb/^{204}Pb$の値である。この図をＢ式図と呼ぶこととする。図２の中でＡ’、Ｂ’、Ｃ’、D’はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わしている。これらの図の中に本測定値を「●」で示した。また今までに本研究室で得られた数点の資料の測定値も参考として表７に含めて示し、図の中に「○」で示した。

4－2　鉛同位体比測定結果と考察

本資料はＡ式図でＡ領域とＢ領域の中間に位置することが分かった。Ｂ式図についてもＢ領域に近いがわずかに外れている。やはりＡ領域とＢ領域の間にあるとも考えられる。Ｂ領域、即ち中国華南産の材料であるとしてもそれを否定はしないものの、この資料は今までにわれわれが扱ったＡ～Ｄに含まれる典型的な材料でつくられてはいないと言える。むしろこのような値を示す可能性として次のような場合を考えた方が良いだろう。

(1) 今までに鉛同位体比が測定されていない場所（鉱山）から採られた鉱石を使っている。即ち今までにあまり知られていない場所の材料を用いた。

(2) Ａ領域の材料とＢ領域の材料を混ぜたものを使っている。即ち、中国華北と中国華南産鉛の混合された材料で作られた場合である。ただし、今までの弥生時代資料でＡ式図でＢ領域に位置する資料は後漢・三国時代の銅鏡の他は無い。それ故、Ｂ領域資料を再利用するとすればそれなりに材料を考えなければならない。

(3) Ａ領域の材料とＤ領域の材料を混ぜたものを使っている。即ち、中国華北と朝鮮半島産の鉛を混ぜた場合で、これにはより古い時代の製品の再利用が含まれる。

この資料のようにＡ・Ｂ領域の間に分布する資料は当研究室で扱った資料の中にはそう多くはないので、過去に測定された試料のうち同位体比値の似た資料を集めてみた（表７参照）。資料はいずれも弥生～古墳時代に相当する。ここで、資料３の銅釧はＢ式図でＡ’、Ｂ’の中間でもなく、Ａ’とＤ’の中間にも位置しなかった。即ち、資料３の場合は上記の２）、および３）である可能性は低い。今回、この野田遺跡から出土し、鉛同位体比を測定した資料は銅鏃１点だけなので、この測定値から材料の産地に関してすぐに結論は出せないが、非常に珍らしい値を持つ資料として考古学の見地からも検討されることを期待したい。また、鉛同位体比という見地からも注目してゆきたい。

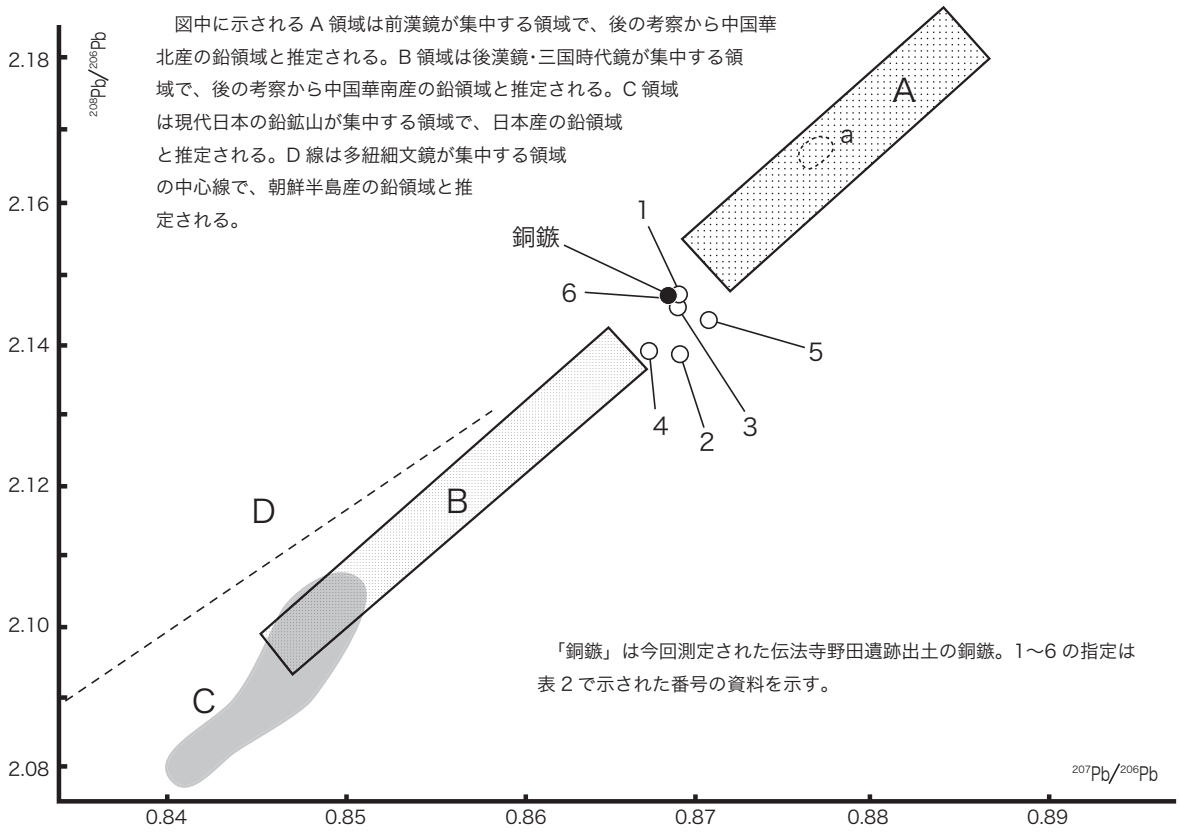


図 53　伝法寺野田遺跡出土の銅鏃の鉛同位体比 (A式図)

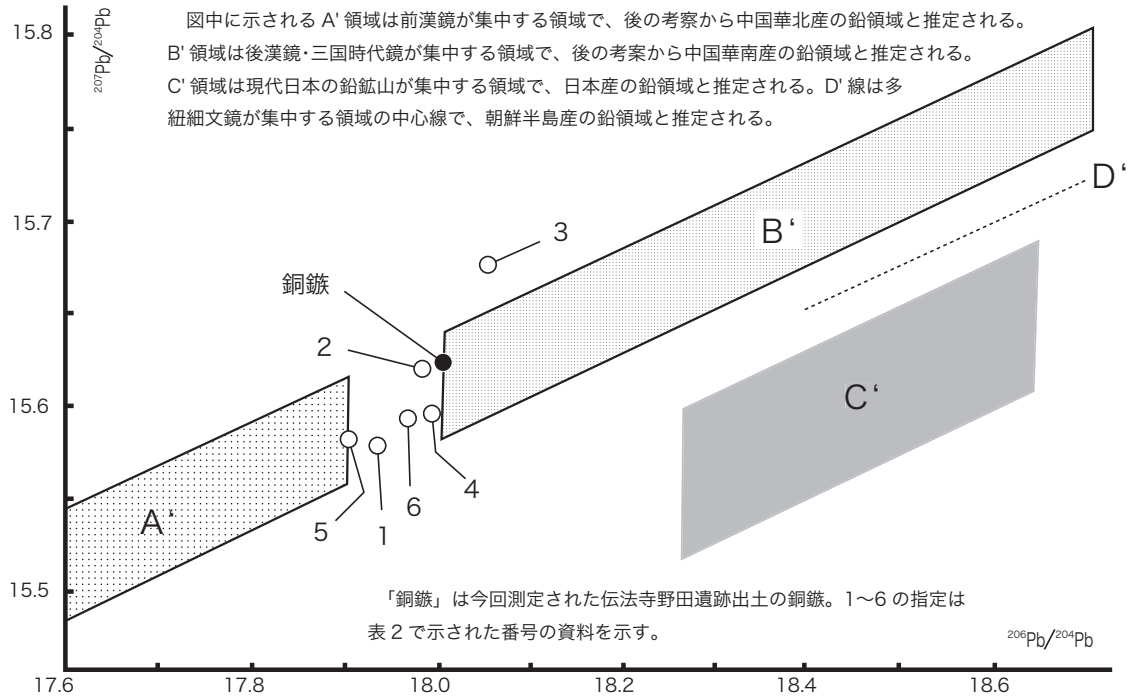


図 54　伝法寺野田遺跡出土の銅鏃の鉛同位体比 (B式図)

表６　伝法寺野田遺跡出土の銅鏃の鉛同位体比値

	$^{206}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{208}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$
銅　鏃 (KP1487)	17.997	15.625	38.629	0.8682	2.1464
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

ここで (KP) は当研究室の測定番号である。

表７　Ａ・Ｂ領域の中間に分布する資料の鉛同位体比値

資料の名称	$^{207}Pb/^{204}Pb$	$^{207}Pb/^{206}Pb$	$^{208}Pb/^{206}Pb$	文献
1　巴形銅器片 群馬県新保遺跡	17.929	0.8689	2.1470	(3)
2　鉛製耳環 岐阜県加茂郡川辺町	17.977	0.8690	2.1385	(4)
3　銅釧 No.1 福岡県吉武高木遺跡	18.044	0.8688	2.1449	(5)
4　銅釧 No.2 福岡県吉武高木遺跡	17.988	0.8671	2.1388	(5)
5　朝鮮小銅鐸 大分県別府遺跡	17.897	0.8707	2.1432	(6)
6　不明青銅器 佐賀県千塔山遺跡	17.960	0.8683	2.1463	(7)
誤差範囲	±0.010	±0.0003	±0.0006	

5　引用文献

（1）平尾良光，榎本淳子：弥生時代青銅器の鉛同位体比，『古代青銅の流通と鋳造』平尾良光編，鶴山堂（東京），p29-161（1999）

（2）平尾良光，馬淵久夫：表面電離型固体質量分析計 VG Sector の規格化について，保存化学 28，17-24（1989）

（3）平尾良光，榎本淳子：群馬県から出土した弥生時代青銅器の自然科学的研究，（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘報告書第 211 集『天引狐崎遺跡 II』，p209-224（1996）

（4）平尾良光，瀬川富美子：東京国立博物館へ報告（1993）

（5）馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比，考古学雑誌 75，385-404（1990）

（6）平尾良光，鈴木浩子：大分県出土青銅器についての自然化学的研究，大分県教育委員会へ報告（1996）

（7）平尾良光，鈴木浩子：佐賀県から出土した弥生時代青銅製遺物についての自然科学的研究，佐賀県教育委員会へ報告（1999）

第３節　銅鏃の化学組成

藤根　久（パレオ・ラボ）

１．はじめに　一宮市丹陽町に所在する伝法寺野田遺跡水田跡から、弥生時代中期の銅鏃が検出された。ここでは、この銅鏃の化学組成について蛍光Ｘ線分析を行った。

２．試料と方法　試料は、予めマイクロスコープを用いて撮影した後、破断面について㈱堀場製作所製 XGT-5000Type Ⅱを用いて元素マッピングを行った。測定条件は、Ｘ線導管径 100 μ m、電圧 50KV、電流自動設定、測定時間 20,000sec である。また、断面の元素マッピング分析の後、典型的な３箇所について点分析を行った。測定条件は、Ｘ線導管径 100 μ m、電圧 50KV、電流自動設定、測定時間 500sec である。なお、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

３．結果および考察　銅鏃の破断面を顕微鏡観察した結果、色調により大きく５相が観察された(中心より外側へ１層から４層と呼ぶ)。このうち中心部は黒色の金属光沢を呈し（灰白色部分を含む)、外側の１層はやや黒味のある灰白色、２層が灰白色、３層がやや明るい灰白色、４層が最外層の淡黄色であった。

この断面の元素マッピング分析を行った結果、中心部は銅の濃度が高く、２層では低くなり、３層以降はさらに低くなる（表１)。ケイ素 Si も銅と同様の元素分布を示す。

一方、鉄 Fe や錫 Sn あるいは鉛 Pb は、外側に向かって相対的に高くなる。なお、中心部の鉄含有量は計算上 0.03% であるが、測定誤差が大きいことから全く含まれていない。

以上のことから、中心部分の化学組成が本来の組成に近く、銅と錫および鉛からなる青銅である。青銅は、一般的に銅に錫を混ぜ合わせた合金であるが、実際には鋳造の際の湯流れを良くする目的もあり、鉛などの他の元素が含まれているのが一般的である（馬淵ほか、2003)。

なお、ケイ素は、中心部において高いことから、本来不純物として含まれていたことが考えられる。

４．おわりに　銅鏃の蛍光Ｘ線分析を行った結果、銅と錫合金であり、その他鉛を含む青銅であることが判明した。なお、ケイ素は、本来不純物として含まれていたことが考えられる。

表８　蛍光Ｘ線分析による半定量分析結果 (FP 法)

測定位置	Si	Fe	Cu	Sn	Pb	total
P1（中心部）	**11.88**	0.03	**37.35**	34.37	16.36	99.99
P2（1層）	10.60	0.08	11.51	61.37	16.45	100.01
P3（3層）	6.29	**2.69**	7.88	**63.94**	**19.20**	100.00
min	6.29	0.03	7.88	34.37	16.36	
max	11.88	2.69	37.35	63.94	19.20	

引用文献

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊（2003）文化財科学の事典．522p．朝倉書店．

第６章　総括

第１節　伝法寺野田遺跡における景観の時期的変遷

当遺跡では遺構・遺物の状況から、弥生時代以降、断続的に人間活動の痕跡を追うことができる(図 55)。第３章で報告したように、弥生時代～古墳時代と、古代以降の大きく２時期に区分される。各時期における遺跡内での様相について言及する。

１. 弥生時代～古墳時代

当時の地形的景観は、99 区・02 区が微高地として周囲より高く、98A 区では東側にかけて、98B 区では南側にかけて傾斜する地形となっていたようである。98A 区では自然地形に沿った形で、南―北気味の北東―南西方向に、溝もくしは自然流路が存在していた。

活動の痕跡は、微高地の 99 区で弥生時代前期から見られるものの、遺物の安定した出土は、弥生時代中期後葉の高蔵式期以降であり、98A 区・98B 区･99 区と広がりが窺えられる。02 区では、調査区南端に弥生時代後期の包含層が調査区外南側に向かって残存しているのみである。ここは今回の調査区の中では当時の地表面が最も高かったようで、包含層の大部分が後世の諸要因によって完全に削平された可能性がある。

この時期に属する遺構群として、土坑群・竪穴状遺構群・溝・水田跡などがある (図 17)。竪穴状遺構に関しては、焼土・貼床・炭化物の広がりなどが確認されなかった。また、それらを囲む「溝」

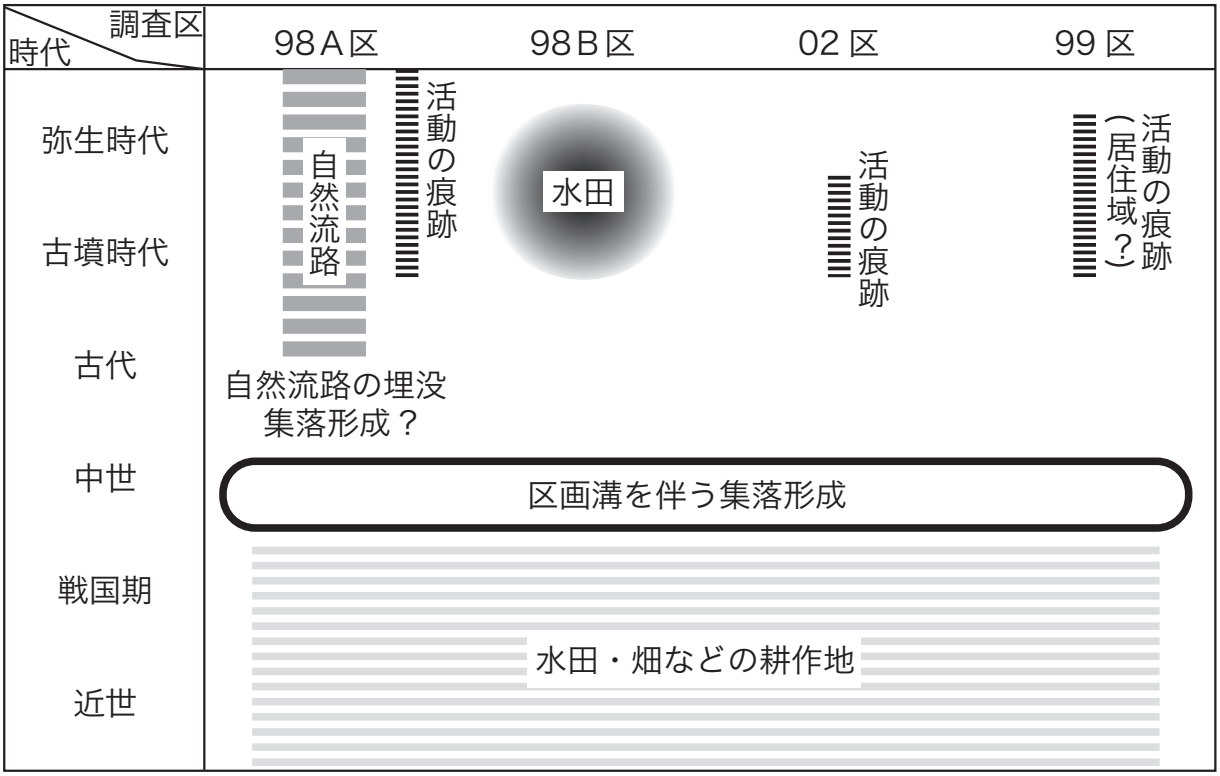


図 55　伝法寺野田遺跡の時代別変遷

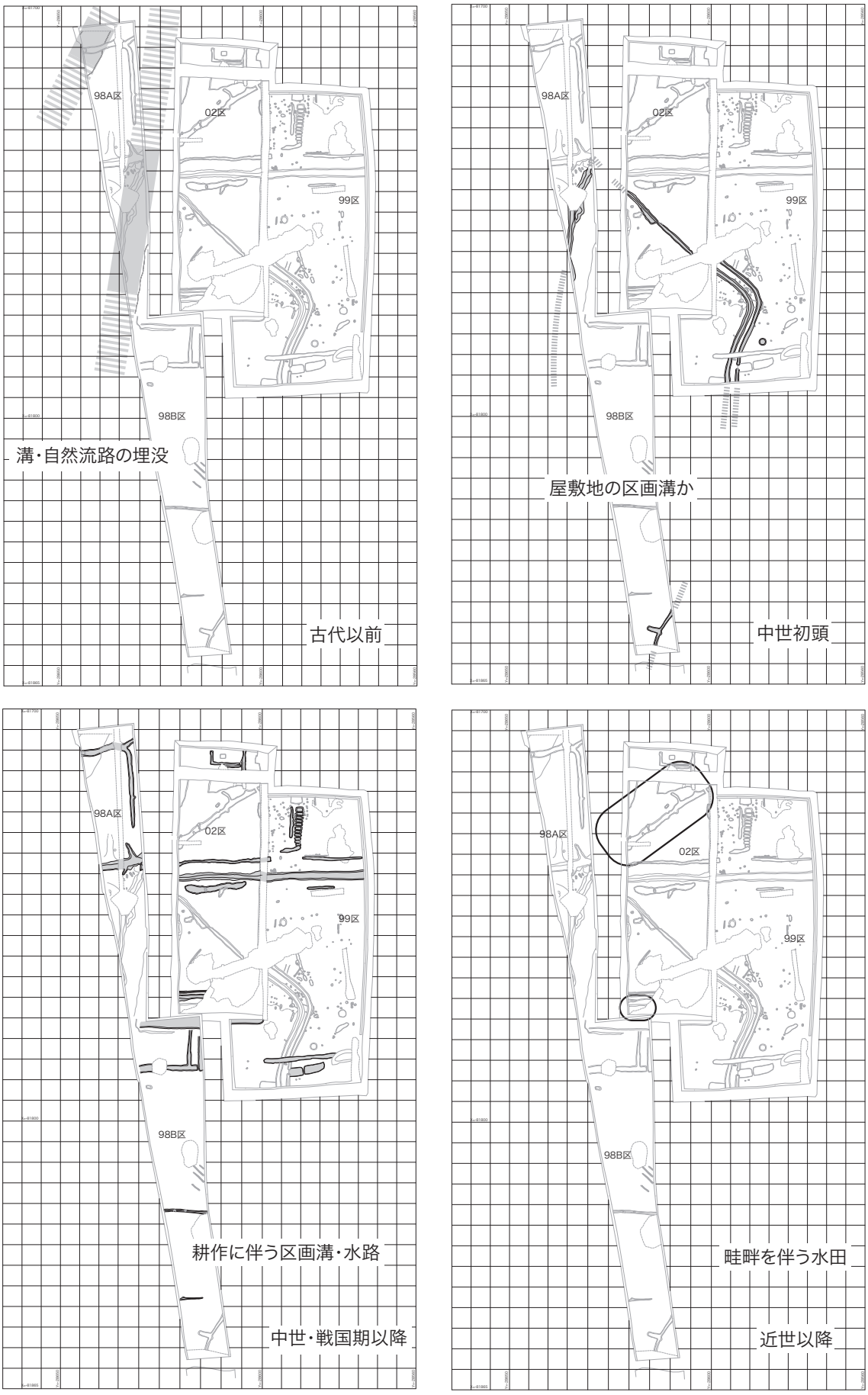


図 56　古代以降の遺構変遷図

(99 区 SD10) は地形の傾斜に伴った遺構の可能性がある。しかし、被熱した大きな河原石がまとまって出土していることなどからも、当地点での何かしらの活動は行われていたと考えられる。また水田跡に関しては、明確に時期比定を行うことは難しい。畦畔検出時に古墳時代初頭の廻間 1 式以降と考えられる遺物も出土しており、少なくともこの時期まで下る可能性 (時期幅) は考慮する必要があろう。したがって、99 区で見つかった諸遺構と、98B 区の水田跡は同時併存しない可能性もある。

2. 古代以降

古代以降は、さらに 4 時期に区分することができる（図 56)。

古代　98 A区を中心に遺物の広がりが見られる。これまで存在していた溝もしくは自然流路 (98A 区 SD05・SD08) が埋没し、水流が見られなくなり窪地化した段階である。当時期の明確な遺構は検出されなかったものの、この段階での活動は 98A 区および調査区外北側に向かって広がった区域が中心であったと考えられる。

中世初頭　区画溝を伴う集落域が形成された時期である。98A 区 SD03・06、98B 区 SD10、99 区 SD14・15、02 区 SD08 は、方位・法量などから同一原理に基づいて設けられた溝と考えられる。98A 区 SD03・06 は 98ASD08 の窪地化した部分に沿って作られていることから、方位的事情は、地勢的な要因であったものと考えられる。溝は一条が基本のようであるが、部分的に二条一単位になっているか。98B 区 SD10 の突起状の張り出しを区画の「仕切り」と想定するならば、40m × 80m の平行四辺形気味な区画を確認することができ、さらに南側に集落域が伸びていると考えることができる。

中世・戦国期以降　明確な時期を比定することはできない上に、恐らく複数時期にわたる遺構群を一括しているものと考えられる。東―西および南―北に沿った状態の溝が中心となる。溝は長く作られているものと、数十 m 単位で途切れているものとが存在する。調査時では溝の断面形状はU字形や浅い皿形とさまざまで、99 区 SD03・SK04 ～ 14、02 区 SD07 ではある一定の単位で凹凸が存在している。いずれも水田および畑地などの耕作に関連する遺構と考えられる。

近世以降　今回の調査で最も上面で確認できた遺構である。

第２節　出土銅鏃について

１. はじめに　今回出土した銅鏃に関する歴史的位置づけを若干行う。鏃は弓矢の一部であり、縄文時代草創期以降から継続して使われた技術体系の一部である。弦を用いた唯一の「飛道具」であり、その製作・使用に関しては、当時の技術の「粋」が集められているといえよう。このような道具であるからこそ、その技術的形態には精神的価値が付加されている可能性が大いに想定される。これが出土状況などに反映されている場合もあるかもしれない。

第３章で報告したように、この銅鏃は 98B 区大畦畔脇より出土した。発見当時は、(1) 無茎鏃であること、(2) 検出畦畔が弥生時代中期中葉に遡る可能性があり、この銅鏃もその時期に属する可能性がある、との２点により、大いに注目されたものである。

ここでは伝法寺野田遺跡出土の銅鏃に関して若干の検討を行う。鏃は銅製のみならずさまざまな材質によって作られていることが知られている。特に弥生時代以降は、素材間の「写し」の現象がしばしば見られ、銅製のみでの検討はより不完全なものとなる。ここでは、伝法寺野田資料が帰属する可能性のある、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての「鏃」と想定される資料に関して、各素材に関して概観する。

現在、考古学上で行われている器種分類は、平面形態上の便宜的なものであり、先学の研究を踏襲したいわば慣例的なものでもある。これにより、例えば、「鏃」「ヤス」「銛」など、大まかな識別は可能である。しかし、これは当時の実際の使われ方を保証するものでは決してない。本来であれば、前提として、ヤス・鏃・固定銛などを一括した、いわば刺突具類総体の議論が必要である。ここでは、紙面の都合上、すべてを網羅することが不可能であるので、上述したことを前提としながらも、これまで「鏃」として扱われてきた資料を中心に検討する。鏃の部位・分類などの記載は、石鏃に使われる部位名称を援用する。従って一部銅鏃・鉄鏃には適切ではない場合もあると思われるが、ご容赦願いたい。

２. 各種の鏃・刺突具類に関する検討

(1) 銅鏃　日本列島内では有茎鏃が主体であり、全資料の中で 90 パーセントを占めるとの意見もある (田中 1991)。その中でも、無茎鏃は鉄鏃・石鏃との有機的関係が示唆されている一群とも言われている (安藤 2003 など)。また、東海地域は「多孔鏃」や「単孔鏃」と、特徴的な有茎鏃が分布している地域としても知られている。さらには、濃尾平野弥生中期の石鏃の基本形である五角形を志向し、それを銅鏃に写したものと想定しているもので、鏃身の先端付近に稜をもつ銅鏃について、「東海系銅鏃」の提唱もなされており、同時に銅鏃の編年案が提示されている (赤塚 2002)。いずれにしても、愛知県下では 130 点近くの資料が知られており、全国最多であることは特筆されよう (加藤 2003)。

このような先学の研究を参考にしながら、資料を概観する (図 57 の１～27)。鏃の形態としては、有茎鏃が圧倒的多数であり、現在、無茎鏃として知られているものは、松岡氏が集成した１～４の４例であり (松岡ほか 2003)、他に今宿遺跡出土例の一部や (赤塚 2002)、保美貝塚出土例の一つもにも (森井 1985) その可能性が指摘されている。１～３は鏃身中央部に凹部の存在することが

類似している。１に比べ２・３は断面形状がより扁平である。２は平面形態五角形を呈しており、１・３も同様の可能性もある。１は基部が欠失しており全形を窺うことができないものの、恐らく２・３と類似の形態を呈しているものと考えられる。発掘調査で出土した３は古墳時代初頭の廻間１式３段階の時期と報告されている。

尾張低地帯の遺跡から出土した銅鏃の一部を提示した (5 ～ 27)。時期は弥生時代後期から古墳時代前期のものと推定される。断面形状は扁平な菱形および楕円形を呈しているものが圧倒的に多い。20 は鏃身部分が三角形を呈するものである。特に注目されることは基部の断面形状が円形と、鏃身部とは全くことなる形状を呈していることである。平面形態では茎部の作り出しが明瞭なものが多く (5 ～ 16・20 ～ 26)、いわば円基状になっているものも若干存在する (17 ～ 19)。鏃身部の平面形態が五角形を呈するものが多見され、古墳時代初頭頃に出現する多孔鏃も平面形態は同一である (26)。

(2) 鉄鏃　東海地域では、現在までのところ当該地域の鉄器の出土は希少である。出現は弥生後期から終末期のようであるが、より時期が下る可能性も否定できない。平面形態は有茎鏃が多いようであり、西日本で言われているような無茎鏃が数量的に主体を占める傾向とは異なる。鏃身部が細長いものと (28・31)、短いもの (29・30) とがある。29 は凹基有茎を呈する。断面形状では扁平な傾向がある。31 は鏃身部が扁平な菱形を、基部が楕円形を呈し、有茎銅鏃との形態的類似性が窺えられる。28 も同様かも知れない。

(3) 打製石鏃　打製石鏃は、縄文時代草創期以降、多見されるものである。しかし、その背景にある技術的総体は全く同一のものではないと考えられ、詳細な検討も経ないまま単純に「同一系列」とか「縄文時代以来」などの指標で評価することは絶対に避けるべきである。

ここでは、弥生時代中期前半の事例として猫島遺跡例を (32 ～ 60)、弥生時代中期後半の事例として一色青海遺跡例を提示する (61 ～ 78)。猫島遺跡では、有茎鏃・無茎鏃の両者が存在し、その割合はほぼ６対４である。平面形態での特徴は、三角形のものと五角形のものが存在することである。断面形状では菱形および楕円形状を呈するものに混じって、片面側に凸状を呈する「カマボコ状」のものが多見されることにある。また、有茎・無茎に関係なく、鏃身中央に瘤状残存部があるものが多い。有茎鏃は基部の作り出しが極めて明瞭なものが多いなかで、基部の作り出しが不明瞭になっている、いわゆる柳葉形が若干存在する (58･59)。54 ～ 56 は全長 5 cm を越えるもので、有茎五角形鏃のなかでも特に「朝日型長身鏃」と呼ばれているものである。使用石材は、下呂石 (円礫) が最も多く、チャート・サヌカイト？および若干黒曜石が含まれる。一方、一色青海遺跡ではほぼ有茎鏃のみとなる。鏃身の平面形態としては三角形と五角形が存在するものの、三角形が多い傾向がある。断面形状は菱形・楕円形状・「カマボコ状」がある。鏃身中央に瘤状残存部があるものが多い。有茎鏃は基部が明瞭に作り出されているものに関しては作り出しの程度が小さくなる傾向があり、さらに作り出しが不明瞭な柳葉形が多くなる傾向にある。使用石材は下呂石 (円礫) とチャートが主体である。

尾張低地帯ではないものの、近隣の事例として弥生時代後期初頭に属する可能性のある打製石鏃群が、瀬戸市長谷口遺跡から出土している (79 ～ 88)。有茎鏃・無茎鏃の両者が存在するものの、

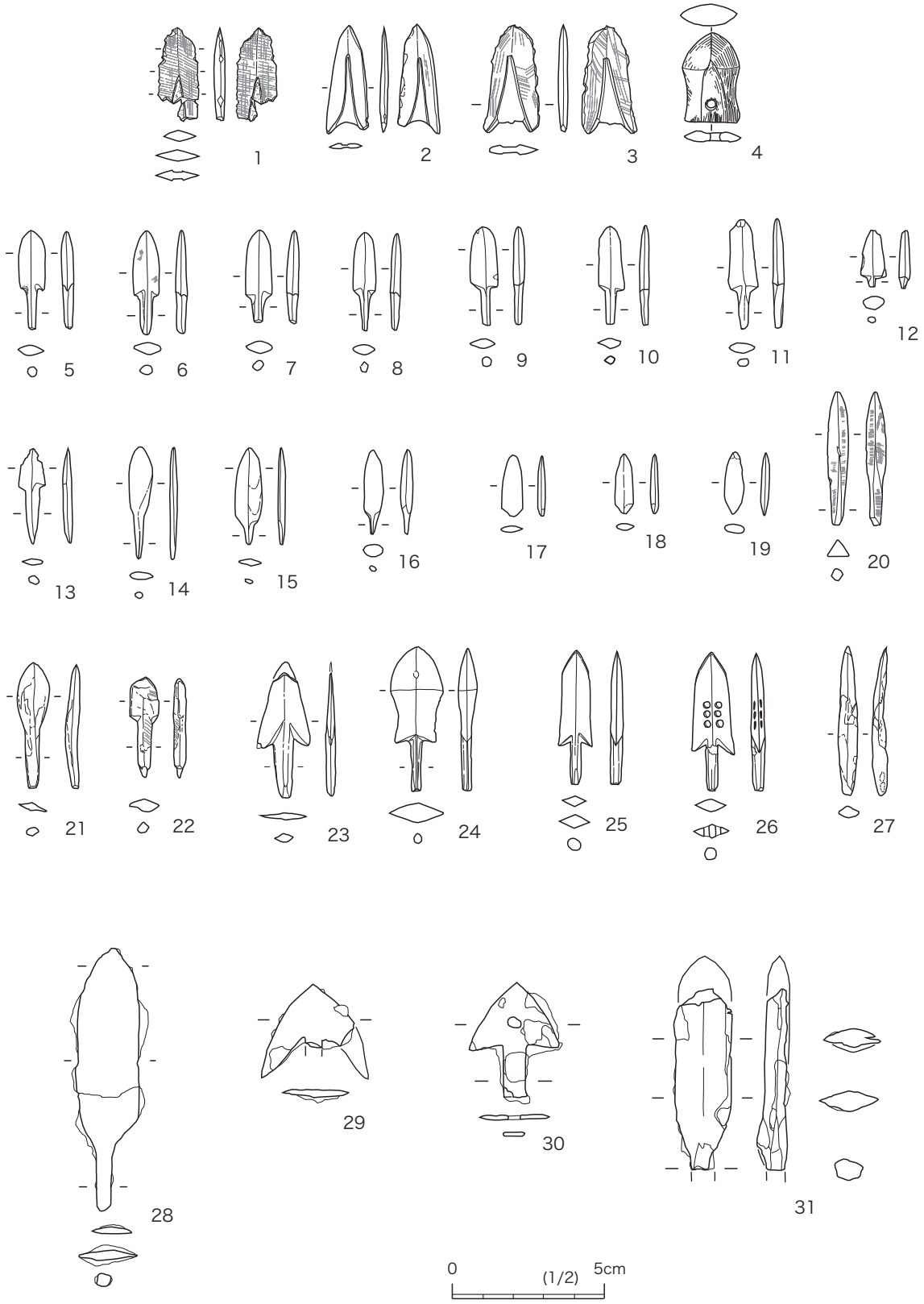


図 57　弥生時代から古墳時代前期の銅鏃・鉄鏃など刺突具類 (1 ： 2)

1 伝法寺野田、2 朝日、3 深橋前、4 神稲村、5 ～ 24・27 朝日、25・26 西上免、28 三王山、29 ～ 31 南山畑　(図は各報告より)

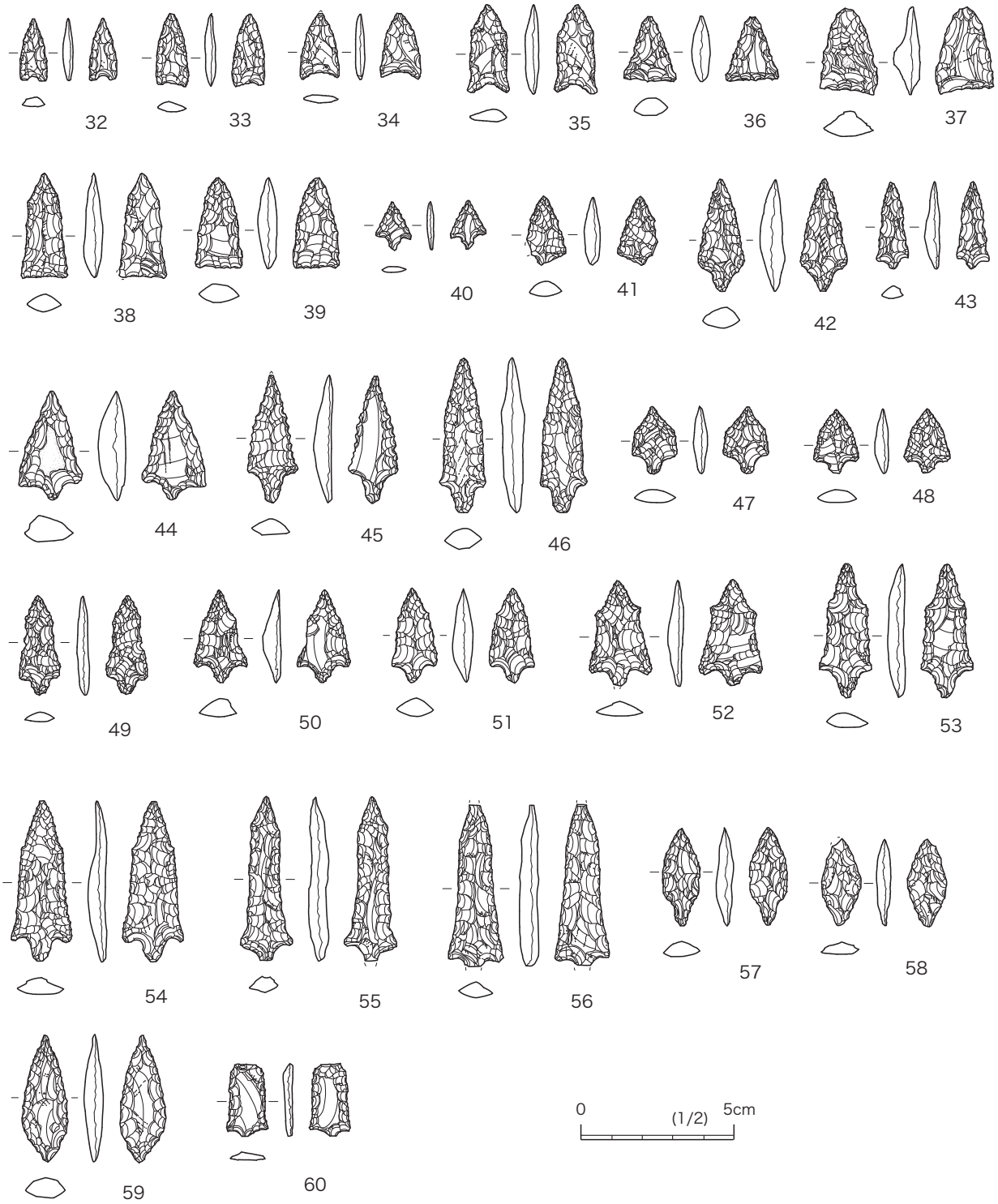


図 58　弥生時代中期前半の打製石鏃　(1 ： 2)
32 ～ 60 猫島遺跡 (報告より)

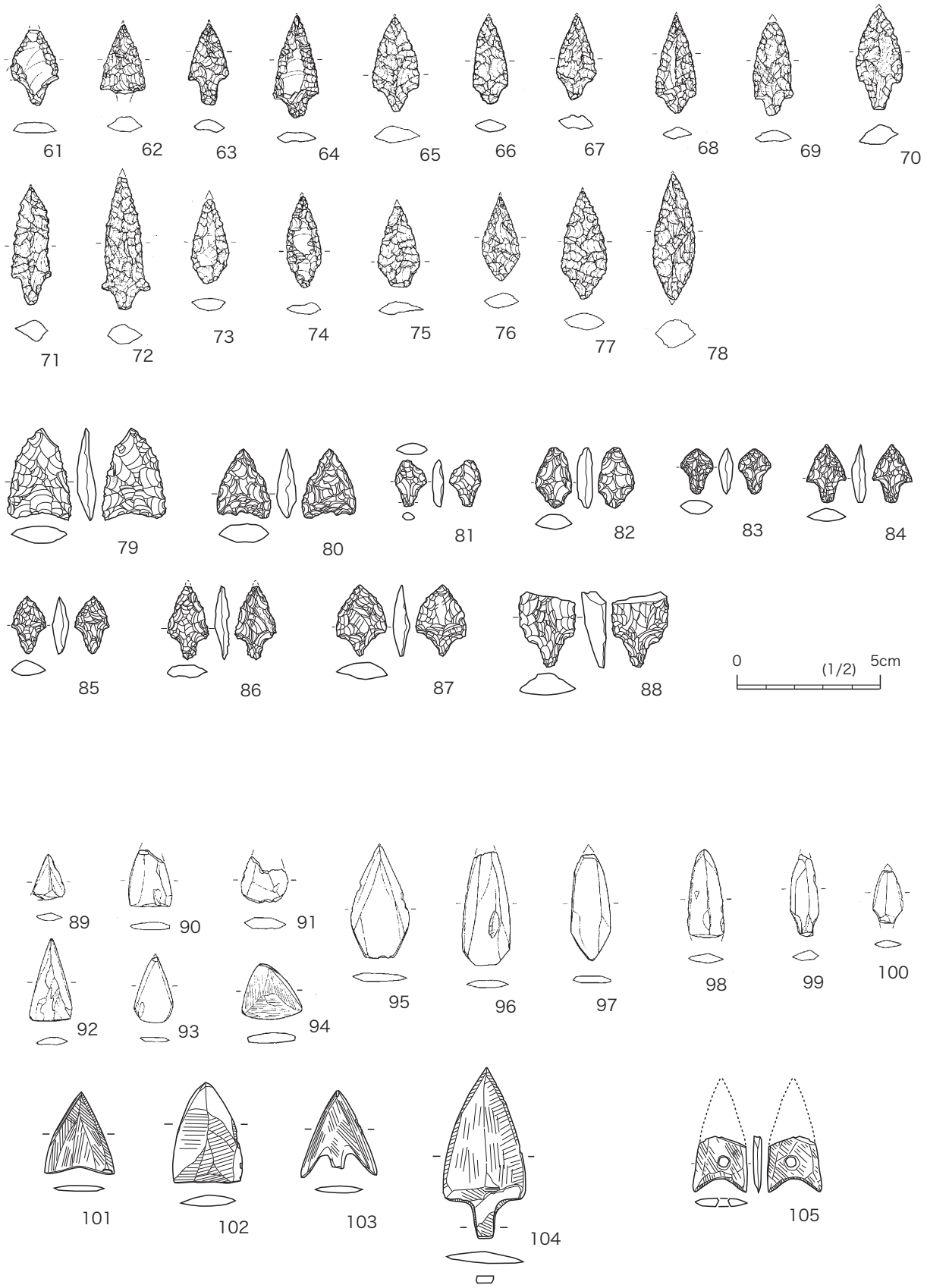


図 59　弥生時代中期後半打製石鏃および弥生時代磨製石鏃 (1 ： 2)

61 ～ 78・89 ～ 100 一色青海遺跡、79 ～ 88・105 長谷口遺跡、101 ～ 104 八王子遺跡

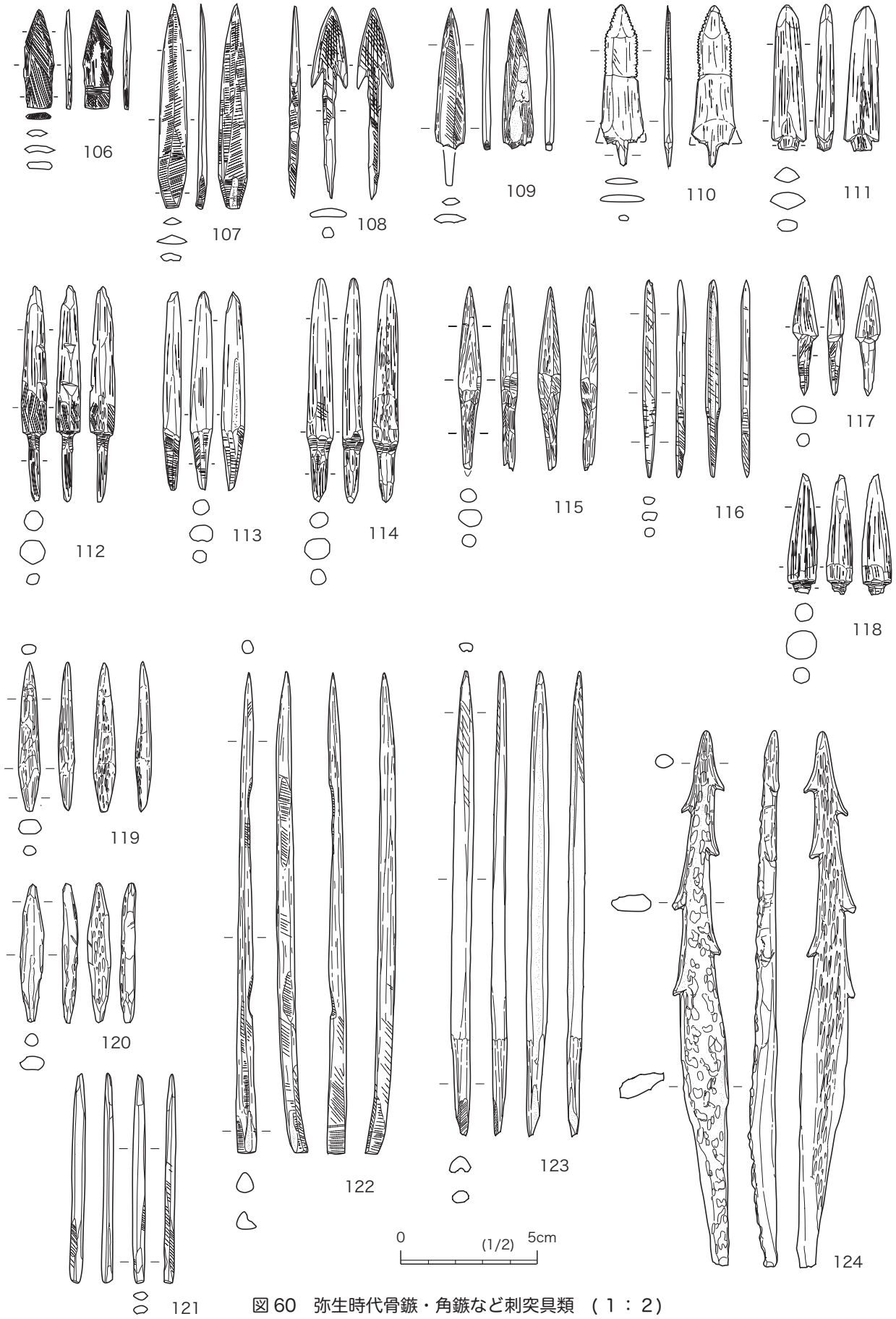


図 60　弥生時代骨鏃・角鏃など刺突具類　(1 ： 2)
106 一色青海遺跡、107 ～ 124 朝日遺跡 (報告より)

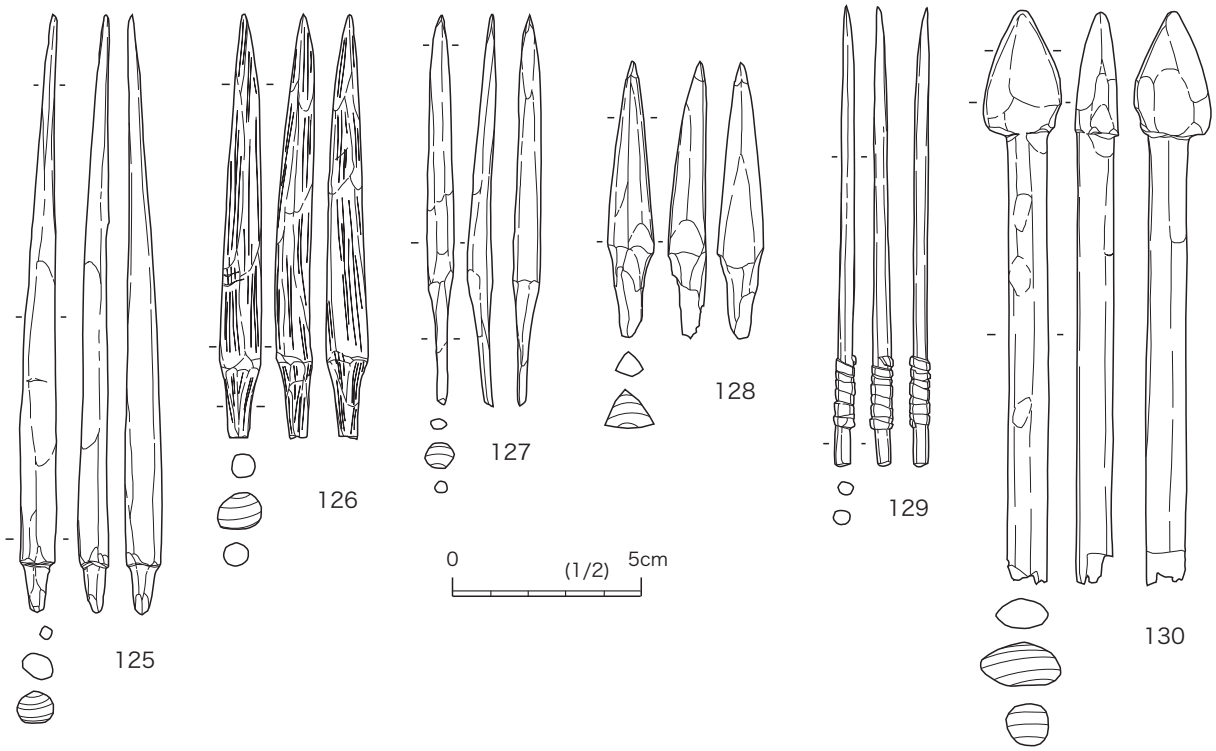


図 61　弥生時代木鏃など刺突具類　(1 ： 2)
125 ～ 130 朝日遺跡 (報告より)

有茎鏃が多数を占める。平面形態は、三角形のものと五角形のものが存在する。断面形状は菱形・楕円形状・「カマボコ状」がある。鏃身中央に瘤状残存部があるものが多い。この資料群では、有茎鏃に関して鏃身部の法量が小さい傾向がある。ここでも基部の作り出しの程度が小さくなる傾向が窺えられる。石材はチャートである。

(4) 磨製石鏃　敲打および剥離調整ののち全面に研磨調整が行われている石鏃である。弥生時代中期後半の事例として一色青海遺跡例を (89 ～ 100)、弥生時代後期前半の事例として八王子遺跡例 (101 ～ 104) を提示する。また、上述した長谷口遺跡からも 1 点出土している (105)。

一色青海例では、平面形態で無茎鏃・有茎鏃があり、無茎鏃がある一定量存在することが大いに注目される。無茎鏃は、凹基はなく、ほぼすべて平基である。また、有茎鏃では鏃身部と茎部との区別が明瞭なもの (99・100) と不明瞭なもの (97) とが存在する。断面形状は、扁平な台形状を呈するものが多い。なかには鏃身部の中央に稜が見られるものがあり、断面形状が一方のみ凸状および扁平な菱形を呈するものもある。有茎鏃・無茎鏃に存在するものの、有茎鏃により顕著である。石材は、泥岩・ホルンフェルス・チャートなどが使用されている。

八王子遺跡では、凹基無茎 (101)・平茎無茎 (102)・凹基有茎 (103)・平茎有茎 (104) と、平面形態各種の磨製石鏃が報告されている。断面形状は、扁平な台形を呈するもの (101・103) と中央に稜が形成されているもの (102・104) とがある。石材は ** である。103 は平面形態・断面形状上、29 などとの有機的関係が考えられる。105 は凹基無茎で、中央に穿孔が施されている。断面形状は扁平な台形を呈する。使用石材はホル

ンフェルスである。

(5) 骨鏃・角鏃　骨角器のなかで、「鏃」とされているものについてである (106 ～ 120)。本来であれば、刺突具類としての包括した議論が必要であることは上述した (121 ～ 124)。尾張低地帯で報告されている骨角器は、朝日遺跡の遺跡形成上、時期が確定できている資料が少なく、確定できている資料に関しては弥生時代中期まで、特に中期前半の資料が多いようで、現状では弥生時代後期とされている資料は不明である。名古屋台地では、高蔵遺跡・瑞穂遺跡などで弥生時代後期の例が若干知られており、これらの資料が指標となると考えられる。ここでは朝日遺跡例 (107 ～ 124) と一色青海例 (106) を提示する。なお、今回の検討対象遺物には牙鏃および牙製の刺突具類は見られなかった。

平面形態では無茎鏃 (106・107) と有茎鏃が存在するが、有茎鏃が圧倒的多数である。106・107 はともに管状骨製と考えられ、いずれも平基鏃である。平面形態では 106 が五角形状、107 が長三角形状を呈する。107 では一平面の中央に稜が形成されていることなどから、断面形状では極めて扁平な三角形状を呈する。106 は平面形態・断面形状などから、同遺跡から出土している平基無茎の磨製石鏃との有機的関係が考えられる (90 ～ 93・95・96)。

有茎鏃では、断面形状が円および楕円形のもの (112 ～ 120) と、断面形状がより扁平な志向を有するもの (108 ～ 111) に大別される。後者は製作時により平面形態を重視した結果生じたものと考えられる。108 は基部が鏃身部に比べ長い志向のものである。110 は打製石鏃の五角形鏃 (朝日型長身鏃) を模したものと考えられる (54 ～ 56)。鏃身部上半縁辺には細かいピッチで刻みがつけられている。111 の平面形態も、鏃身部が五角形を呈する。108 ～ 110 に比べ断面に厚みがある。断面形状は菱形を呈し、中央に稜がつくられている。110 に比べ、打製石鏃の五角形鏃との関係が直接的ではないかもしれないなど、今後さらに検討が必要な形態である。108・110 は骨製？、109 は管状骨製、111 は鹿角製である。断面形状が円および楕円形のもの (112 ～ 120) が、資料数的には多くを占める。基部の作り出しが明瞭なもの (112 ～ 118) と、不明瞭なもの (119 ～ 120) とがある。特に後者に関しては、ヤスを包括した議論が必要である (121 ～ 123)。112 は鏃身部に横方向への抉りが見られる。若干磨滅気味ではあるが、固定銛に見られる「逆鈎」と同効果のものかもしれない (112)。112 ～ 115・118 ～ 120 は鹿角製、116 は管状骨製と考えられる。鹿角に関しては、角幹・枝を半截ないし分割したものを材として作っているものが多いなかで、118 は鹿角枝の先端を分割せずに作られていることが注目されよう。

(6) 木鏃　当地域では、朝日遺跡で若干例知られているのみである。時期は、中期のもので、後期の資料は現在のところ不明瞭である。無茎鏃の例は知られていない。125 ～ 127 は断面形状が円あるいは楕円形を呈するもので、基部の作り出しが明瞭である。128 も基部の作り出しが明瞭な有茎鏃であるが、断面形状が三角形を呈することが特徴的である。129 は棒状の刺突具であり、ヤスとされているものかもしれない。基部には植物樹皮？による結縛が行われた様子が窺えられる。130 は断面形状円形で幅・厚さ均一の棒状に作られており、一端に三角形状の作り出しがなされている。鏃が矢柄に装着されている状態を模したものかも知れない。

以上が、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての鏃・刺突具類の概観である。当地域においては、弥生時代後期以降、磨製石鏃・銅鏃・鉄鏃は形態上の相関関係があると考えられ、かつそれに平面形態五角形を呈する打製石鏃との関係も累積的に存在している可能性がある。骨鏃・角鏃・木鏃に関しては、断面形状円もしくは楕円形のものが多い中で、平面形態を重視する断面形状扁平志向の資料の存在は、注目に値する。また、木鏃 128 に見られるような鏃身が断面形状三角形の鏃は、銅鏃にも見られるものの (20)、鏃・刺突具類においては非常に特異なものと位置づけられる。銅鏃 20 は、大陸系の銅鏃を模したものといわれている (高田 2001 など)。この形状の鏃は骨鏃・角鏃として、韓半島の全羅南道郡国里貝塚や、慶尚南道馬山外洞城山貝塚や府院洞貝塚など、「原三国時代」ないし「三韓時代」といわれる時期の貝塚出土資料にしばしば見られるものである。資料的制約はあるものの、銅鏃のみならず、骨鏃・角鏃・木鏃を含めた、広域的検討も必要である。これら資料の使用素材や、西日本全体をも含めた詳細な検討を経ないまま、直ちに有機的関係を言及するべきではないと考える立場から、これに関しては今後の検討課題とする。

3. 伝法寺野田遺跡出土銅鏃をめぐって

銅鏃の出土例が多い当地域においても、無茎鏃は極めて少ない。また、平面形態および断面形状の特徴などから、これらの銅鏃は、有茎銅鏃とは一線を画している感がある。さらに上述したように、伝法寺野田例が東海地域の非銅鏃との素材間を越えた関係を指摘するのは容易ではない。従って、伝法寺野田遺跡例に関しても、先学が指摘されているように、無茎銅鏃のみの列島的な視点が必要であろう。具体的には、山陰から北陸の日本海岸域を中心にまとまって見られるようであり、「北近畿系銅鏃」や (赤塚 2002)、「地域性」がみられる「 2 類銅鏃」の一種 (高田 2001) とされるなど、これらの一群での考慮が必要である。この一群に関しては、すでに森井氏の集成が知られている (森井 1985)。20 年ほど経て、東海地域の資料数が増加した形になったといえる。森井氏の分類を参照すると、無茎銅鏃として集成されたものの平面形態・断面形状および法量にいくつか差異が見られる。一括した議論の他に、個々の歴史的評価を行う必要があろう。朝日例・深橋前例は京都府大山墳墓群例との類似が指摘できそうである。伝法寺野田例は上述したようにこれらとは断面形状などで若干の差異が指摘できるものの、関連して考慮する必要があろう。無茎銅鏃は鉄鏃との類似性が強いと指摘する意見もある (安藤 2003)。深橋前例では赤彩が報告されているなど、これら無茎銅鏃は独特な意義を有していた可能性もある。考古遺物の背景にある時期的・地域的状況などを考慮の上、無茎鏃が必要とされる矢としての構造上の意義を考慮する必要があろう。

参考文献

赤塚次郎編 ,1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

赤塚次郎 ,2002「東海の青銅器覚書」『考古学フォーラム』15.49 ～ 57 頁。考古学フォーラム編集部。

飴谷　一,1998「東海のイメージ no.4　加工円盤について」考古学フォーラム 9 .72～77 頁。考古学フォーラム編集部。

安藤広道 ,2003「弥生・古墳時代の各種青銅器」『考古資料大観』 6 .291 ～ 306 頁。東京 小学館。

伊藤太佳彦 ,2000「伝法寺野田遺跡」『平成 11 年度 愛知県埋蔵文化財センター年報』16・17 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

海津正倫 ,1994『沖積低地の古環境学』東京 古今書院。

大崎正敬･早野浩二 ,1998「権現山遺跡 範囲確認調査」『年報 平成 9 年度』76 ～ 77 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

大村　直 ,1984「石鏃・銅鏃・鉄鏃」『史館』17。

加藤安信 ,2003「第 3 節 銅鏃･その他の青銅製品･鉄製品」『愛知県史 資料編 2 考古 2 弥生』780 ～ 785 頁。愛知県。

川添和暁 ,2003「伝法寺野田遺跡」『平成 14 年度 愛知県埋蔵文化財センター年報』16・17 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

篠ヶ瀬享・増子康眞 ,2001「愛知県朝日遺跡採集の銅鏃から」『古代人』61.26 ～ 27 頁。名古屋考古学会。

洲嵜和宏編 ,2003『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

鈴木敏則 ,1997「東海地方の銅鏃」『古文化論叢―伊達先生古稀記念論集』122 ～ 141 頁。伊達先生古稀記念編集委員会。

澄田正一・大参義一・岩野見司 ,1967『新編 一宮市史 資料編二』一宮市。

高田浩司 ,2001「弥生時代銅鏃の二つの性格とその特質―石鏃・鉄鏃との比較を通じて―」『考古学研究』47-4.34 ～ 54 頁。考古学研究会。

田中勝弘 ,1986「銅鏃」『弥生文化の研究』 9 .91 ～ 98 頁、東京 有山閣。

田中伸明編 ,1999『三ツ井遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

土本典生 ,2000『元屋敷遺跡発掘調査報告書 III』一宮市教育委員会。

土本典生 ,2004『元屋敷遺跡発掘調査報告書 II』一宮市教育委員会。

早野浩二 ,1999「伝法寺野田遺跡」『年報 平成 10 年度』10 ～ 13 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

早野浩二・鬼頭　剛・尾崎和美 ,1999「伝法寺野田遺跡における弥生時代中期水田跡の調査」『年報 平成 10 年度』108 ～ 127 頁。愛知県埋蔵文化財センター。

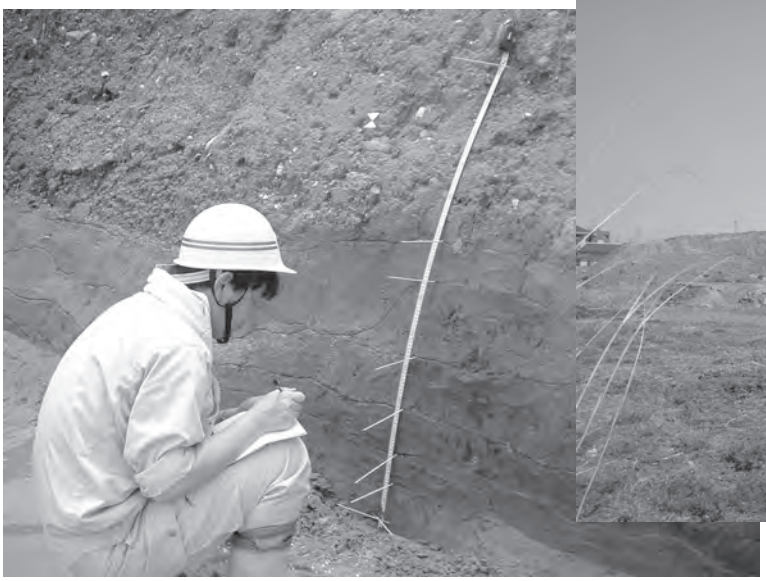
早野浩二編 ,2003『権現山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

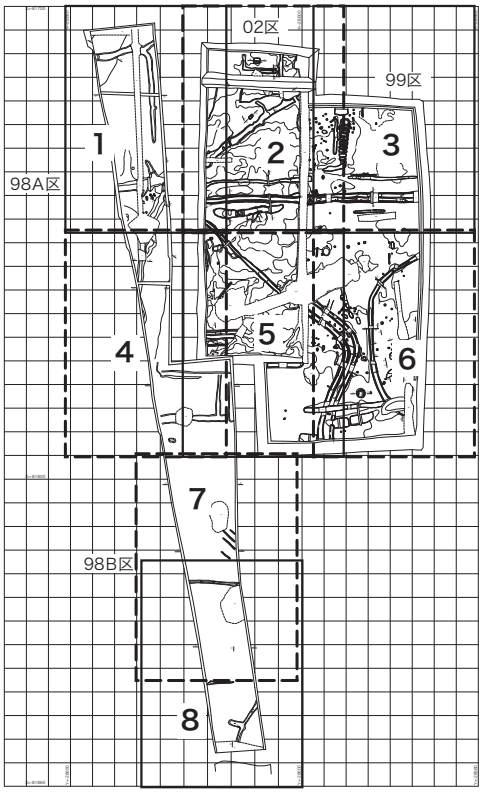
早野浩二・宮腰健司編 ,2006『島崎遺跡・伝法寺本郷遺跡・中之郷北遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。

松岡千年ほか ,2003『深橋前遺跡』岐阜県文化財保護センター。

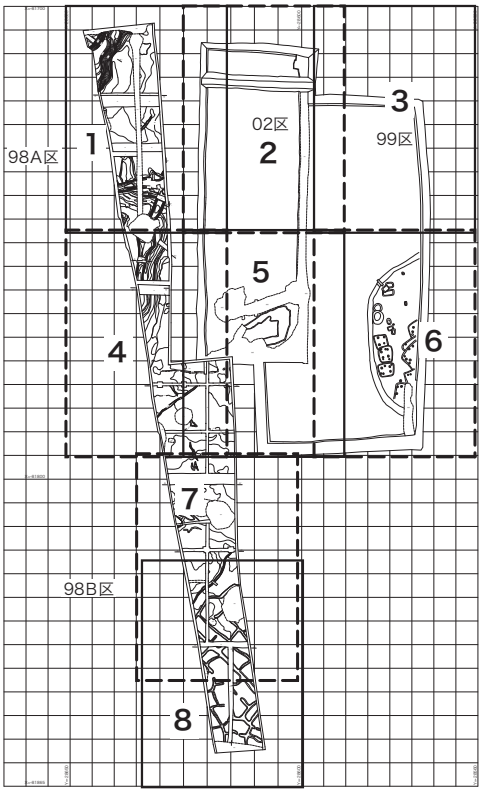
森井貞雄 ,1985「無茎銅鏃の分布とその意味」『同志社大学考古学シリーズ II　考古学と移動・移住』245 ～ 251 頁。同志社大学考古学シリーズ刊行会。

遺構図版・写真図版





古代以降

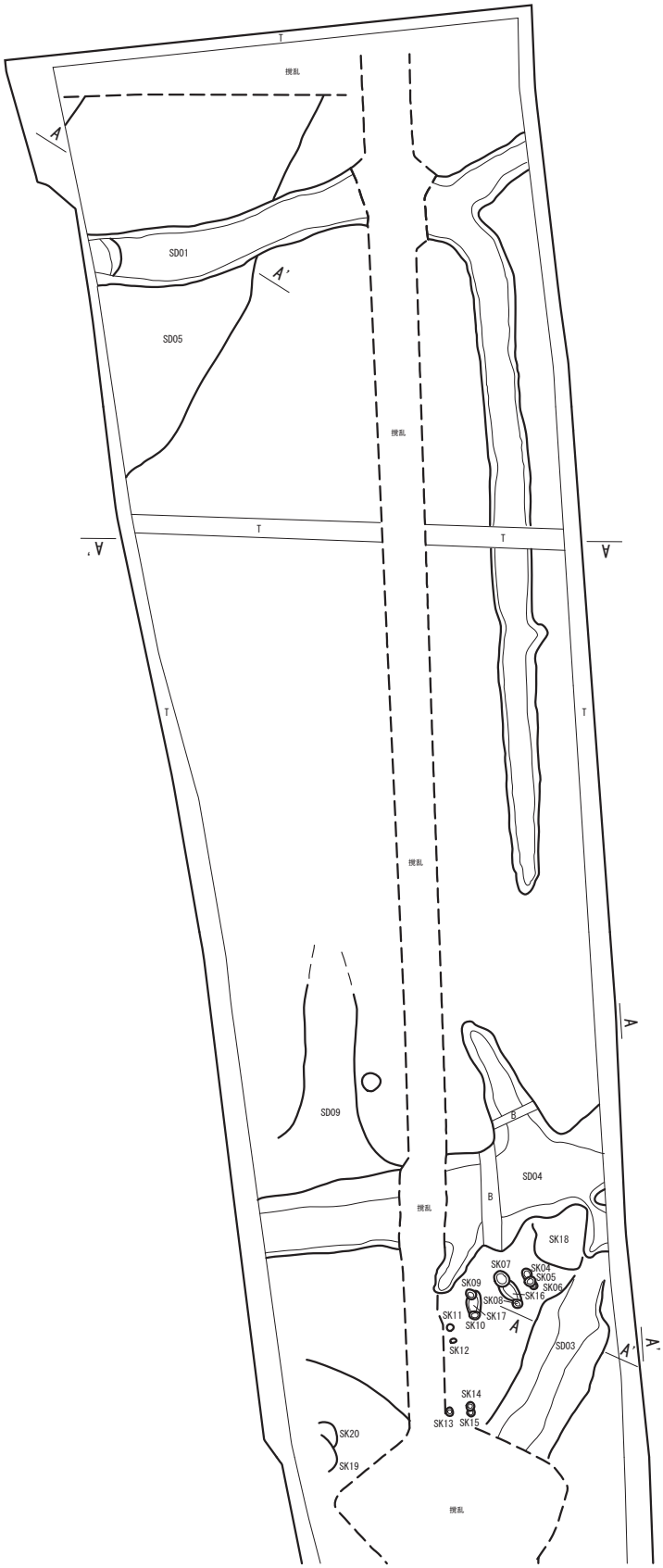


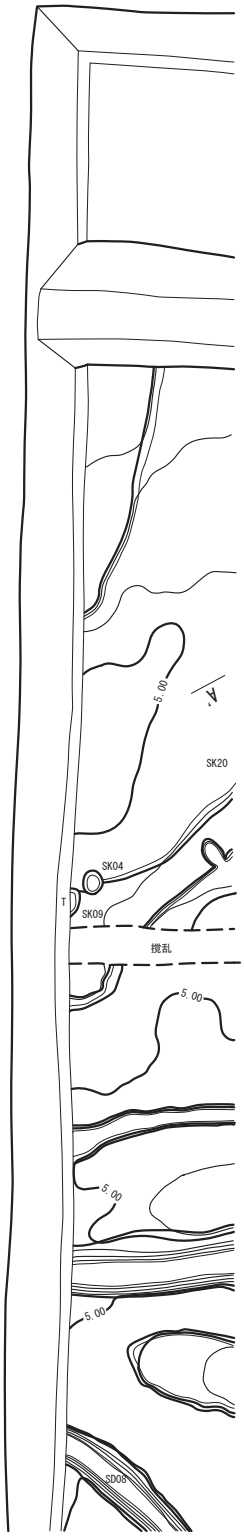
弥生時代・古墳時代

遺構図版割付

（遺構図版の縮尺は 1：200 である）

遺構平面図版（古代以降）1

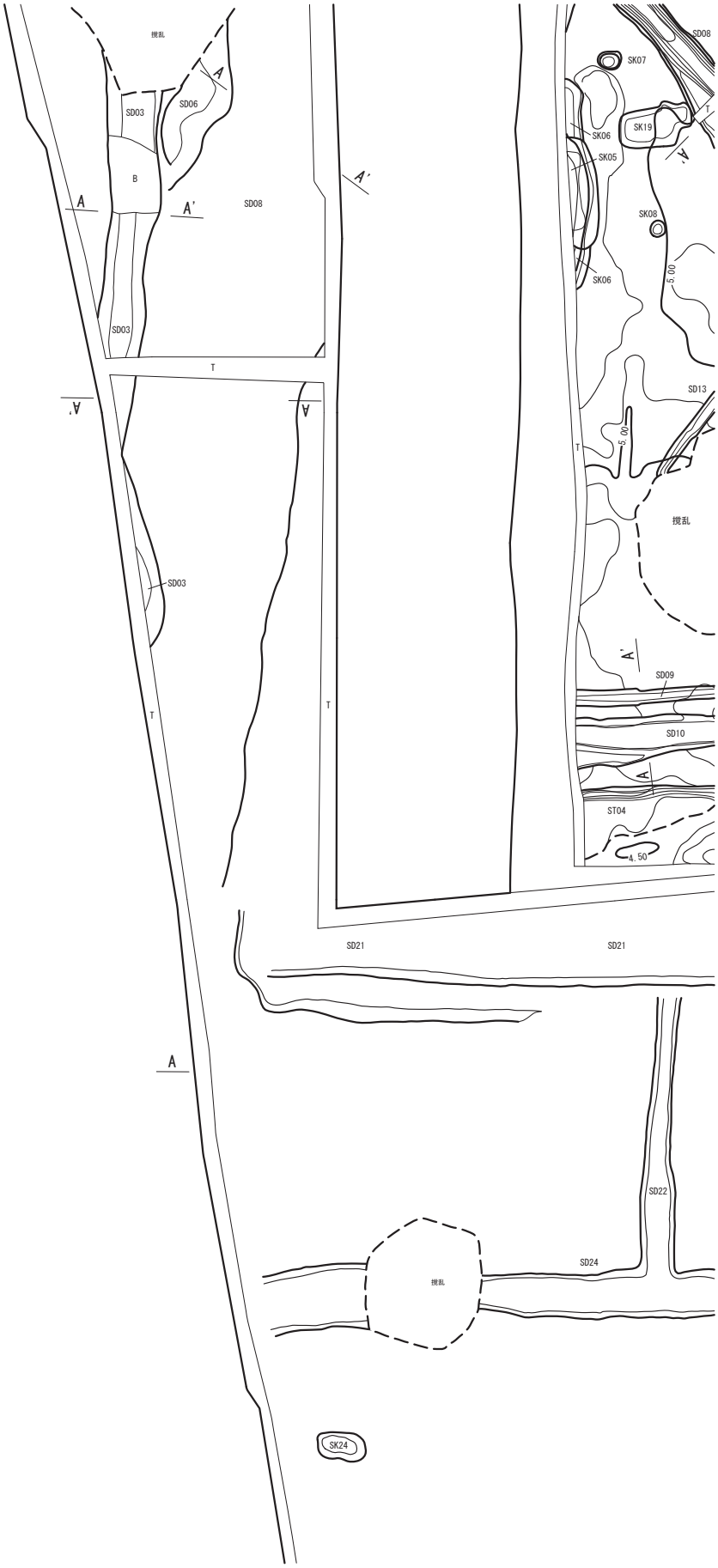




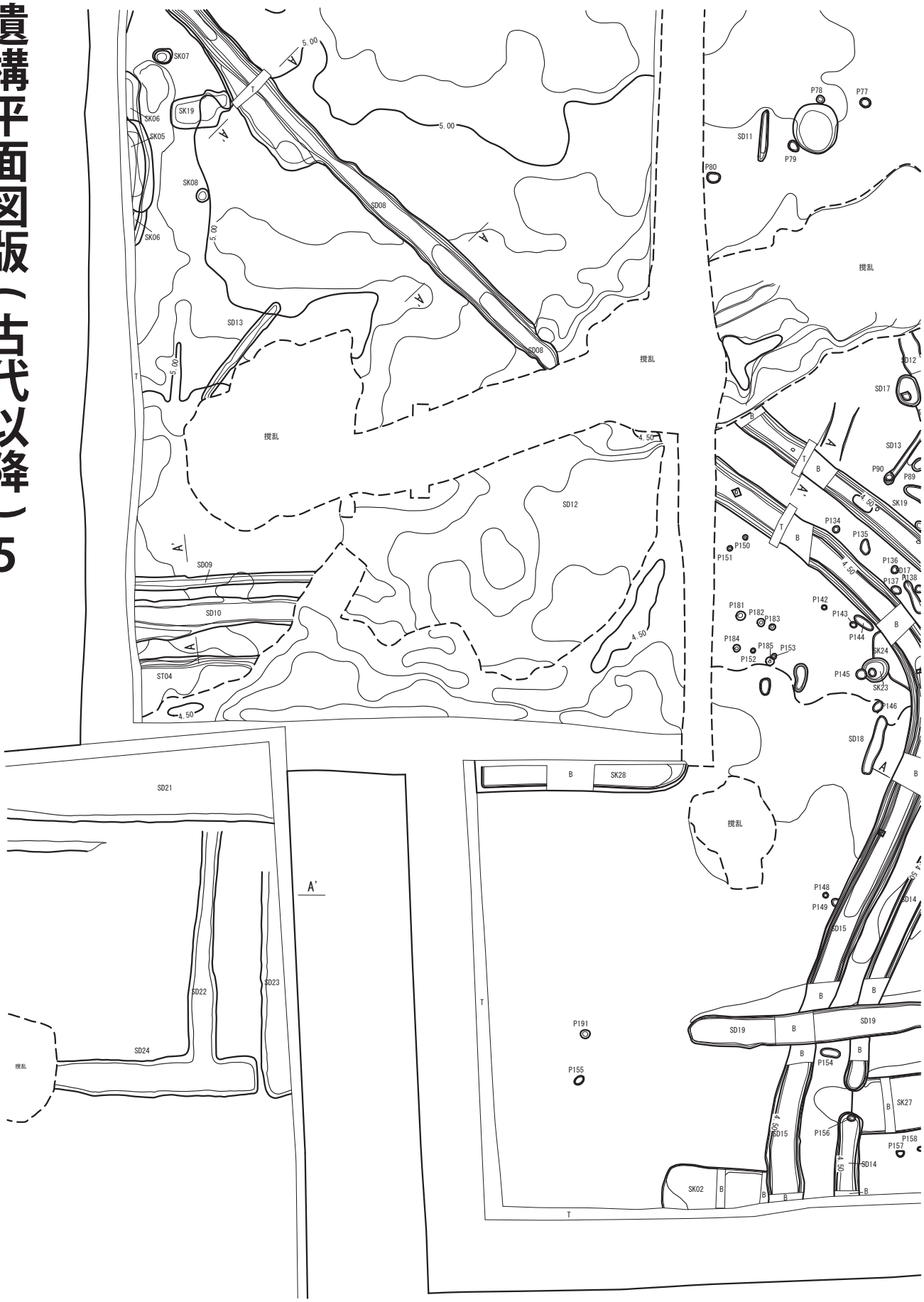
遺構平面図版（古代以降）2

遺構平面図版（古代以降）3

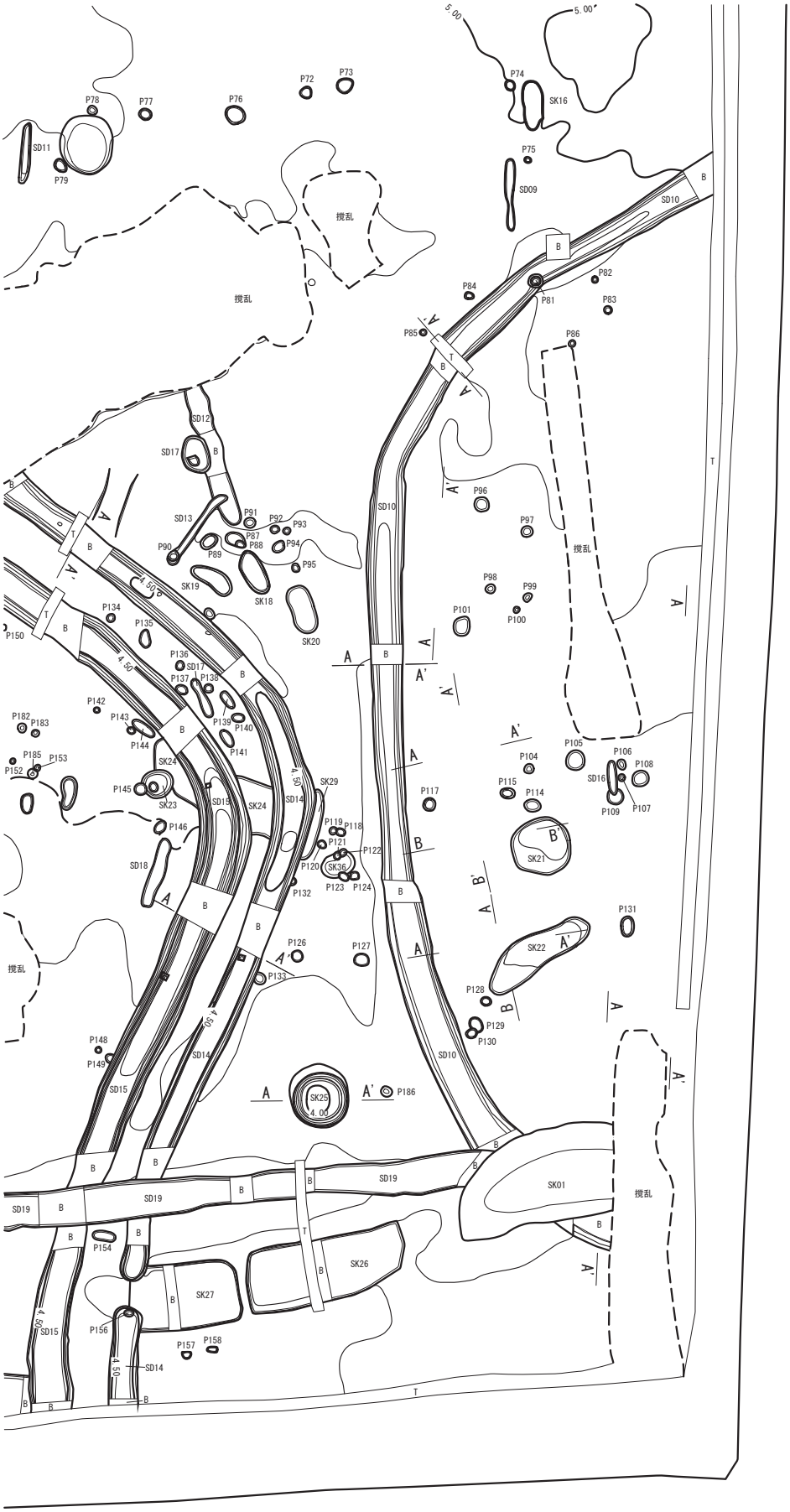
遺構平面図版（古代以降）4



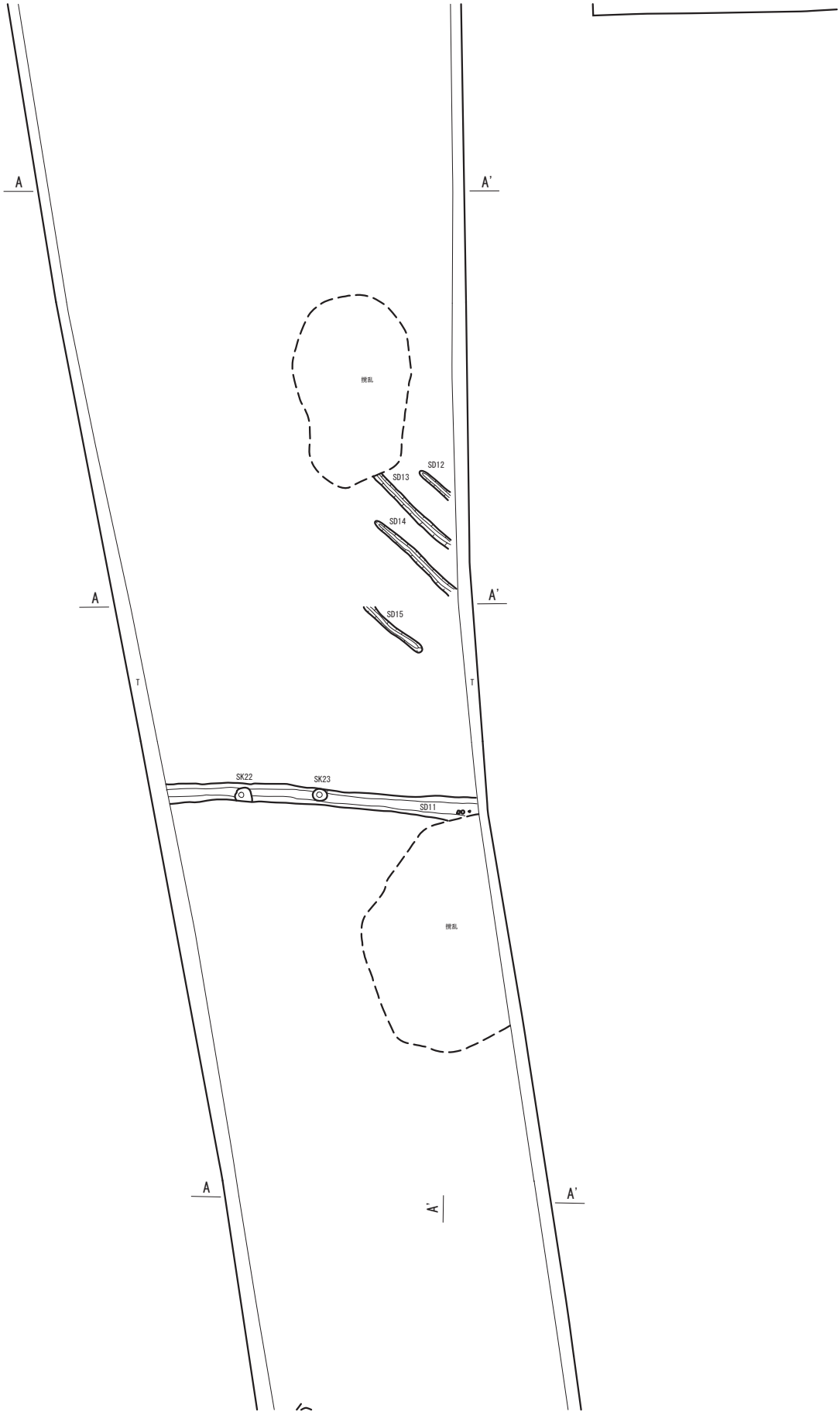
遺構平面図版（古代以降）5



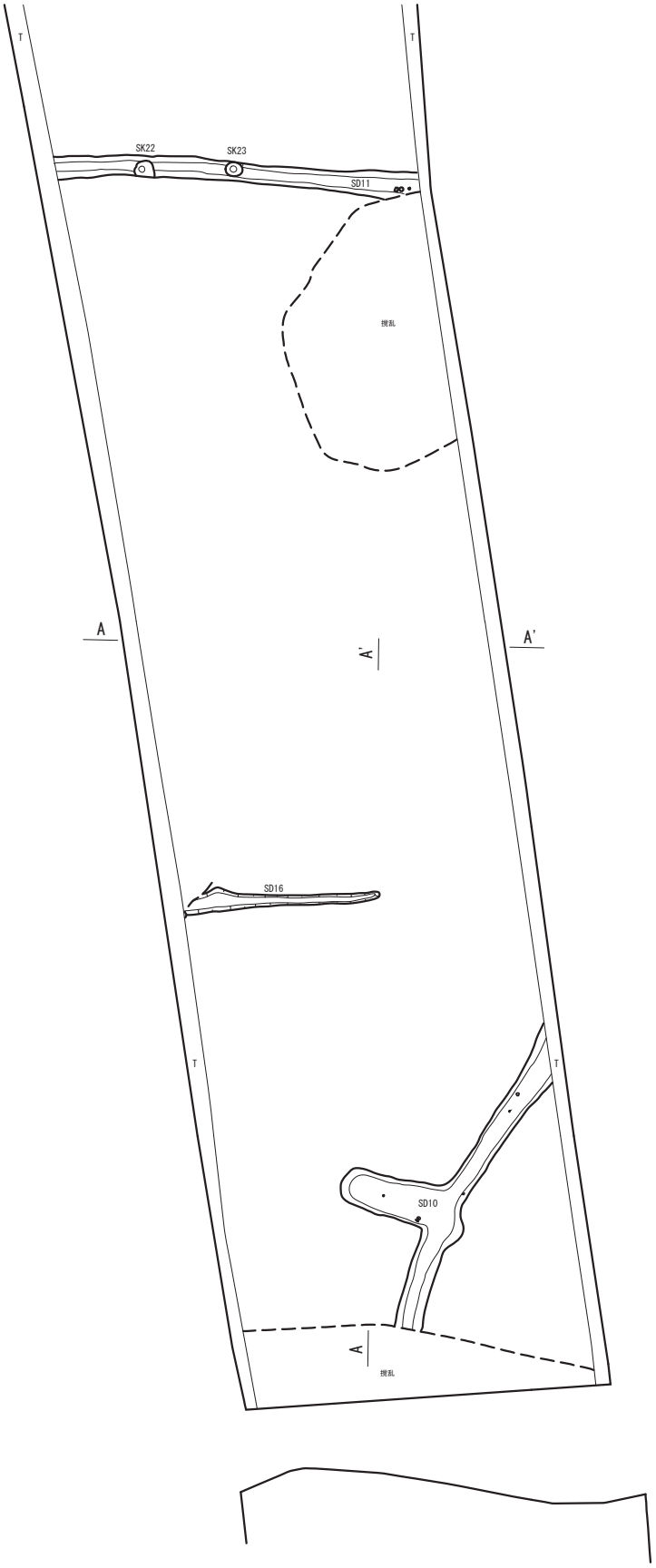
遺構平面図版（古代以降）6



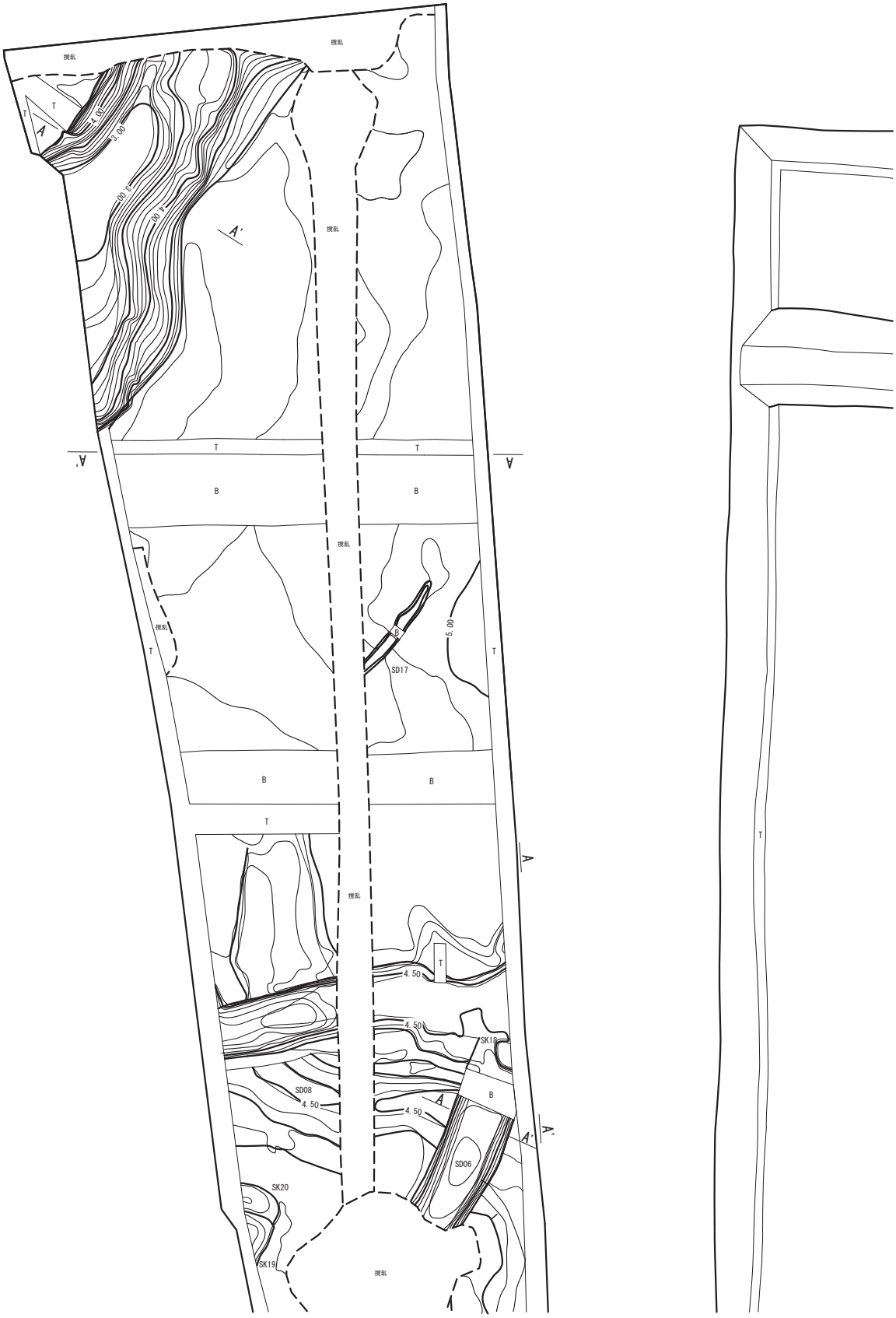
遺構平面図版（古代以降）7



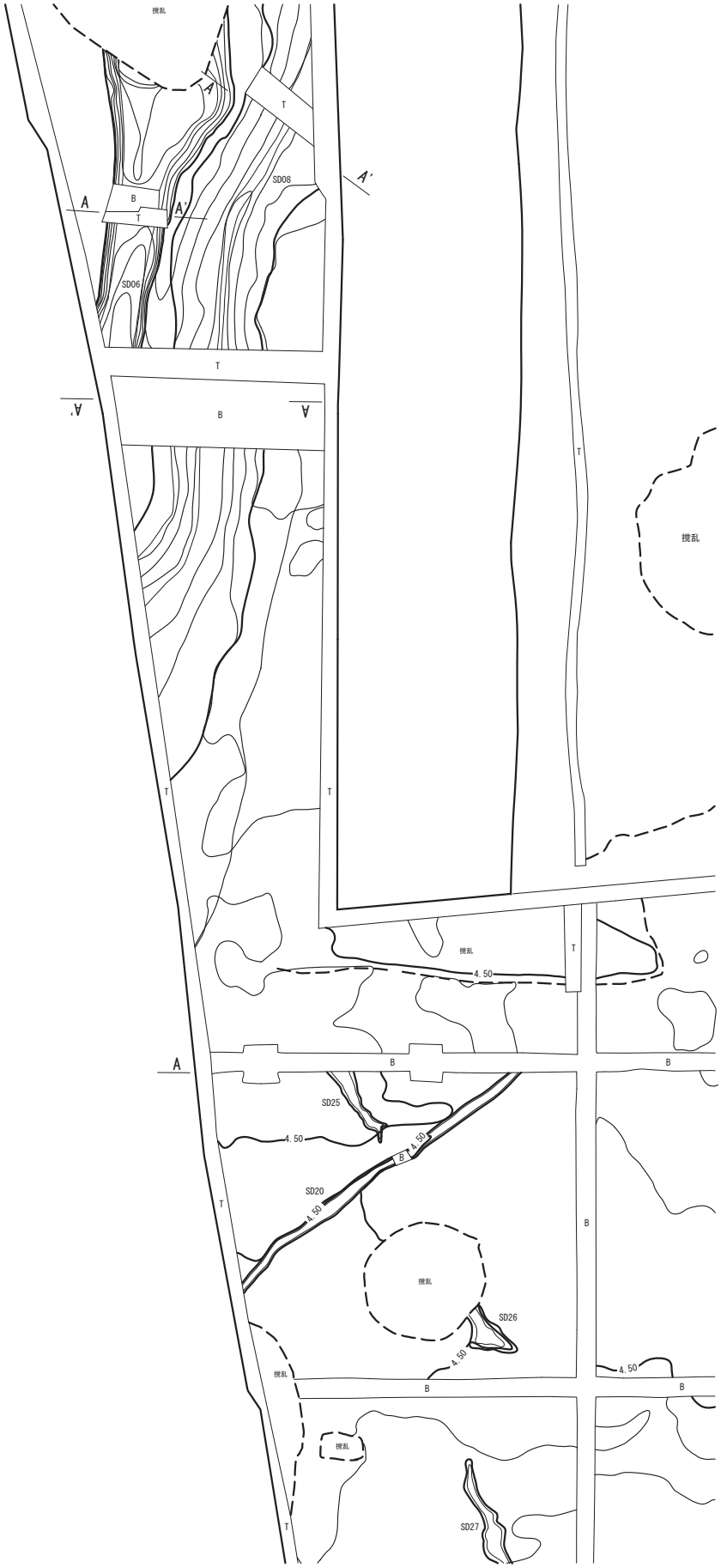
遺構平面図版（古代以降）8



遺構平面図版（弥生・古墳）1

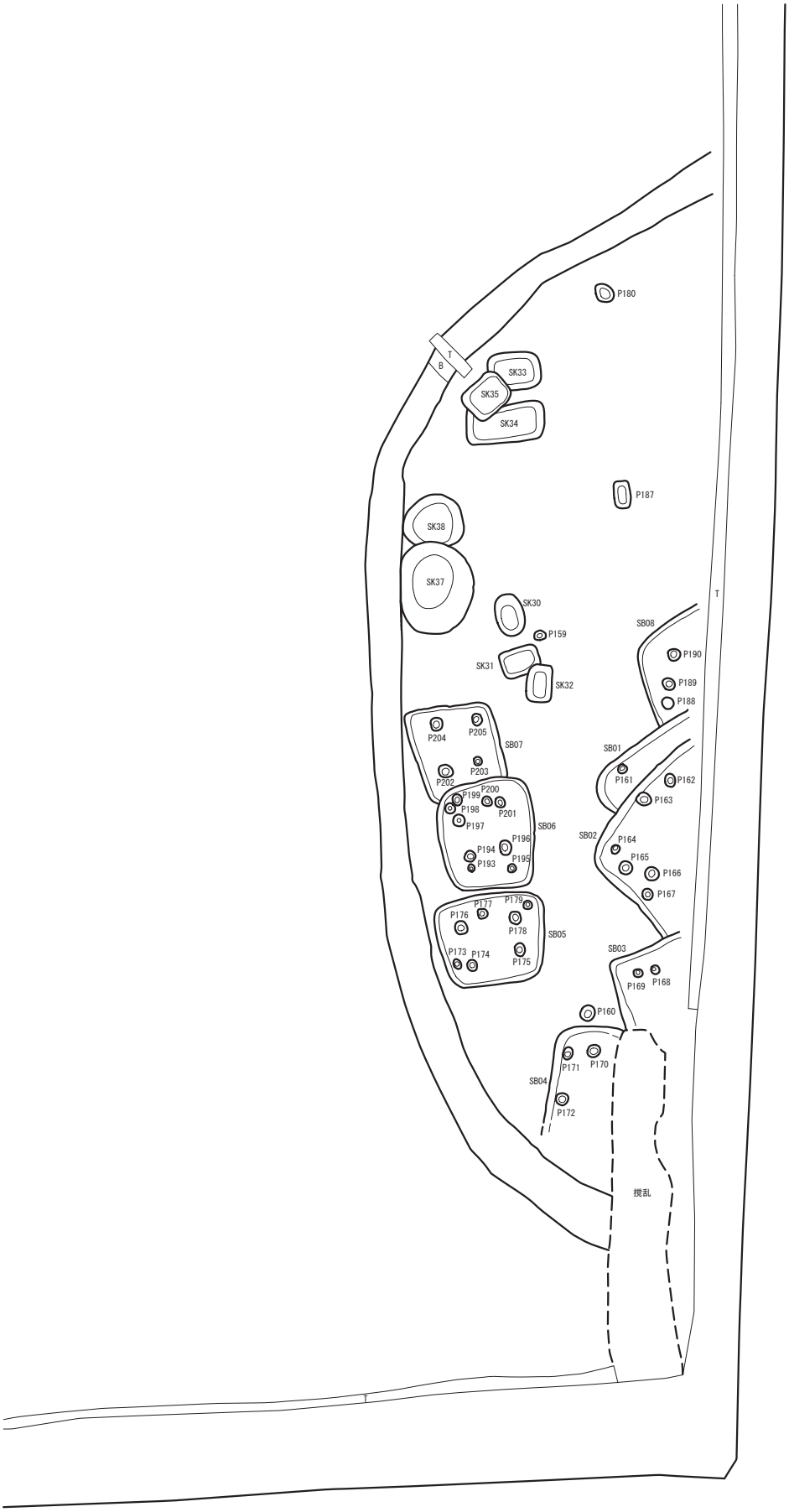


遺構平面図版（弥生・古墳）4

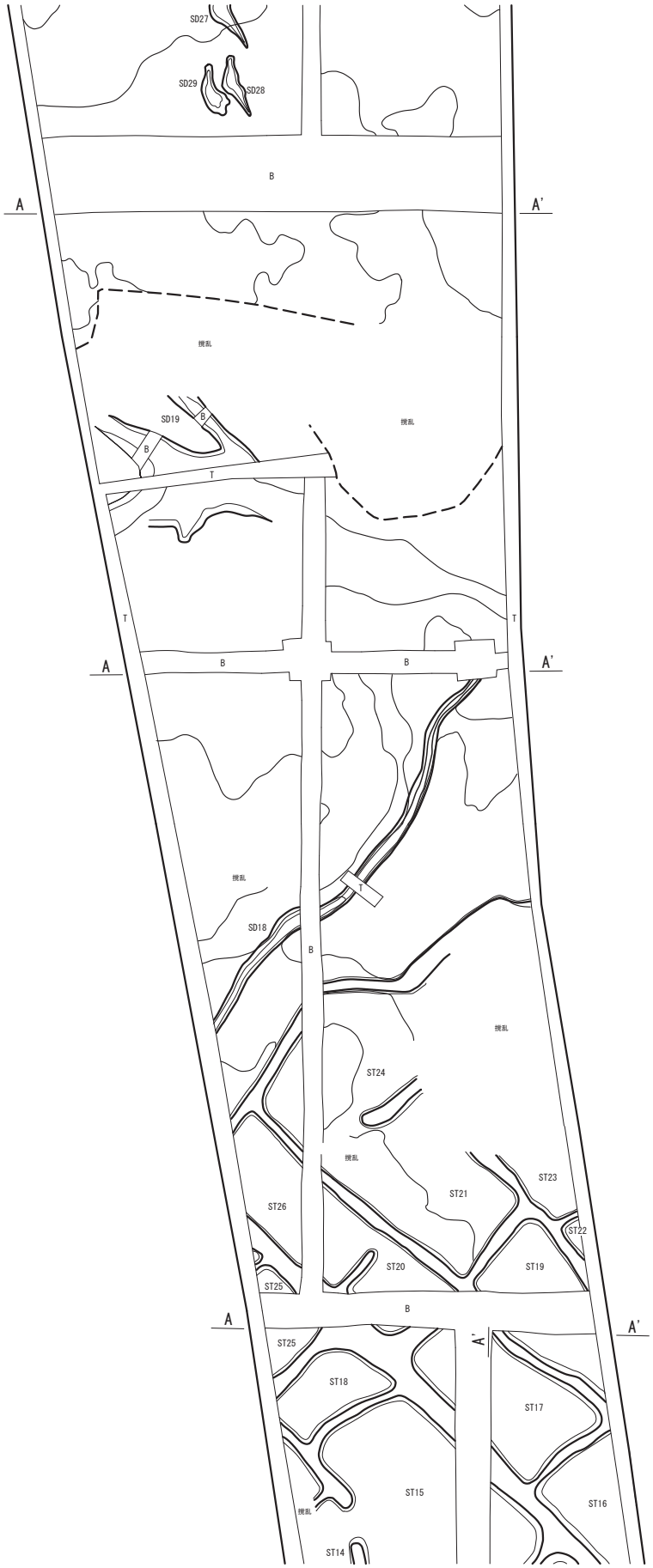


遺構平面図版（弥生・古墳）5

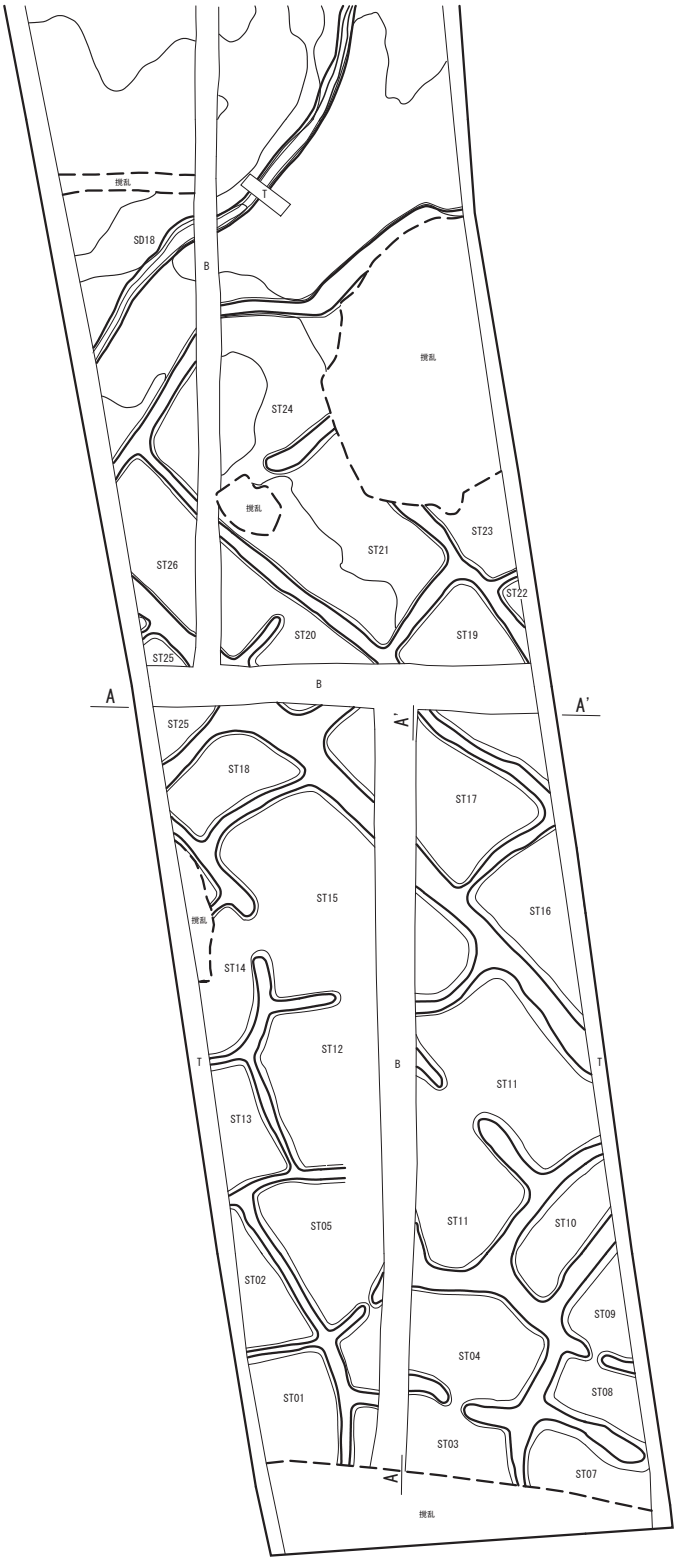
遺構平面図版（弥生・古墳）6



遺構平面図版（弥生・古墳）7



遺構平面図版（弥生・古墳）8



写真図版 1

98 区 弥生時代〜古墳時代遺構全景 (南より)

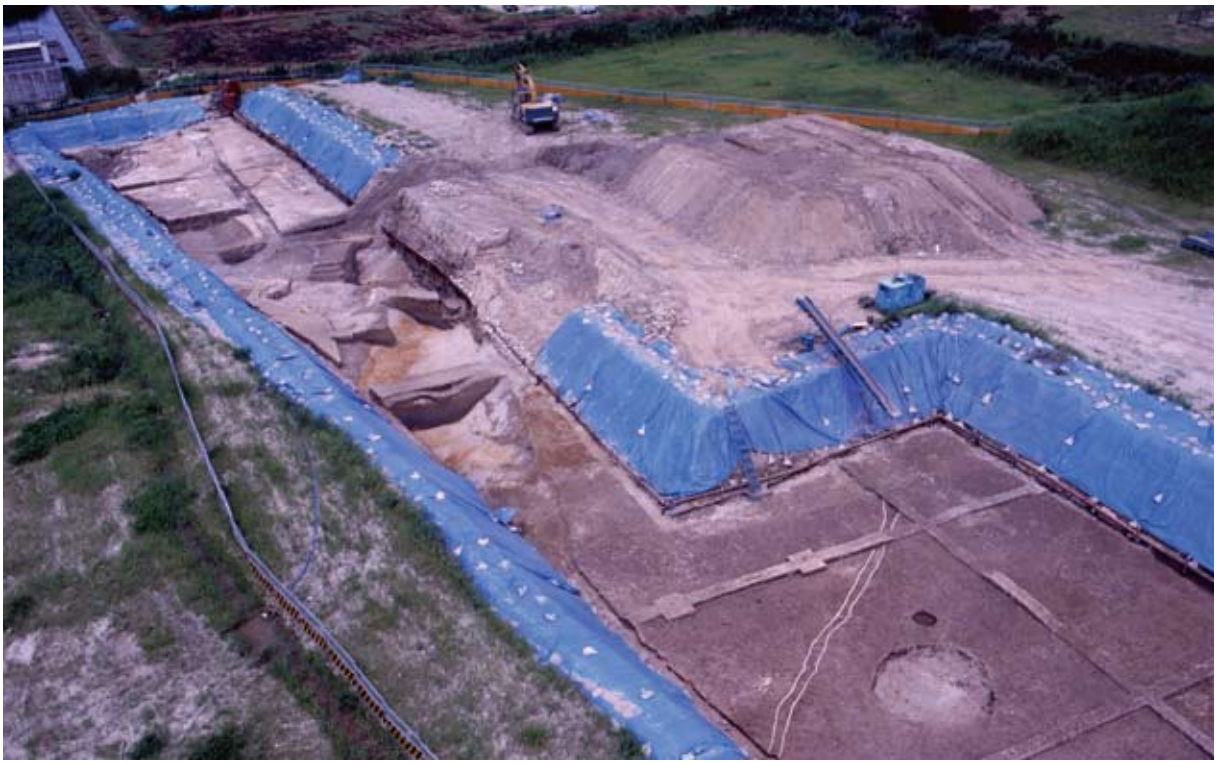
写真図版 2

98 B区 水田跡全景 (北東より)

98 B区 水田跡近景 (北西より)

98 B区 ST04・05 水口付近 (北西より)

98 B区 水田跡近景 (北より)



98 A区 弥生時代〜古墳時代遺構全景 (南西より)

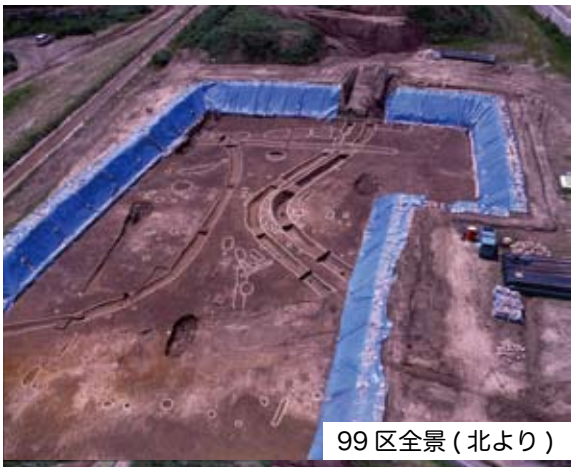
写真図版 3

98 A区 SD08(東より)

98 A区 SD08 セクション

写真図版 4

99 区全景 (南より)



99 区全景 (北より)

99 区全景 (北より)

99 区全景 (北より)

99 区全景 (東より)

写真図版 5

99 区 SD15

99 区 SD14

99 区 SD07

99 区 SD10

99 区弥生時代遺構全景 (南より)

02 区全景 (北より)

02 区 SD05

02 区 SD06

02 区 SD12(東より)

写真図版7


1


2


4


5


11


15


16


17


30


36


19


10


13


33


32


14


18


12


24


29


25


26


22


23


28


31


27


3


20


21


41


35


6

9

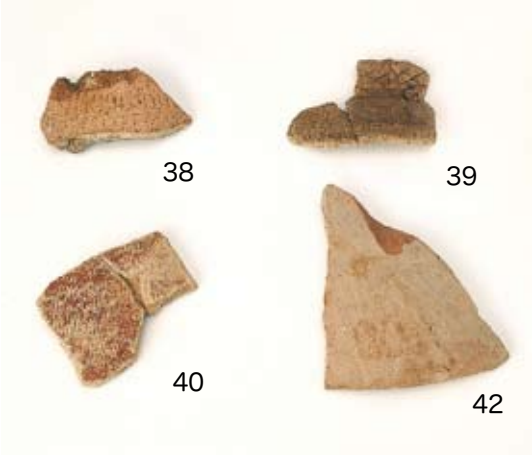

7


8


37


43

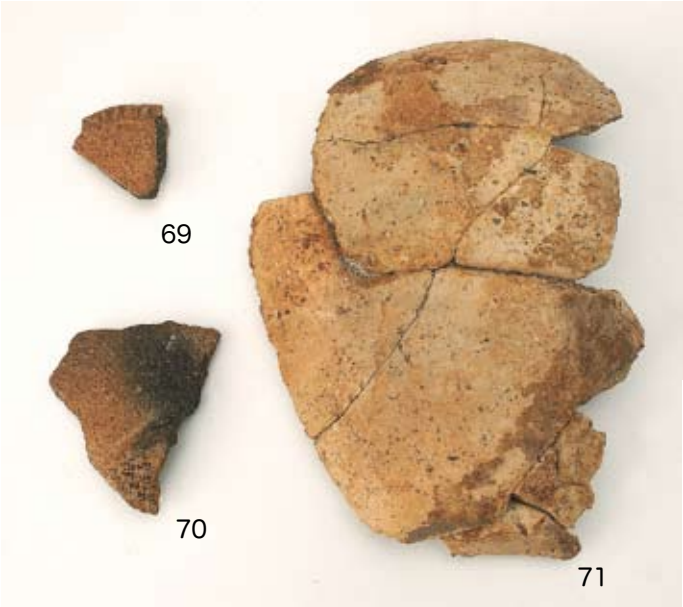
写真図版 8


38
39
40
42


44
45
46


47
48


49
50


69
70
71

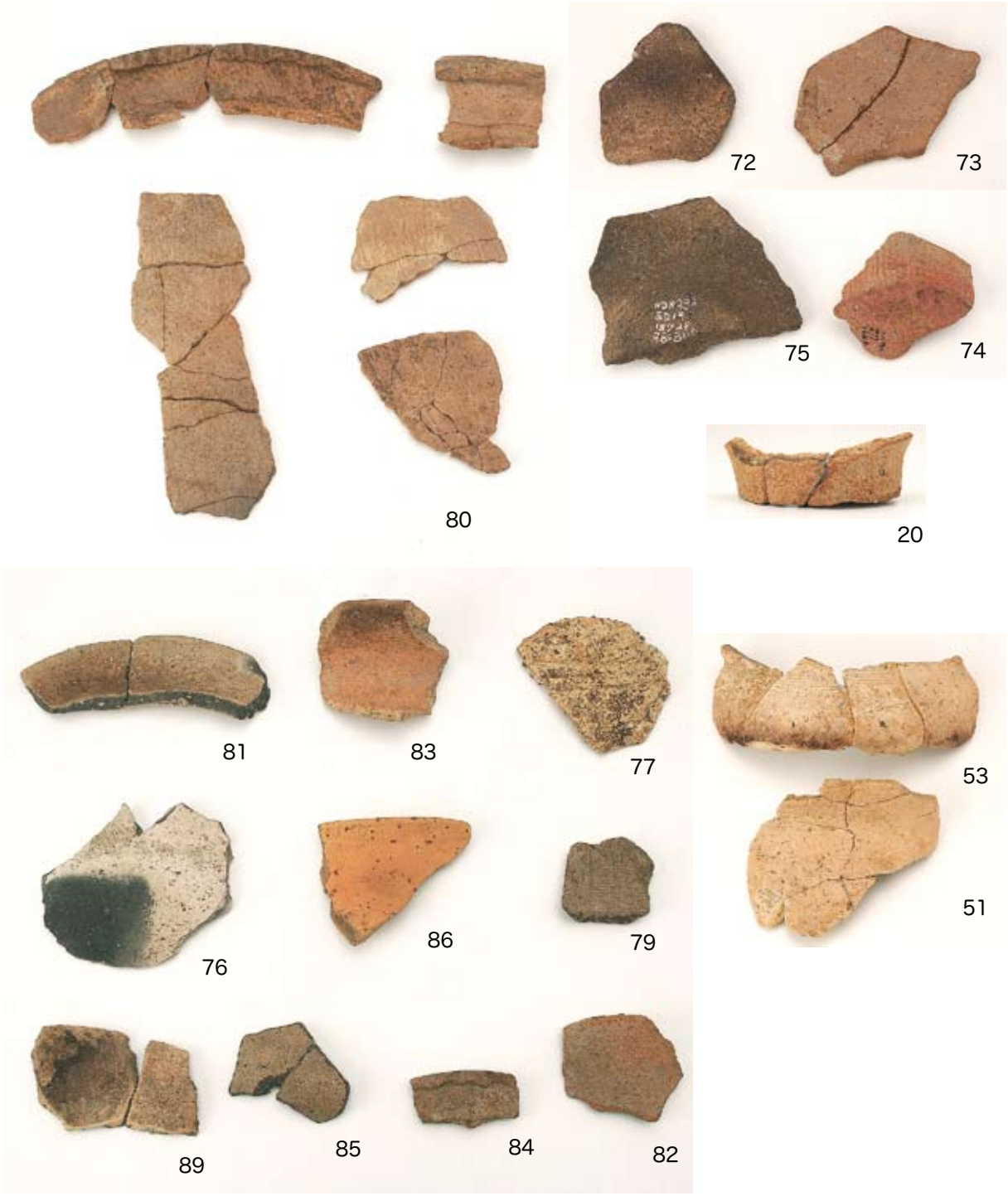

60
61
62


87
88


58
59
67
64
65
63


55
56
54

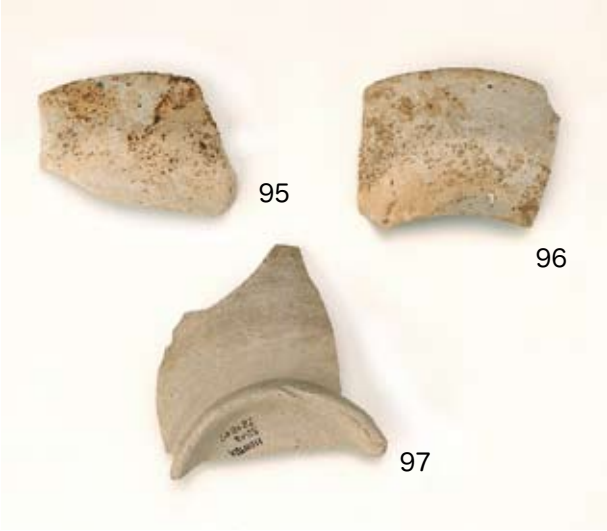
写真図版 9



写真図版10


90
94


98


95
96
97


117
118
119


111


101
108
107
102
103
100
105
104
106


116
113
114
112


150


164

写真図版11


135


124


129


123


139


143


142


145


159


136 138


147

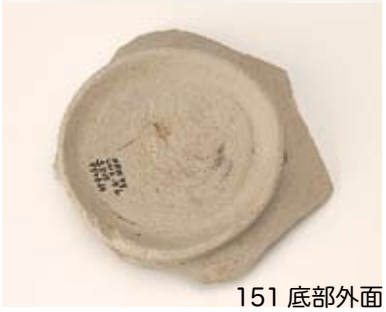

173


157


151


160


158


151 底部外面


160 底部外面


140


161


159

写真図版 12


302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321


322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336

写真図版13


501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
518


517
509
520


301

報告書抄録

ふりがな	でんぼうじのだいせき
書名	伝法寺野田遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第141集
編著者名	川添和暁・鬼頭　剛・古澤　明・平尾良光・榎本淳子・早川泰弘
編集機関	財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団　愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24
発行年月日	西暦2007年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
でんぼうじのだいせき 伝法寺野田遺跡	いちのみやしたんようちょう 一宮市丹陽町	2302	103	35度15分46秒	136度50分39秒	199804～200207	5,940㎡	五条川右岸流域下水道建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伝法寺野田遺跡	水田・集落遺跡	弥生～古墳	水田跡・溝・土坑など	土器・石器・銅鏃など	
		古代～中世	水田跡・区画溝・土坑など	陶器・加工円盤など	
		近世	水田跡・溝など	陶器など	

文書番号　発掘届出(10埋セ108号・10.4.2／ 11埋セ78-1号・11.4.1／13埋セ第176号・14.3.5)
通知(10教文第61-7号・10.4.14／ 11教文第61-4号・11.4.19／ 13教文第36-27号・14.3.14)
終了届(10埋セ第227号・10.9.24／11埋セ・11.8.4／14埋セ第55号・14.7.31)
保管証・発見届(10埋セ第228号・10.9.24／11埋セ・11.8.4／14埋セ第55号・14.7.31)
鑑査結果通知(10教文第61-7号・10.11.9／ 11教文第61-4号・11.10.28／ 13教文第36-27号・14.11.5)

要約　遺跡のあり方としては、弥生時代～古墳時代と古代以降に大きく二分できる。弥生時代～古墳時代の景観は、不明瞭な集落域と水田跡とがある。これらは同時期の所産ではなく、時期幅がある可能性を指摘した。大畦畔脇から出土した銅鏃については、当地域における鏃・刺突具類との比較検討を通じて、若干の評価を行った。古代以降では中世初頭に区画溝を伴う屋敷地が形成された可能性がある以外は、近年に至るまで水田・畑など、繰り返し耕地として利用されていたことが明らかとなった。

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第141集

伝法寺野田遺跡

2007年3月31日

編集・発行　財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印　　刷　新日本法規出版株式会社